續國譯漢文大成

文學部 六

309
65

帙入

始

續國譯漢文大成

文學部第六册（第二帙の二）

李太白詩集 中の二

吉田徳郎氏 寄贈本

昭和六十三年 帝國圖書館

309
65

李太白集 卷十

贈王判官。時余歸隱。居廬山屏風疊

王判官に贈る、時に余、歸隱し、廬山屏風疊に居る。

昔別黃鶴樓。蹉跎淮海秋。
むかし別る黃鶴樓、蹉跎たり淮海の秋。

俱飄零落葉。各散洞庭流。
俱に零落の葉を飄し、各〻洞庭の流に散ず。

中年不相見。蹭蹬遊吳越。
中年相見えず、蹭蹬、吳越に遊ぶ。

何處我思君。天台綠蘿月。
何の處か、我、君を思ふ。天台綠蘿の月。

會稽風月好。却遶剡谿廻。
會稽風月好し、却つて剡谿を遶つて廻る。

雲山海上出。人物鏡中來。
雲山、海上に出で、人物、鏡中に來る。

一度浙江北。十年醉楚臺。
一たび、浙江をわたつて北し、十年、楚臺に醉ふ。

荆門倒屈宋。梁苑傾鄒枚。
荆門、屈宋を倒し、梁苑、鄒枚を傾く。

苦笑我誇誕。知音安在哉。
大盜割鴻溝。如風掃秋葉。
吾非濟代人。且隱屏風疊。
中夜天中望。憶君思見君。
明朝拂衣去。永與海鷗羣。

【字解】【一】黄鶴樓　前に見ゆ。【二】淮海　揚州を指す。【三】蹭蹬　道を失ふ。【四】天台　山の名、台州天台縣の西一百十里に在る。藝文類聚に引けゐる名山記に「天台山は剡縣に在り、卽ち是れ衆聖の降るところ、葛仙公山なり」とある。【五】會稽　世說の註に「會稽郡記に曰く、會稽郡に名山水多し、峰嶂陳峻、雲霧を吐納し、松栝楓柏、擢幹蔭條、潭壑鏡徹、清流瀉注。王子敬、これを見て曰く、山水の美、人をして應接に暇あらざらしむ」とある。【六】剡溪　太平寰宇記に「剡溪は、越州剡縣の南一百五十步に在り、一源は台州天台縣に出づ、卽ち王子猷雪夜戴逵を訪ふの所、一名戴溪」とある。【七】鏡中來　初學記に「輿地志に曰く、山陰の南湖、郊郭を帶し、自水翠綠、互に相映發し、鏡の若く、圓の若し、故に王逸少曰く、山陰路上に行くは、鏡中に在つて遊ぶが如し」とある。【八】浙江　夢粱錄に「浙江は、杭州の東南に在り、これを錢塘といふ、江內に浙山あり、正に江中に居る、潮水、山下に投じ、曲折して行く」とある。【九】楚塞　楚地の臺、章華陽雲の若きの類。【一〇】荆門　荆州の地、唐の江陵郡、今の湖廣荆州府、その地に荆門山あるが故に名づく。【一一】屈宋　屈原・宋玉、ともに荆州に生まる。【一二】梁苑　古しへの睢陽の地、唐時の宋州で、睢陽郡の宋城縣、今の河南歸德州、漢時梁の孝王の苑囿あるが故に名づく。【一三】鄒枚　鄒陽・枚乘ともに梁の孝王の客。【一四】大盜　安祿山を指す。【一五】鴻溝　史記に「項羽、乃ち漢王と約して、天下を中分し、鴻溝より西を割いて漢となし、鴻溝より東を割いて楚となす」とあつて、蘆溝は、滎陽の東南二十里に在りといひ、文穎は「滎陽の下に於て河を引き、東南を鴻溝となし、以て、宋・鄭・陳・蔡・曹・衛と、濟・汝・淮・泗とを通じて、楚に會す、卽ち、今の官渡水なり」といつて居る。【一六】如風掃秋葉　十六國春秋に「殘胡を掃平する、風の葉を掃ふが如し」とあるに本づく。【一七】海鷗　列子の事を用ふ、前に見ゆ。

【題義】一統志に「屏風疊は、廬山に在り、五老峰よりして下れば、九疊、屏の如し。游宦紀聞、九疊屏風の下、舊と太白の書堂あり、詩あり、曰く吾非濟代人、且隱屏風疊」とある。この詩は、安祿山の亂の初に、李白が廬山の屏風疊といふ處に歸隱し、そして王判官に贈つたのである。王判官は如何なる人か分らぬ、判官は官名、隋唐以來、節使の下に在つた屬名で、幕府に佐相し、軍事を裁判したといふから、今の參謀である。

【詩意】君との交際も、久しいものであるが、さきに、黃鶴樓を去つて、秋淋しき頃、揚州の地に零落し、ともに落葉の風に飄るが如く、はては、洞庭の流に散り落ちた。ここまでは、君と一所であつたが、中年以後、久しく遇はず、そして、われは、相變らず、失意に苦みつつ、吳越の地に遊んだが、綠蘿の間にほのめく天台の月に對しては、又ぞろ君を思ひ　一所に此に來たならば、さぞ面白からうと心に念じて居た。元來、吳越の南なる會稽は、音に聞く風月の勝區であつて、水は剡溪に通じ、旅人も、そこを繞つて行くやうになつて居る。そして、海上には、雲と見まがふ山山が亂立し、水は、さながら鏡の如く、人物が其中に浮んで見える。かくて、一たび浙江を渡つて、北地に赴き、

十年の久しき、楚地の諸臺に醉ひ、荆門に至つては、むかし其地に生まれし屈原・宋玉を壓倒し、梁苑に至りては、むかし其地に文名を馳せたる鄒陽・枚乘の徒を凌ぎ、意氣揚揚として居たが、人人は、唯だ我を笑つて、大法螺吹だといつて、誰も相手に成らず、知音などは、絶無であつて、それにつけても、愈よ以て君を思つたのである。すでにして、安祿山、一たび、亂を爲し、むかし、楚漢が鴻溝を界として、對立したやうに、官軍と賊軍と、自然境地を分ち、そして、賊勢愈よ盛にして、たとへば、西風が地を捲いて秋葉を掃ふが如くである。しかし、遺憾ながら、自分には、濟世の才が無いから、止むを得ず、亂を避け、それから廬山に入つて屏風疊に隱れたのである。かくて、夜半の頃、中天を望み、君を憶うて、是非、君に逢ひたいと思ふが、萬里相隔てて意の如くならず、明朝衣を拂つて、この地を去らば、海鷗と友になり、全く浮世と絶緣して仕舞ふことに成るから、そこで、この詩を賦して、君に寄せる始末である。

【餘論】この詩は、離合常ならざるより、延いて、自己の遊跡に及び、その間、絶えず、相思の意を寓し、そして、刻下の騷亂に及び、今次隱居したことを述べたので、章法整然として紊れず、旨意も亦た極めて面白い。

在水軍宴贈幕府諸侍御

水軍の宴に在り、幕府の諸侍御に贈る

(一)月化五白龍。翻飛凌九天。
月は五白龍に化し、翻飛して九天を凌ぐ。

(二)胡沙驚北海。(三)電掃洛陽川。
胡沙、北海を驚かし、電掃す洛陽の川。

(四)虜箭雨宮闕。(五)皇輿成播遷。
虜箭、宮闕に雨ふり、皇輿、播遷を成す。

(六)英王受廟略。(七)秉鉞清南邊。
英王、廟略を受け、鉞を秉つて、南邊を清む

(八)雲旗卷海雪。金戟羅江煙。
雲旗、海雪に卷き、金戟、江煙に羅ぬ。

聚散百萬人。(九)弛張在一(一〇)賢。
聚散、百萬人、弛張、一賢に在り。

(一一)霜臺降羣彥。(一二)水國奉戎旃。
霜臺、羣彥を降し、水國、戎旃を奉ず。

繡服開宴語。(一三)天人借樓船。
繡服、宴語を開き、天人、樓船を借る。

如登(一四)黃金臺。遙謁紫霞仙。
黃金臺に登つて、遙に紫霞の仙に謁するが如し。

卷身編蓬下。冥機四十年。
身を卷く編蓬の下、冥機四十年。

寧知草間人。腰下有(一五)龍泉。
寧ろ知らむや、草間の人、腰下に龍泉あるを。

浮雲在(一六)一決。誓欲清幽燕。
浮雲、一決に在り、誓つて、幽燕を清めむと欲す。

願與四座公。靜談金匱篇。願はくは、四座の公と、靜に金匱の篇を談せむ。
齊心戴朝恩。不惜微軀捐。心を齊しくして、朝恩を戴き、微軀を捐つるを惜まず。
所冀旄頭滅。功成追魯連。冀ふところは、旄頭滅し、功成つて、魯連を追はむ。

【字解】【一】月化五白龍　十六國春秋に「慕容熙の建始元年、太史丞梁延年、夢に月化して五白龍となる。夢中、これを占して曰く、月は臣なり、龍は君なり、月、化して龍となる、當に臣にして君と爲るものあるべし」とある。【二】電掃　電光の如く急に掃ふ。【三】皇輿　天子の乘輿。【四】掃迴　都を出て遷移する。【五】英王　英明なる諸王、ここでは永王璘を指す。【六】廟略　廟堂の政治方針、七廟に於て決したる兵謀。【七】鉞　斧鉞、天子より賜はる節信。【八】雲旗　熊虎の旗、その高きこと、天に至るが故に云ふ。【九】弛弧　禮記に「一弧一弛は、文武の道なり」とある。【一〇】一賢　漢書に「百萬の衆も一賢に如かず」とある。【一一】霜臺　御史臺、御史は風霜の任たるが故に云ふ。【一二】水國　水邊の地、江東・江南を指す。【一三】戎旅　軍隊の旗。【一四】天人　永王を美していふ。【一五】樓船　前に見ゆ。【一六】黃金臺　太平御覽に「燕の昭王、郭隗の爲に臺を築く、今幽州の燕王故城中に在り、土人呼んで賢士臺といひ、亦た之を招賢臺といひ、又之を黃金臺といふ」とある。【一七】紫霞仙　霞を餐する神仙。【一八】編蓬　蓬を編んで戶とする。【一九】龍泉　劍の名、越絕書に「歐冶子・干將、茨山を掘ち、その溪を洩らして、鐵英を取り、鐵劍三枚を作爲す。一に曰く龍淵、二に曰く太阿、三に曰く工布」とある。龍泉は、卽ち龍淵。唐人は高祖李淵の諱を避けて、此の如く稱した。【二〇】一決　切りまくる。【二一】金匱　史記に「石室金匱の書を紬く」とあり、その註に「石室金匱は、皆國家藏書の處」とある。【二二】旄頭　卽ち昴、胡星の名。【二三】追魯連　魯仲連の如く、功成り、身退き、爵賜を受けずして去るをいふ。魯仲連の事は、前に屢ば見ゆ。

【語義】漢書「幕府、文書を省る」の註に「晉灼曰く、將軍は、職、征行に在りて、常處なく、所在、治を爲す、故に莫府と言ふなり、或は曰く、衞青、匈奴を征し、大莫を絕ち、大に克つて獲たり、帝、就いて大將軍を幕府中に拜す、故に莫府といふ、莫府の名、ここに始まるなり、顏師古曰く、二說皆非なり、幕府とは、軍幕を以て義となし、古字通じて單用するのみ、軍旅、常の居止なし、故に帳幕を以て之を言ふ。廉頗、李牧、市租を收めて、皆幕府に入る、これ則ち衞青に因つて、始めて其說あるに非ず」とある。幕府とは、中軍、卽ち本營の幕中といふ義である。この詩は、李白が永王璘に招致されたとき、その水軍の宴に列し、幕中の諸侍御に贈つたのである。

【詩意】月が五箇の白龍に化し、飜り飛んで、九天の高きを凌いだといふ昔がたりを其儘に、安祿山、叛を爲し、胡沙は北海の涯より舞ひ起り、電光の如き勢を以て、見る間に洛陽の平原を一掃し、虜兵の射出す箭は、雨の如く、九重の宮闕に降りかかり、天子も、都に居たたまらず、忽ちにして、乘輿播遷の大事變を見るに至つた。この時しも、わが永王は、英明の天資を以て、朝廷の兵謀を承り、斧鉞を手にして南方を鎭撫することになり、雲を拂ふ熊虎の將旗は、海の雪と見まがふ浪を卷くが如く、金戟は、光り耀いて、江天の煙の中に連つて居た。かくて、百萬烏合の大衆が、聚散した處で、一弛一張、文武の道に協ふものは、その頭に立つ一賢に因るので、永王の如き御方が總大將と成つて居られるのは、まことに心强いことである。御史臺よりも、多くの英才の士を派遣せられ、水國に於て、軍旗を奉じて、皆永王に從つて、その命を受くることとなり、そこで、一夕、立派な禮

服を著用して、酒宴の席を開き、永王は、金枝玉葉の御身を以て、態態、この樓船に臨御せられたので、ここに列席するものは、かの招賢の名ある黄金臺に上り、そして、超人的に紫霞を餐して居る仙人に拜謁するやうな想がした。われ李白は蓬戸の中に身を卷いて、隱居し、胸中の機略を用ひずに居たこと、四十年の久しきに及んだが、今度といふ今度は、愈よ永王の招命に應じて、ここに馳せ參じたので、もともと草間に住む賤しき者ではあるが、英志壯氣、凛然たることは、腰下に龍泉の寶劍を佩びて居る一事を以ても、御分かりに成ることと思ふ。かくて、目に餘る滿天の浮雲を切り卷くり、誓つて、賊の根據地たる幽燕の地を鎭めやうと思ふので、願はくは、四座の諸公とともに、この席上に於て、靜に國家の祕計に就いて御相談を致したい。吾吾どもは、心を齊しくし、天朝の御恩を戴いて、毎毎感激の念に堪へぬものであるが、眇たる此身を棄てる位の事は、何んでもなく、今後は、隨分力を盡くして、國家の爲に討賊の事を謀る外、他意はない。わが究極の希望といふのは、逆賊、全く平らいで、同時に天上の胡星も消え失せ、大功すでに成つて、最早、何等憂慮することもないといふ樣な時になれば、古しへの魯仲連の如く、重賞を辭し、超然高踏、遠く此世から隱れて、その終を全くしたいといふ一事である。

【餘論】 この詩は、安祿山の叛亂、永王の出征より始め、水軍の宴、それから、自分の事に及んだので、これを見ても、李白が永王璘の幕下に投じたのは、廓清の業を成さむが爲めであつて、永王の逆心などは、絶對に知らなかつたといふことも分るので、功成追魯連といふのは、彼が口癖の樣に言つて居る平生の理想である。

贈武十七諤 幷序

武十七諤に贈る 幷に序

門人武諤。深於義者也。質木沈悍。慕要離之風。潛釣川海。不數數於世間事。聞中原作難。西來訪余。余愛子伯禽在魯。許將冒胡兵以致之。酒酣感激。援筆而贈。

【訓讀】 門人武諤は、義に深きものなり。質木沈悍、要離の風を慕ひ、潛に川海に釣し、世間の事に數數たらず。中原難を作すを聞き、西より來つて、余を訪ふ。余の愛子伯禽、魯に在り。許して、將に胡兵を冒し、以て之を致さむとす。酒酣に感激し、筆を援つて贈る。

馬如一匹練。明日過吳門。
乃是要離客。西來欲報恩。
笑開燕七首。拂拭竟無言。

狄犬吠清洛。天津成塞垣。
愛子隔東魯。空悲斷腸猿。
林回棄白璧。千里阻同奔。
君爲我致之。輕齎涉淮源。
精誠合天道。不愧遠遊魂。

狄犬、清洛に吠え、天津、塞垣を成す。
愛子、東魯を隔て、空しく悲む斷腸の猿。
林回、白璧を棄て、千里、同奔を阻む。
君、我が爲に之を致さむとし、輕く齎して淮源を涉る。
精誠、天道に合すれば、遠遊の魂たるに愧ぢず。

【字解】【一】馬如一匹練 藝文類聚に「韓詩外傳に曰く、顏回、吳門を望み、一匹練を見る。孔子曰く、馬なりと。謂らば、馬の光景は一匹の長きのみ、故に後人馬を呼んで一匹となす」とある。【二】要離 前に見ゆ。【三】蕭七首 史記に「蕭の太子丹、預め天下の利七首を求む」とある。【四】狄犬 狄は北方の夷、一に赤狄といひ、說文に犬種とある。【五】清洛 洛水、元和郡縣志に「洛水は、河南府洛陽縣の西南三里に在り、西、苑內上陽の南より、瀾浸東流す。字文愷、創開を作り、東れて、東北に流れしむ」とある。【六】天津 洛陽に在る浮橋の名、前に見ゆ。【七】塞垣 長城に同じ。【八】斷腸猿 世說に「桓公、蜀に入り、三峽の中に至る。部伍中、猿子を得たるものあり。その母、岸に緣りて眞駛す、行くこと百餘里にして去らず、遂に跳つて船に上り、卽ち絕ゆ。破つて、其の腹中を視れば、腸皆ずたずたに斷つ。公、これを聞いて怒り、命じて、其の人を黜く」とある。【九】林回 莊子に「林回、千金の璧を棄て、赤子を負うて趨る。或は曰く、その布の爲か、赤子の布寡し。その累の爲か、赤子の累多し。千金の璧を棄て、赤子を負うて趨るは何ぞや。林回曰く、彼は利を以て合ひ、此は天を以て屬するなり」とある。陸德明の音義に「司馬云ふ、殷の逃民の姓名」とある。【一〇】輕齎 身輕に支度する。【一一】淮源 通志地理略に「淮水の源は、唐州桐柏縣に在り」といひ、河南志に「淮瀆は南陽府桐柏縣の西二十五里に在り、源は胎簪山に出で、流れて息陽・確山・眞陽・息縣・固始を經、沂潤を會し、東して海に入る」とある。

【題義】この小序の意味は、門人の武諤といふは、生來義に深いもので、その性質は、質朴にして沈勇、常に要離の風を慕ひ、ひそかに、河海に釣を垂れて、世間の事には、こせこせしない、まことに、天晴な人物。近ごろ、安祿山、叛を爲し、中原に騷動を起したと聞き、取り敢へず、西方から來て、予を訪問した。處で、予の愛子伯禽といふものは、魯國に留まつて居て、生死の程も分らないから、武諤は、胡兵を冒し、その地に赴いて、これを連れて來ることを承知した。そこで、その行を送る爲に、酒宴を催し、感激の餘、筆を援つて、この詩を書し、因つて贈としたのである。

【詩意】君の乘れる馬は、一匹の練絹の如く、その馳せて行く樣は、目に留まらぬ位で、明日は、吳門の地を過ぎ、次第に、北に向つて行く。それは、古しへの要離の客分ともいふべき人で、今次、特に西方から來て、予が平生の恩に報いむとするのである。君は、笑ひながら、燕の太子丹が苦心して求めた樣な、天下の利七首を取り出し、そして、無言の間に之を拭ひ、その決心の程を示された。今しも、犬に比すべき赤狄は、清き洛水の岸上に吠え、名だたる天津橋も、長城の片はしと成つた觀がある。わが愛子の伯禽といふものは、東魯の地に居るが、生死の程も分らず、益なしと知りつつも、心に悲み、かの猿が子を思うて、哀叫の極、腸がちぎれたといふ樣な苦をして居る。むかし、林回は、千金の璧を棄て、その子だけを連れて難を避けたといふが、予は、今、伯禽と一所に走りたくて

も、千里の遠きを隔てて居るから、どうにも、仕方がない。そこで、君は、予の為に態態、その地に往つて、これを連れて來て與れるとのことで、まことに、有り難い仕合。君は、身輕に支度をして、淮水の源頭を渡り、やがて、魯國に赴かれる。君の精誠は、天道に合して居るから、騷亂の中に遠遊する其心根の雄雄しきに愧ぢず、必ず成功するに相違なく、予は、靜に君の歸るを待つて居やう。

【餞論】この詩は、極めて簡單で、もとより心忙しき折柄、不用意の間の率作と見える。しかし、その意義は明瞭で、しかも、情義を盡して居る。武謂たるもの、この贈を得た上は、愈よ奮發し、必ず其志を遂げずには濟まされまい。

贈閭丘宿松

阮籍爲太守。乘驢上東平。
剖竹十日間。一朝風化清。
偶來拂衣去。誰測主人情。
夫子理宿松。浮雲知古城。
掃地物莽然。秋來百草生。

閭丘宿松に贈る

阮籍、太守となり、驢に乘ず、上東平。
竹を剖く十日の間、一朝、風化清し。
偶ま來つて、衣を拂つて去り、誰か主人の情を測らむ。
夫子、宿松を理め、浮雲、古城を知る。
地を掃うて物莽然、秋來、百草生ず。

飛鳥還舊巢。遷人返躬耕。
何慙宓子賤。不減陶淵明。
吾知千載後。却掩二賢名。

飛鳥、舊巢に還り、遷人、返つて躬耕。
何ぞ慙ぢむや宓子賤、減せず、陶淵明。
吾は知る千載の後、却つて二賢の名を掩ふを。

【字解】【一】阮籍　世說の註に文士傳を引いて「阮籍放誕、傲世の情なり、仕宦を樂まず。晉の文帝、籍を親愛し、恆に輿に游戲し、その欲するところに任かせ、道るに職事を以てせず。籍、かつて從容として言つて曰く、平生、常に東平に游んで、その土風を樂しむ。願はくは、東平の太守たらむ、と。文帝悅んで、その意に從ふ。籍、便ち驢に騎して徑に郡に到り、皆府舍の諸壁鄣を壞り、內外なして相望ましめ、敎令清寧、十餘日、便ち復た驢に騎して去る」とある。【二】剖竹　謝靈運の詩に剖竹守三海濱一とあり、李善註に「漢書に曰く、初め郡守に與へ、竹使符を爲す。說文に曰く、符信は剖券、竹を以てし、分つて復た合すと。呂延濟の註に、凡そ太守たる、皆竹使符を剖くなり」とある。つまり剖竹といへば、竹符を剖いて太守に任ぜられること。【三】宓子賤　家語に「宓不齊、字は子賤、仕へて單父の宰となる。才智仁愛あり、百姓欺くに忍びず、孔子、これを美す」とある。【四】陶淵明　前に數ば見ゆ。

【題義】宿松は縣名、唐時、舒州の治下で、淮南道に屬して居た。この詩は、縣令閭邱某に贈つてその治化を美したのである。

【詩意】むかし、阮籍は、自ら薦めて、太守となり、驢に乘じて、その任地たる上東平に向ひ、竹符を剖いて、新に任官せしより、僅僅十日ばかりの間に、風化顏る清く、全く其地の面目を一新した位。そこで、偶ま其地に來任せしものの、やがて又衣を拂つて立ち去つたので、誰も其情を測るものが無か

つた。今、君は、宿松縣を治められたが、その地は荒れはてて、浮雲が古城を蔽うて居た。然るに、君一たび上任し、莽然たる穢はしいものを一掃したから、秋來つて萬物凋落する時に當つて、百草新に生ずるといふ樣な按排。一たび飛び去つた鳥が古巢に還ると同じく、他鄕に流離した人民も、亦た舊地に返つて、躬耕を事とするやうになつた。君の治化は、宓子賤に比して、決して愧づることなく、君の襟懷は、陶淵明にも減じない、そこで、千載の後に至るも、君の聲譽のみ、獨り高く、却つて、子賤・淵明二賢の名が掩ひ隱されることであらうと思ふ。

【餘論】はじめ、阮籍を倩うて客となし、次に、主たる問丘に移り、結二句を以て、前を回顧して、收束して居る。

獄中上崔相渙

獄中、崔相渙に上る

胡馬渡洛水。血流征戰場。
千門閉秋景。萬姓危朝霜。
賢相燮元氣。再欣海縣康。
台庭有夔龍。列宿粲成行。

胡馬、洛水を渡り、血は流る征戰場。
千門、秋景を閉ぢ、萬姓、朝霜よりも危し。
賢相、元氣を燮らげ、再び欣ぶ海縣の康きを。
台庭、夔龍あり、列宿、粲として行を成す。
羽翼三元聖。發輝兩太陽。
應念覆盆下。雪泣拜天光。

三元聖を羽翼し、兩太陽を發輝す。
應に念ふべし、覆盆の下、泣を雪うて、天光を拜するを。

【字解】【一】胡馬渡洛水　安祿山の兵が洛陽に攻め入りしことを指す。【二】燮　卽ち燮理、和らぐ。【三】海縣　海は國土のはて。支那人は、其國土が四方海に盡きて居ると信じて居たのである。【四】列宿　二十八宿。【五】羽翼　六韜に「王者師を帥ゐ、殷肱羽翼あり、以て神威を成す」とある。【六】三元聖　元聖は大聖、玄宗、肅宗、廣平王俶、卽ち後の代宗をいふ。【七】兩太陽　玄宗、肅宗を指す。【八】雪　拭ふ。【九】天光　日光に同じ。

【題義】舊唐書の崔渙傳に「天寶十五載七月、玄宗、蜀に幸す。渙、路に迎謁す。抗詞忠懇、皆理體を究む。玄宗、これを嘉し、以爲へらく、渙を得ること晩しと、卽日、黃門侍郎、同中書門下平章事に拜し、成都に扈從す。肅宗、靈武に卽位す。八月、左相韋見素、同平章事房琯、崔圓、冊を齎らして行在に赴く。時に未だ京師を復せず、舉選路絕ゆ。渙に詔して、江淮宣慰選補使に充て、以て遺逸を收めしむ。聰受に惑うて、下吏に謁がれ、濫進するもの、一に非ず、職に稱はざるを以て聞こゆ。乃ち知政事を罷め、左散騎常侍に除し、餘杭太守江東採訪防禦使を兼ぬ」とある。して見れば、崔渙は、人材登庸の職に當り、甚だ不成績であつたのであるが、當初の聲望は、大したもので、天晴賢宰相を以て囑望された。李白の此詩も、その頃、贈つたものであらう。

【詩意】安祿山、一たび叛を爲し、胡馬しきりに南下して洛水を渡り、血は、戰場に流れた。かつて、

洛陽の都に於ては、千門堅く秋景の中に閉し、人民は、いつ殺されるかも知れず、その命は、全く朝の霜より危い。然るに、君は、一代の賢相として、元氣を和らげ、邊境の縣邑までも、次第に清平に成つて來たので、まことに、喜ばしい。君の相位に在るは、さながら、堯舜の頃、夔龍などいふ賢人が三台の位に列したと同じく、從つて、在廷の百僚、然るべき人材ならぬはなく、二十八宿が粲然たる光彩を放つて、天空に羅列して居ると同じである。かくて、玄宗・肅宗、并に太子廣平王の羽翼となり、又天皇・上皇の御高德を愈よ發揮することも出來る。自分は、これまで、覆りたる盆の下に蹐まつて居たのであるが、今も、涙を拭うて、日光の照り輝くのを望むことが出來たので、まことに有り難い仕合、何分、この上とも、國家の爲に力を盡して貰ひたいのである。

【餘論】初の四句は戰亂、次の六句は崔渙の功績、結二句は自己の感慨、もとより、短幅であるから、少しの無駄をも許さず、極めて緊健に出來て居る。

中丞宋公以吳兵三千赴河南軍次尋陽脫余之囚參謀幕府因贈之

中丞宋公、吳兵三千を以て、河南の軍に赴き、尋陽に次す、余の囚を脫せしめ、幕府に參謀とす。因て之に贈る。

獨坐清天下。專征出海隅。
九江皆渡虎。三郡盡還珠。
組練明秋浦。樓船入郢都。
風高初選將。月滿欲平胡。
殺氣橫千里。軍聲動九區。
白猿慙劍術。黃石借兵符。
戎虜行當剪。鯨鯢立可誅。
自憐非劇孟。何以佐良圖。

獨坐、天下を清め、專征、海隅に出づ。
九江、皆、虎を渡らしめ、三郡、盡く珠を還す。
組練、秋浦に明かに、樓船、郢都に入る。「むと欲す。」
風は高くして、初めて將を選び、月は滿ちて、胡を平げ」
殺氣、千里に橫はり、軍聲、九區を動かす。
白猿、劍術を慙ぢ、黃石、兵符を借る。
戎虜、行く當に剪るべく、鯨鯢、立どころに誅すべし。
自ら憐む、劇孟に非ざるを、何を以て良圖を佐けむ。

【字解】【一】獨坐　前にもあつた通り、御史中丞は、司諫校尉、御書令と會同し、席を專らにして坐することを得るが故に云ふので、ここでは、宋若思の御史中丞たるを指して云ふ。【二】清天下　後漢書に「范滂、慨然として、天下を清うするの志あり」とある。【三】專征　春秋元命苞に「弓矢を賜うて專征を得、斧鉞を賜うて誅を得」とあるし、白虎通に「好惡私なし、執意傾かず、賜ふに弓矢を以てして專征を得せしむ」とある。【四】渡虎　後漢書に「宋均、九江の太守に遷る。郡に虎暴多く、數ば民の患を爲す、常に檻穽を墓設し、しかも、猶ほ傷害多し。均、記を屬縣に下して曰く、夫れ虎豹は山に在り、龍魚は水に在り、各〻託するところあり。今民の害を爲す、咎は殘吏に在り、しかも、勞動弧捕は、憂恤の本に非ざるなり、其れ務めて好貪を退け、忠善を進めむことを思ふ、檻穽を一去し、課制を除削すべし、と。その後、傳へて言ふ、虎相與に東遊して江を渡る」とある。【五】還珠　後漢書に「孟

實、合浦の太守に還る、郡に穀實を產せずして、海に珠寶を出し、交趾と境を比し、常に商販を通じ、糧食を仰給す。先時の宰守、貪に多く貪穢、人を詭つて採求し、紀極を知らず、珠、遂に漸く交趾の郡界に徙る。ここに於て、行旅至らず、人物貴なし、貧者は道に死餓す。嘗、官に到り、前弊を革易し、民の病利を求む。かつて、未だ歲餘ならず、去珠復た還り、百姓皆その業に反り、商貨流通、稱して神明と爲す」とある。【八】 組練　組甲被練。組甲とは、甲に漆して組文をなすもの。被練は、帛で甲を覆り、步卒これを服す。【九】 郢都　むかしの楚の都、後の江陵。【八】 月滿　隋書に「突厥、月の將に滿たむとするを候して、輒ち寇鈔を爲す」とある。【九】 九區　天下に同じ。【一〇】 白猿　吳越春秋に「處女あり、南林の中に出づ、越王、使をして聘せしめ、問ふに劍戟の事を以てせむとす。處士、將に北して越王に見えむとし、道に老翁に逢ふ、自ら袁公と稱す。處女に問ふ、吾聞く、子善く劍術を爲すと、願はくは、一たび之を觀む。女曰く、妾敢て隱すところあらず、惟だ、公、これを試みよと。ここに於て、袁公、即ち林竹に跳る、槁折して地に墮つ。處女、即ち末を接す。袁公、木を操り、以て處女を刺さんとす。女、節に應じて入る。三たび入る。因つて、杖を擧げて之を擊つ。袁公、即ち飛んで樹に上り、化して白猿となつて引いて去る」とある。【一一】 黃石、兵符、鯨鯢、劍孟　皆前に見ゆ。

【題義】 舊唐書に「天寶十五載六月、監察御史宋若思を以て御史中丞となす」とある。宋若思は、吳兵三千を以て、河南に赴かむとし、しばらく軍を潯陽に駐屯して居た。その時、李白は、永王璘の事に連坐し、罪を獲て獄中に囚へられたが、宋若思は、これを救ひ出し、幕府に參謀たらしめた。そこで、李白は、その高義に感じ、この詩を作つて、宋公に上つたのである。

【詩意】 宋公は、獨坐の稱ある御史中丞の職に居り、今日騷亂の世に際し、天下を平定したいといふので、天子より弓矢を賜はつて專征を許され、そして、わざわざ、都から、この邊鄙な處へ討つて出られた。かくて、中丞の治績拔羣にして、今まで九江の地に於て、頻りに害を爲した虎までも、皆江を渡つて移り去り、一たび他所に移り去つた三郡の眞珠も、皆元の處へ還つたといふので、つまり、逆賊は跡を收め、流民も其鄉里に戻つて來た。中丞は、吳兵三千を擁し、その兵士の著せる漆甲組練は、明かに輝いて、秋浦の水にうつり、樓船は、堂堂たる氣勢を以て、今次、古しへの郢都の地たる江陵へと乘り込んで來た。秋の風高き頃は、兵を用ふるに都合が善いといふので、新に大將を選び、そして、滿月の時分には、胡人が侵入するといふから、その時を待つて、一擊の下に賊を平らげむと、頻りに、準備を整へて居る。されば、未だ戰はざるに、殺氣は、漠然として、千里の遠きに橫り、喊の聲が天下を震動するやうな氣がする。宋公の材武英略は、非常なもので、擊劍の術の精妙なるは、白猿をして、後に瞠若たらしむべく、兵法に深いことは、かの張良の如く、黃石公からでも傳授したかと思はしめる。やがて、好い時機に乘ずる上は、さしもの戎虜も、追追に剪滅すべく、鯨鯢が如何に暴ばれ廻はつた處で、立どころに、誅除することは疑なしである。唯だ憐むべきは、吾が才、まことに謫劣で、折角、幕府の參謀に擢用されたものの、むかし劇孟が周亞夫の七國戡定に就いて、大に役に立つたやうなことも出來ず、いかにして、宋公の折角の大計畫を助成したものか、それが滿足に出來ぬのは、まことに腑甲斐なきことであるが、何分にも、然るべく、御引廻を願ひたいものである。

【餘論】 大體は、宋中丞の人物規畫を讚美し、結二句に於て、自謙の意を寓したので、對仗極めて精

贈　中丞宋公次豫陽脫余之囚鑒謀幕府因贈之

當、一字も苟くもせざる處は、まさしく、排律の體を得たものである。劉須溪は「句句壯、末韻更に佳」といひ、嚴滄浪は「氣格清勁、まさに排體の難しとするところ」といひ、范德機は「發端雄渾にして嚴、眞に長律の起辭なり」といひ、胡震亨は「排律の起句、極めて冠冕雄渾なるに宜し、小家の語を作すを得ず、この篇の類の如き、最も體を得たりと爲す」といひ、齊しく、起首の雄渾と全篇の體を得たこととを稱美して居るので、杜甫の集中に於ても、これ程、ちんまりと纏まつた作は、決して多くはない。

流夜郎贈辛判官　夜郎に流され、辛判官に贈る

昔在長安醉花柳。　むかし、長安に在つて、花柳に醉ひ。
五侯七貴同杯酒。　五侯七貴、杯酒を同じうす。
氣岸遙凌豪士前。　氣岸、遙に凌ぐ豪士の前。
風流肯落他人後。　風流肯て落ちむや、他人の後。
夫子紅顏我少年。　夫子は紅顏、我は少年。
章臺走馬著金鞭。　章臺馬を走らして、金鞭を著く。
文章獻納麒麟殿。　文章獻納す、麒麟殿。
歌舞淹留玳瑁筵。　歌舞淹留す、玳瑁の筵。
與君自謂長如此。　君と自ら謂ふ、長く此の如しと。
寧知草動風塵起。　寧ろ知らむや、草動いて、風塵起るを。
函谷忽驚胡馬來。　函谷忽ち驚く胡馬の來るを。
秦宮桃李向明開。　秦宮の桃李、明に向つて開く。
我愁遠謫夜郎去。　我は愁ふ、遠謫、夜郎に去るを。
何日金雞放赦回。　何の日か、金雞放赦して回らむ。

【字解】【一】五侯　漢の李元皇后は王莽の姑で、元帝即位の後、立つて皇后となり、その兄弟、侯を嗣ぎしが、成帝立つや、皇を以て大司馬大將軍となし、又崇を丞して安成侯となす。河平二年、曼譚を封じて平阿侯となし、商を成都侯となし、立を紅陽侯となし、根を曲陽侯となし、逢を高平侯となし、五人同日に封ぜられしが故に五侯といふ。【二】七貴　西都賦の註に「呂・雷・上官・趙・丁・傅・王、並に后族たり」とある。外戚の家柄を總稱して云ふ。【三】章臺　前に見ゆ。【四】麒麟殿　未央宮に在る殿名。【五】玳瑁筵　劉植の瓜賦に布三象牙之席、薦二玳瑁之筵一とあるに本づく。【六】函谷　關名。【七】秦宮　長安の宮闕を指す。【八】夜郎　今の雲南の南。【九】金雞　舊唐書に「凡そ國に赦宥の事あれば、先づ囚徒を闕下に集め、衛尉に命じ、金雞を樹て、宣制を待ち、訖つて乃ち之を釋ろす」とある。

【題義】この詩は、李白が罪を得て夜郎に流される時に、舊交ある判官の辛某に贈つたのである。

【詩意】むかし、長安に縱游し、花柳に醉ひし時は、五侯七貴等、外戚貴顯の人人とともに、酒を酌み、意氣岸然として豪士を凌ぎ、風流獨絶、他人の後に落つることは無かつた。その折、君も、我も、ともに、紅顏の少年であつて、金鞭馬を驅つて、章臺に向ひ、ある時は、文章を麒麟殿に獻納し、あ

る時は、歌舞して玳瑁の筵に流連した。かくて、君とともに、いつまでも、かくありたいと云つて居た處が、料らざりき、滿地腐いて風塵忽ち起り、四海騒亂、鼎の沸くが如く、やがて、胡馬、一たび至つて、函谷關を陷れ、長安の宮闕、すでに人なく、桃李は、主なきに拘はらず、日に向つて花を開き、我も亦た思ひ設けぬ罪を得て、遠く夜郎に遠流せらるることとなり、いつ又召し歸されることか、時の不運、身の不幸、榮枯、眼前に變じて、まことに、感慨に堪へぬことである。

【餘論】乾隆御批に「中間轉淚の處、甚だ健」とある。それから蕭士贇は「向明とは、向陽花木の義、同時の儕類、辛判官の輩の如きを指す。兵興るの際に因つて、不次に用ひられ、人の桃李となり、我は獨り謫に遭ふなり」とあつて、つまり、彼と我と、窮達各〻異なる狀態を暗に比擬して云つたのである。

贈劉都使

劉都使に贈る

東平劉公幹。南國秀餘芳。
一鳴卽朱紱。五十佩銀章。
飲氷事戎幕。衣錦華水鄉。
銅官幾萬人。諍訟清玉堂。
吐言貴珠玉。落筆廻風霜。
而我謝明主。銜哀投夜郎。
歸家酒債多。門客粲成行。
高談滿四座。一日傾千觴。
所求竟無緒。裘馬欲摧藏。
主人若不顧。明發釣滄浪。

東平の劉公幹、南國に餘芳を秀づ。
一鳴すれば卽ち朱紱、五十にして銀章を佩ぶ。
氷を飲んで戎幕を事とし、錦を衣て水鄉に華たり。
銅官幾萬人、諍訟、玉堂を清くす。
言を吐けば、珠玉より貴く、筆を落せば、風霜を廻す。
而して、我、明主に謝し、哀を銜んで夜郎に投ず。
家に歸れば、酒債多く、門客、粲として行を成す。
高談、四座に滿ち、一日、千觴を傾く。
求むところ、竟に緒なく、裘馬、摧藏せむと欲す。
主人、若し顧みずんば、明發、滄浪に釣せむ。

【字解】【一】東平劉公幹　三國志に「東平の劉楨、字は公幹。太祖、辟して、丞相の掾屬となす、文賦數十篇を著す」とある。【二】一鳴　史記に「鳴かざれば已む、一たび鳴かば人を驚かさむ」とある。【三】朱紱　昌の乾驃度に「天子三公九卿は朱紱、諸侯は赤紱」とある。紱は綬。しかし、顏師古の漢書註に「朱紱は、朱袋を爲り、靈いて亞文を爲すなり、亞は古しへの弗の字なり、故に因つて紱といふ」とあつて、やや違つて居る。何にしても禮服。【四】銀章　漢書の百官公卿表に「凡そ吏の秩比二千石以上は、皆、銀印青綬」とあつて、顏師古の註に「漢書儀に云ふ、銀印皆龜鈕、其文を章といふ、刻して某官の章と曰ふを謂ふなり」とある。【五】飲氷　莊子に「今、晉、朝に命を受けて夕に氷を飲む」とある。【六】華水鄉　水鄉は吳、吳地に時めく。【七】銅官　唐書地理志に「宣州南陵縣、武德四年、池州に隸す、州廢して來り屬す、後析して義安縣を置く、又義安を廢して、銅官の治となす」とある。【八】吐言　孔叢子に「言を吐けば、天下の士、耳目を屬せざるはなし」とある。【九】珠玉　世說註に「脩は猶ほ瀾鏡のごとく、言必ず珠玉」とある。【一〇】廻風霜　西京雜記に「淮南王安、鴻烈二十一篇を著す、自ら云ふ、宇中皆風霜を挾む」とある。【一一】投　棄てる。【一二】傾千觴　晉書に「一觴を崇朝に盡にし、千觴を長夜に飛ばす」とある。【一三】無緒　緒は端緒。【一四】摧藏　自ら抑挫する

狼。【一五】明發　明晨に同じ。【一六】滄洲　前に見ゆ。

【題義】王琦の註に「都使は、未だ何の官たるを詳にせず、詩中、飲氷事戎幕の句あり、蓋し幕職ならむ。これ當に兼銜なるべく、都水監使者の類の若きのみ」とある。この詩は、李白が夜郎に流される時、舊知の都使劉某に贈つて、その助力を依囑したのである。

【詩意】君は、東平の劉楨か、その餘芳を南國に發したものと思はれるので、文章材識、ともに古賢に匹敵して居る。されば、鳴かねば、それまでであるが、一たび、鳴けば、人主の聖聰を動かして、朱紱を纏ふ身分となり、年五十にして銀印を帶び、著著として立身した。そこで、頃ろは、閑地に就いて、戎幕に參し、錦衣を水鄉なる吳地にきらびかし、銅官縣裏、幾萬といふ人口もあるが、まことに善く治まつて、訴訟沙汰もなく、鵰堂も靜に小ざつぱりとして居る。君は閑に居て、詩などを作り、一たび言を吐けば、珠玉よりも貴く、筆を落せば、風霜の氣を帶ぶといふ位、人物文章、ともに世に拔いて居る。これに反して、予は、明主に御暇乞を爲し、哀を銜みつつ、遠く夜郎の地に配流せられることに成つたが、その出かけるに就いても、また後の始末が付かず、家に歸れば、酒家への借金も、その儘に成つて居るし、今まで養つて居た食客どもは、粲として行を成す位。彼等は、例の如く、遠慮會釋もなく立ち振舞ひ、四座常に高談の聲に滿ち、一日には、千杯の酒を傾けるといふ程で、予が去つた後には、差向き、食ふにも困まるだらうし、どうにかして、遣らなければ成らない。然るに、予の要求するところは、まだ其端緒をだに得ず、裘馬等の旅支度も、碌碌出來ない。止むを得ず、君に向つて、御依賴する次第であるが、君にして、もし顧みなかつたならば、どうにも仕方がないから、明日は、滄浪に臨んで釣を爲し、胸中の鬱悶を暫時なりとも忘れる外はない。

【餘論】嚴滄浪は「歸レ家酒債多の四句、豪士の歌と作すべし」といつたが、李白が豪華を縱にし、多くの食客を養つて居たことも、これで分るので、その後始末を劉都使に望んだのである。結末四句、甚だ簡切で、さのみ己を屈せぬ處に於て、彼の本領を認取することが出來る。

贈常侍御

常侍御に贈る

安石在東山。無心濟天下。
一起振橫流。功成復瀟灑。
大賢有卷舒。季葉輕風雅。
匡復屬何人。君爲知音者。
傳聞武安將。氣振長平瓦。
燕趙期洗清。周秦保宗社。

安石、東山に在り、天下を濟ふに心なし。
一たび起つて橫流を振ひ、功成つて復た瀟灑。
大賢、卷舒あり、季葉、風雅を輕んず。
匡復、何人に屬する、君は知音の者たり。
傳へ聞く武安の將、氣は長平の瓦に振ふを。
燕趙、洗清を期し、周秦、宗社を保つ。

登朝若有言。爲訪南遷賈。

【字解】【一】安石　謝安の字、前に見ゆ。【二】淸　敎ふ。【三】橫流　世の顚亂ないふ。【四】漂蕩　世と相忘れて心のどかに居ること。【五】卷舒　淮南子に「盈縮卷施、時と變化す」とある。【六】季葉　葉は世、季世に同じ。【七】匡復　一匡して回復する。【八】武安將　史記趙奢傳に「秦軍、武安の西に軍す。秦軍、鼓譟して兵を勒す。武安の屋瓦、盡く振ふ」とある。後、奢の子、趙括は、長平に戰つたが、そこには、振瓦のことは無い。これは、或は失檢であるかも知れない。しかし、庾信の哀江南賦には「碎三長平之瓦」とあり、周書には「瓦、長平に震へば、趙、分れて二となり、兵、函谷に出づれば、韓、裂けて三となる」とあるが、何に本づいたか分らない。李白の此句も、或は之を承けたので、史記には本づかないのであらう。又、武安將といふのも、趙奢ではなく、白起を指したもので、起は、武安君に封ぜられた。武安將は郭子儀・李光弼等、その當時の將帥に比したのであらう。【九】燕趙期洗淸　燕趙は、皆、燕山の據るところとなつたから、洗淸を期したのである。【一〇】周秦保宗社　周地は洛陽、唐では東京。秦地は長安、唐では西京。ともに、宗廟社稷の在るところで、その保護を欲するのである。【一一】南遷賈　賈誼南遷の事、前に見ゆ。

【題義】この詩も、矢張、夜郎に流された時、侍御常某に贈つたのである。何は兎もあれ、夜郎の放流は、非常に不幸な出來事であるから、李白は、有らむ限りの才思を傾けて詩を作り、これを知つて居る限りの榮顯の人人に分贈し、極力赦免の運動を試みたのである。

【詩意】謝安石の東山に在るや、妓を集めて絲竹に耽り、天下を救はうといふ樣な心持は無かつたと思はれた位であつたが、一たび起つて、天下の橫流を救うて大亂を平げた。かくて、功成る上は、別に世に誇ることもなく、元の通り、瀟洒として東山の絲竹を樂んで居た。抑も、大賢は、卷けば之を懷にすべく、舒ぶれば四海に亙るといふ大抱負がある。しかし、世が末になると、風雅の度量ある安石の如きものが、現在居つたにしても、これを輕んじて顧みない。今日の大亂を匡復するは、何人に屬するであらうか。安石が在つても、どうも致方が無い。しかし、君のみは、自分に取つて、唯一の知音で、卽ち卷舒あるものたるを知つて、敬愛して下さつた。承はれば、近ごろ、郭子儀・李光弼などいふ面面が、勤王の師を起して、賊軍を敗り、丁度、白起が長平の瓦を振動して、大に趙括の兵を破つたと同じ樣である。燕趙の敵地には、まだ賊兵が居るから、これを淸めて一掃せねばならぬし、東西兩京は、宗廟社稷の在るところで、必ず之を克復せねばならぬ。君にして、都に歸られたならば、取り敢へず登朝して天子に奏し、今次夜郎に放流せられた李白は、丁度漢の賈誼にも比すべき才略を有するもので、この際、是非登庸あつて然るべしといふ旨を申し上げて、精精、わが爲に、助力して下さい。

【餘論】この詩は、はじめに謝安石、後に賈誼を以て自ら比し、以て其抱負を述べたので、わが輩の如き者を、今日用ひずして貶謫するのは、まことに怪しからぬ話、もし我を用ひざれば、到底、天下を匡復することは出來まいと、かういつて、刻下の窮況を少しも寫し出さず、却つて、逆に大きな事をいつて、先方の心を竦動せしめむとしたのである。蕭士贇は「南遷賈とは、時に太白、夜郎に謫せられ、自ら賈誼に比するなり。意謂ふ、常、若し朝に登つて言あらば、之に及ぶを妨げず。或

は、天、幸に賈生の宣室召問の如くならむ」といひ、乾隆御批には「一往、清剛の氣饒し」といつてある。

贈易秀才

易秀才に贈る

少年解長劍。投贈卽分離。
何不斷犀象。精光暗往時。
蹉跎君自惜。竄逐我因誰。
地遠虞翻老。秋深宋玉悲。
空摧芳桂色。不屈古松姿。
感激平生意。勞歌寄此辭。

少年、長劍を解き、投贈、卽ち分離。
何ぞ、犀象を斷たざる、精光、往時よりも暗し。
蹉跎、君、自ら惜む、竄逐、我、誰にか因らむ。
地遠くして虞翻老い、秋深くして宋玉悲む。
空しく、芳桂の色を摧くも、古松の姿を屈せず。
平生の意に感激し、勞歌此の辭を寄す。

【字解】〔一〕何不斷犀象　步光の劍の事で、既に前に見ゆ。〔二〕虞翻　三國志に「虞翻、性疏直、數ば酒失あり。孫權、憤怒一に非ず、遂に翻を交州に徙す。距放に處せらると雖も、しかも講學して倦まず、門徒常に數百人、南に在ること十餘年、年七十にして卒す」とある。〔三〕宋玉悲　宋玉の九辯に悲哉秋之爲氣也とある。〔四〕勞歌　別れの時に歌ふ歌曲。

【題義】この詩は、易秀才に贈り、自分が夜郎に流されて、その處を得ないといふ憂愁を寫したのである。

【詩意】われ、今、君に別れむとするに際し、腰下の寶劍を解き、記念として、君に贈らう。この長劍の切れ味は、まことに素張しいもので、陸には犀象を切るべき筈であるが、如何せん、劍は曇つて、往時よりも暗く、そして、犀象を切り得ぬのは、遺憾の至である。君も、刻下決して得意の境ではなく、蹉跎して不便を嘆じて居るが、それは、まだしも、自分は、今回中原を竄逐されて、夜郎に向ふので、格別賴るべき人だになく、まことに、不幸極まる次第である。かくて、遠地に遷されるのは、むかしの虞翻と同じく、秋の哀れは、一しほ身にしみて、古しへの宋玉の悲と同じである。如何に辛辣な肉桂でも、秋霜に遇へば、空しく其色を摧かれるが、ひとり霜雪を凌いで屈せざるは、古松の姿ばかり、君は肉桂、われは古松、君よりも年を取つて居るだけに、自分は、いくらか鍛錬した處がある。但し平生より志を談ずるものは、君より外に無いから、その意に感激し、勞勞の別れの歌に代へてこの辭を君に寄せ、聊か胸臆を抒べるのである。

【餘論】この一首は、古詩ではなく、純ら律調を以てし、何不斷犀象、精光暗往時の二句は、對句でなくて散體に成つて居るが、それでも、平仄だけを合はせてある。つまり、李白一流の氣を以て行つた律體と見れば善い。そこで、乾隆御批には「比排聲律に屑屑たらず、氣骨清蒼、自ら高調を成す、空摧芳桂色、不屈古松姿、謂はゆる冠佩芳澤、しかも昭質未だ虧けず、本色を露はす處、故

に諷詠して置かざるべし」とある。

經亂離後天恩流夜郎憶舊遊書懷贈江夏韋太守良宰

亂離を經たる後、天恩、夜郎に流さる、舊遊を憶ひて懷を書し、江夏韋太守良宰に贈る。

天上白玉京。十二樓五城。
仙人撫我頂。結髮受長生。
誤逐世間樂。頗窮理亂情。
九十六聖君。浮雲挂空名。
天地賭一擲。未能忘戰爭。
試涉霸王略。將期軒冕榮。
時命乃大謬。棄之海上行。
學劍翻自哂。爲文竟何成。
劍非萬人敵。文竊四海聲。
兒戲不足道。五噫出西京。
臨當欲去時。慷慨淚沾纓。
嘆君倜儻才。標舉冠羣英。
開筵引祖帳。慰此遠徂征。
鞍馬若浮雲。送余驃騎亭。
歌鐘不盡意。白日落昆明。
十月到幽州。戈鋋若羅星。
君王棄北海。掃地借長鯨。
呼吸走百川。燕然可摧傾。
心知不得語。却欲棲蓬瀛。
彎弧懼天狼。挾矢不敢張。
攬涕黃金臺。呼天哭昭王。

天上の白玉京、十二樓五城。
仙人我が頂を撫し、結髮、長生を受く。
誤つて世間の樂を逐ひ、頗る理亂の情を窮む。
九十六聖君、浮雲、空名を挂く。
天地賭して一擲、未だ戰爭を忘るる能はず。
試に霸王の略に涉り、將に期せむとす軒冕の榮。
時命乃ち大に謬る、これを棄てて海上に行く。
劍を學んで翻つて自ら哂ひ、文を爲つて竟に何をか成す。
劍は萬人の敵に非ず、文は四海の聲を竊む。
兒戲、道ふに足らず、五噫、西京を出づ。
臨んで去らむと欲する時に當り、慷慨淚纓を沾す。
嘆ず君が倜儻の才、標舉、羣英に冠たり。
筵を開いて祖帳を引き、この遠く徂征するを慰む。
鞍馬、浮雲の若く、余を送る驃騎亭。
歌鐘、意を盡さず、白日、昆明に落つ。
十月、幽州に到り、戈鋋、星を羅ぬるが若し。
君王、北海を棄て、地を掃うて、長鯨に借す。
呼吸して、百川を走らし、燕然、摧傾すべし。
心知、語るを得ず、却つて、蓬瀛に棲まむと欲す。
弧を彎いて天狼を懼れ、矢を挾んで敢て張らず。
涕を攬ふ、黃金臺、天を呼んで昭王を哭す。

無人貴駿骨。綠耳空騰驤。
人の駿骨を貴ぶ無く、綠耳空しく騰驤。
樂毅儻再生。于今亦奔亡。
樂毅、もし再生すれば、今に亦た奔亡せむ。
蹉跎不得意。驅馬還貴鄉。
蹉跎、意を得ず、馬を驅つて、貴鄉に還る。
逢君聽絃歌。肅穆坐華堂。
君に逢うて、絃歌を聽き、肅穆、華堂に坐す。
百里獨太古。陶然臥羲皇。
百里、獨り太古、陶然として羲皇に臥す。
徵樂昌樂館。開筵列壺觴。
樂を徵す昌樂館、筵を開いて壺觴を列す。
賢豪間青娥。對燭儼成行。
賢豪、青娥に間はり、燭に對し、儼として行を成す。
醉舞紛綺席。清歌繞飛梁。
醉舞、綺席に紛たり、清歌、飛梁を繞る。
歡娛未終朝。秩滿歸咸陽。
歡娛、未だ朝を終へず、秩滿ちて、咸陽に歸る。
祖道擁萬人。供帳遙相望。
祖道、萬人を擁し、供帳、遙に相望む。
一別隔千里。榮枯異炎涼。
一別、千里を隔て、榮枯、炎涼異なり。
炎涼幾度改。九土中橫潰。
炎涼幾度か改まる、九土中より橫潰。
漢甲連胡兵。沙塵暗雲海。
漢甲、胡兵に連り、沙塵、雲海暗し。
草木搖殺氣。星辰無光彩。
草木、殺氣を搖かし、星辰、光彩なし。
白骨成丘山。蒼生竟何罪。
白骨、丘山を成し、蒼生、竟に何の罪ぞ。
函關壯帝居。國命懸哥舒。
函關、帝居壯に、國命、哥舒に懸る。
長戟三十萬。開門納兇渠。
長戟三十萬、門を開いて兇渠を納る。
公卿如犬羊。忠讜醢與菹。
公卿、犬羊の如く、忠讜、醢と菹と。
二聖出遊豫。兩京遂丘墟。
二聖出でて遊豫、兩京遂に丘墟。
帝子許專征。秉旄控强楚。
帝子、專征を許し、旄を秉つて、强楚を控ふ。
節制非桓文。軍師擁熊虎。
節制、桓文に非ず、軍師、熊虎を擁す。
人心失去就。賊勢騰風雨。
人心、去就を失ひ、賊勢、風雨を騰ぐ。
惟君固房陵。誠節冠終古。
惟だ、君、房陵を固め、誠節、終古に冠たり。
僕臥香爐頂。餐霞漱瑤泉。
僕は香爐の頂に臥し、霞を餐して瑤泉に漱ぐ。
門開九江轉。枕下五湖連。
門は開いて九江轉じ、枕下に五湖連る。
半夜水軍來。尋陽滿旌旃。
半夜、水軍來り、尋陽、旌旃に滿つ。

空名適自誤。迫脅上樓船。
徒賜五百金。棄之若浮煙。
辭官不受賞。翻謫夜郎天。
夜郎萬里道。西上令人老。
掃蕩六合清。仍爲負霜草。
日月無偏照。何由訴蒼昊。
良牧稱神明。深仁恤交道。
一忝青雲客。三登黃鶴樓。
願慙禰處士。虛對鸚鵡洲。
樊山霸氣盡。寥落天地秋。
江帶峨眉雪。川橫三峽流。
萬舸此中來。連帆過揚州。
送此萬里目。曠然散我愁。

空名適まさに自ら誤り、迫脅せられて樓船に上る。
徒に五百金を賜はりしが、これを棄てて浮煙の若し。
官を辭して賞を受けず、翻つて謫せらる夜郎の天。
夜郎萬里の道、西上、人をして老いしむ。
掃蕩、六合清く、仍つて、霜を負ふの草となる。
日月、偏照なく、何に由つて蒼昊に訴へむ。
良牧、神明と稱す、深仁、交道を恤む。
一たび、青雲の客を忝うし、三たび、黃鶴樓に登る。
顧みて、禰處士に慙ぢ、虛しく、鸚鵡の洲に對す。
樊山、霸氣盡き、寥落たり天地の秋。
江は峨眉の雪を帶び、川は三峽の流を橫ふ。
萬舸、此中に來り、帆を連ねて揚州を過ぐ。
この萬里の目を送り、曠然として、我が愁を散ず。

紗窓倚天開。水樹綠如髮。
窺日畏銜山。促酒喜得月。
吳娃與越豔。窈窕誇鉛紅。
呼來上雲梯。含笑出簾櫳。
對客小垂手。羅衣舞春風。
賓跪請休息。主人情未極。
覽君荆山作。江鮑堪動色。
清水出芙蓉。天然去雕飾。
逸興橫素襟。無時不招尋。
朱門擁虎士。列戟何森森。
剪鑿竹石開。縈流漲清深。
登樓坐水閣。吐論多英音。
片辭貴白璧。一諾輕黃金。

紗窓、天に倚つて開き、水樹、綠、髮の如し。
日を窺うて、山に銜まるを畏れ、酒を促して、月を得るを喜ぶ。
吳娃と越豔と、窈窕として、鉛紅に誇る。
呼び來つて、雲梯に上り、笑を含んで、簾櫳を出づ。
客に對して小しく手を垂れ、羅衣、春風に舞ふ。
賓は跪いて休息を請ひ、主人情未だ極まらず。
君が荆山の作を覽れば、江鮑も色を動かすに堪へたり。
清水、芙蓉を出し、天然に雕飾を去る。
逸興、素襟に橫はり、時として、招尋せざることなし。
朱門、虎士を擁し、列戟、何ぞ森森たる。
剪鑿して、竹石開き、縈流、清深を漲る。
樓に登つて、水閣に坐し、論を吐いて、英音多し。
片辭、白璧を貴び、一諾、黃金を輕んず。

謂我不如君。青鳥明丹心。
五色雲間鵠。飛鳴天上來。
傳聞赦書至。却放夜郎廻。
暖氣變寒谷。炎烟生死灰。
君登鳳池去。忽棄賈生才。
桀犬尚吠堯。匈奴笑千秋。
中夜四五歎。常爲大國憂。
旌旆夾兩山。黃河當中流。
連雞不得進。飲馬空夷猶。
安得羿善射。一箭落旄頭。

われ君に媿ぢずと謂ひ、青鳥、丹心を明かにす。
五色雲間の鵠、飛鳴して天上より來る。
傳聞す、赦書至ると、却つて、夜郎より廻らしむ。
暖氣、寒谷に變じ、炎烟、死灰に生ず。
君は鳳池に登つて去り、忽ち賈生の才を棄つ。
桀犬、尚ほ堯を吠え、匈奴、千秋を笑ふ。
中夜、四五歎、常に大國の憂を爲す。
旌旆、兩山を夾む、黃河、中流に當る。
雞を連ねて、進むを得ず、馬に飲うて空しく夷猶。
安んぞ羿の善射を得て、一箭に旄頭を落さむ。

【字解】【一】天上白玉京　五星經に「天上の白玉京、黃金闕」とあつて、天上なる天帝の居る處は、白玉を以て飾つてある。【二】十二樓五城　抱朴子に「崑崙山上に五城十二樓あり」といひ、應劭の漢書註に「崑崙玄圃、五城十二樓、仙人の常に居るところ」とある。【三】結髮　青年の時をいふ。【四】理亂　理は恰に同じ、高宗の諱治の字を避けて、唐人は、必ず理亂と書いた。【五】九十六君　楊齊賢の解に「秦の始皇より唐の玄宗に至るまで、中國傳緒の君、凡そ九十六」とある。【六】霸王略　華陽國志に「陳登曰く、雄姿傑出、霸王の略あり、吾、劉玄德を敬す」とある。【七】軒昊　軒は大車、昊は冠、有位者を指す。【八】時命　莊子に、「世の謂はゆる醫士は、その身を伏して見はるるなきに非ざるなり、その言を閉ぢて出でざるに非ざるなり、その知を藏して廢せざるに非ざるなり、時命大に謬れればなり」とある。【九】海上　東海の沿岸。【一〇】學劍　史記に「項籍少時、書を學べども成らず、去つて劍を學べども、亦た成らず。項梁、これを怒る。籍曰く、書は以て姓名を記するに足るのみ、劍は一人の敵のみ、學ぶに足らず、萬人の敵を學ばむ」とある。【一一】竄四海聲　天下の名譽を竄む。【一二】五噫　後漢書に「梁鴻、東して關を出づるに因り、京師を過ぎて、五噫の歌を作つて曰く、陟彼北邙兮噫、顧覽三帝京兮噫、宮室崔嵬兮噫、人之勞勞兮噫、遂遂求央兮噫、と。肅宗、聞いて之を非とし、鴻を求むれども得ず、乃ち姓を運期、名を�、字を侯光と易へ、妻子と齊眉の間に處る」とある。【一三】冠羣英　晉書に「彬彬藻思、綽として羣英に冠たり」とある。【一四】組帳　組席の設くるところの帳幕、杜審言の詩に「組帳連三河郡、軍容動三落城」とある。【一五】徂征　二字ともに行く、陸機の詩に「衆世擾三時綱、駕言遠徂征」とある。【一六】驃騎亭　王琦の說に「驃騎亭は、詩意を玩ぶに、當に長安に在るべし。楊註、驃騎亭を以て謝安の建つるものと爲す、恐らくは誤ならむ」とある。【一七】歌鐘　國語に「女樂二人、歌鐘二肆」とある。【一八】昆明　三輔黃圖に「漢の昆明池、武帝の元狩四年に穿つ。長安の西南に在り、周圍四十里。西南夷傳に曰く、天子、使を遣し、身毒國の市竹を求む、しかも、昆明に閉さる。天子、これを伐たむと欲す、越巂昆明國に滇池あり、方三百里、故に昆明池を作り、以て之に象り、以て水戰を習はす、因つて名づけて昆明池といふ」とあり、三輔舊事に「昆明池、地三百三十二頃、圖に曰く、上林苑に昆明池あり、周圍四十里」とあり、陝西通志に「昆明池は西安府の西南三十里に在り」とある。【一九】戈鋋　說文に「鋋は小矛」とある。【二〇】羅星　揚雄の羽獵賦に「煥若三羅星」とあつて、張銑の註に「言ふは、天星の羅列するが如きなり」とあり、陳琳の瑪瑙勒賦に「駢居列峙、煥若三羅星」とある。【二一】君王塞北海　王琦の解に「按ずるに、唐書安祿山傳に、天寶元年、安祿山を以て、平盧節度使押兩番渤海黑水四府經略使となし、三載、裴寬に代つて、范陽節度使となし、仍ほ平盧軍を領し、すなはち威武・清夷・靜塞・恒陽・北平・高陽・唐興・橫海・平盧・盧龍の十一軍を經略し、及び檢關守捉、安東都護の府兵十三萬有奇、皆その統ふるところ、幽・薊・嬀・檀・易・恒・定・涿・瀛・營・平十一州の地、皆その治むるところ、幽州以北、遼く祿山に與ふ、謂はゆる君王塞北海、

擣ノ地儲三長鯨一なり」とある。【三三】燕然　山名、前に見ゆ。【三四】彎弧　弓を挽く。【三五】天狼　楚辭に挾三長矢一兮射三天狼一とあつて、王逸の註に「天狼は星の名、以て貪殘に喩ふ」とある。【三六】昭王　戰國策に「郭隗、燕の昭王に對へて曰く、古しへの人君、千金を以て千里の馬を求むるものあり、三年得ること能はず。涓人。君に言うて曰く、請ふ、之を求めむ、と。君これを遣る。三月にして、千里の馬を得たり、馬、すでに死す、その骨を五百金に買ひ、反つて以て君に報ず。君、大に怒つて曰く、安んぞ、死馬を事として、五百金を捐つる、と。涓人對へて曰く、死馬すら、五百金に買ふ、況んや生馬をや。天下、君を以て能く馬を市ふとす、馬、今至らむと。ここに於て、千里の馬、至るもの三。今、王、誠に士を致さむと欲すれば、先づ隗より始めよ、と。ここに於て、昭王、隗の爲に宮を築いて、之を師とす。樂毅は魏より往き、鄒衍は齊より往き、劇辛は趙より往き、士爭つて燕に湊まる」とある。【三七】綠耳　水經註に「桃林の中、野馬多し。造父、ここに於て、驪駒綠耳盜驪の乘を得て以て獻ず。周の穆王、これをして馭せしめ、以て西王母に謁す」とあり、荀子に「驊騮騹驥纖離綠耳、これ皆古しへの良馬なり」とある。【三八】貴鄉　縣名。元和郡縣志に「魏州に貴鄉縣あり」とある。【三九】鷹隼　風化篇に「乃奮翅而鷹隼」とある。【三〇】太古　唐虞より以上をいふ。【三一】義皇　前に義ば見ゆ。【三二】昌樂館　光和郡縣志に「魏州に昌樂縣あり」とある。通典に「三十里に一驛を置く、その通途大路に非ざるは館といふ」とある。【三三】綺席　立派なる寢席。綺は文綺、即ち細綾の類。【三四】清歌繞飛梁　列子に「韓娥、東、齊に之く、糧に匱し。雍門を過ぎて、歌を鬻ぎ、食を假る。すでに去つて、餘音、梁塵を繞つて三日絕えず」とある。【三五】朱紫朝　高誘の淮南子註に「日旦より食時に至るまでを紫朝と爲す」とある。【三六】祖逖　漢書に「公卿大夫、故人邑子、祖逖を設け、東都門外に供帳す」とあり、顏師古の註に「祖逖は饋行なり」とある。【三九】昊炎涼　寒暑の如く、その差の甚しきをいふ。賈賓王の詩に一朝殊二語默一、千里異二炎涼一とある。【四〇】九土　九州の土。【四一】中橫潰　橫潰は水を以て亂に喩へたので、中から崩れ出すといふ義。【四二】白骨成丘山　抱朴子に「白骨山を成し、虛祭、野に布く」とある。【四三】面鬪　史記索隱に「顏師古曰く、今の桃林縣南に洪澗水あり、即ち古しへの面鬪。按ずるに、山形、面の如し、故に面鬪と稱す」とある。【四四】壯帝居　陳後主の詩に山河壯二帝居一とある

に本づく。【四五】晉舒　唐書晉舒輪傳に「天寶十四載、祿山叛す。封常清、王師を以て敗る。帝、乃ち輪を召見し、太子先鋒兵馬元帥に拜し、凡そ河隴朔方奴刺等十二部の兵二十萬、潼關を守る。師、はじめて東す、先驅の牙旗、門に觸れて墮注し、旆竿折る。衆、これを惡む。天子、勤政樓に御して臨送し、輪に詔し、軍を以て行き、門を過ぎて下るなからしめ、百官郊餞、旌旗二百里に亙る。明年、祿山、子慶緒を遣して關を攻むるや、輪、擊つて之を走らす。賊將崔乾祐、陝郡を守り、旗鼓を仆し、羸師以て戰を誘ふ。覘ふもの曰く、賊、備なし、襲るべきなり、と。帝、これを信じ、使者、戰を趣し、項背相望む。輪、窘んで、出づるところを知らず。六月、引いて東し、慟哭して關を出で、靈寶の西原に次し、乾祐と戰つて、大に敗る。輪、數百騎を引き、河を絕つて、營に歸る。羸兵、わづかに八千、潼津に至り、散卒を收めて、復た關を守る。乾祐、進み攻む。ここに於て、火拔歸仁等、輪を紿いて關を出でしめ、執へて以て賊に歸し、洛陽に械送す。京師震動し、これに由つて、天子西に幸す」とある。【四六】忠謀　忠良にして正直なること。【四七】醯醬　醯醬と千物にすること。【四八】二祖　玄宗と肅宗。【四九】出遊豫　長安を逃げ出して西幸する。【五〇】兩京　洛陽と長安、東西兩都。【五一】帝子　肅宗を指す。【五二】專征　征伐の全權を委任される。【五三】秉旄　白旄を手に持つ。【五四】控　引く。【五五】節制非桓文　荀子に「秦の戰士、以て桓文の節制に敵すべからず」とあり、漢書に「齊桓晉文の際に至つては、その城に入つて、節制ありといふべし」とある。【五六】熊虎　尙書に「虎の如く、羆の如く、熊の如く、羆の如し」とある、精銳なる兵士をいふ。【五七】鬱風雨　後漢書岑彭傳に「晨夜道を倍して、兼行二千餘里、徑に武陽を拔き、蜀將をして廣都に臨ませしむ、成都を去ること數十里、勢、風雨の若く、至るところ皆奔散す」とある。【五八】房陵　唐時の房陵郡、山南京道に屬し、即ち後の房州。【五九】終古　往古に同じ。【六〇】香爐　廬山の一峰、塞遠の廬山記に「東南に香爐山あり、孤峰秀起、游氣その一を籠むれば、氤氳として香煙の若し。白鶴、その外に映ずれば、炳然として、衆峰と殊別」とあり、又「衆嶺中、第三嶺、極めて高峻、太史公東游、その峰に登つて遐觀す。南、五湖を眺め、北、九江を望み、東西肆目、天庭に陟るが若し」とある。【六一】奏霞　霞を食ふ。【六二】瑤泉　水極めて清き泉。【六三】良牧　北史に「崔士謙、江陵總管荆州刺史を授かり、外、强敵を禦ぎ、內、軍人を撫し、風化大に行はれ、號して良牧と稱す」とある。【六四】神明　漢書に「班伯、定襄太守となり、郡中震慄、成な神明と稱す」とある。

贈　經亂離後天恩流夜郎憶舊遊寄懷贈江夏韋太守良宰

【六五】黄鶴樓　前に見ゆ。【六六】鸚鵡洲　文選に載する禰衡の鸚鵡賦の序に「黄祖太子射し、賓客大に會す。鸚鵡を獻するものあり、酒を衡の前に舉げて曰く、禰處士、今日用て賓を娛ますなし、竊に以ふに、この鳥、遠くよりして至る、明聰聰靈、羽族の貴ぶべきもの、願はくは、先生、これが賦を爲り、四座をして共に榮觀せしめよ、亦た可ならずや、と。衡、因つて賦を爲り、筆、停滯せず、文、點を加へず」とある。【六七】鸚鵡洲　太平寰宇記に「大江の東、江夏縣の西南二里に在り、西、この洲を過ぐれば、北頭より七十步、大江の中流、漢陽縣の分界たり」とあり、後漢書には「黄祖、江夏の太守となる。時に、祖の長子射し、大に賓客を會す、鸚鵡を此洲に獻するあり、故に名を得たり」とある。【六八】樊山　元和郡縣志に「樊山は、鄂州武昌縣の西三里に在り、謝玄暉の詩に曰く、釣臺臨二講閣一、樊山開二廣宴一と。これを謂ふなり」とある。【六九】峨眉雪　三峽記に「峨眉の積雪、時を經て散ぜず。峨眉山は、乃ち峨山の一支なり。峰巒高峻、上極めて寒冷、冬夏積雪、風日を經と雖も、消釋すること能はず、夏に入つて、はじめて融泮するを得、流れて峨江に入り、三峽を經て下り、清流これが爲に色を變ず」とある。【七〇】三峽　胡三省の通鑑註に「江水、巴東より東、陵に至る、この間、廣陵峽、巫峽、西陵峽あり、これを三峽といふ。一に曰く、三峽は、西峽、歸峽、巫峽、七百里中、西岸連山、略ぼ闕處なく、天を蔽ひ、日を蔽ひ、日中夜分に非ざるよりは、日月を見ず」とある。【七一】萬舸　舸は大船、陸放翁の入蜀記に「鄂州に至り、稅務亭に泊す。賈船客舫、計るに勝ふべからず、尾を銜んで絶えざるもの數里、京口より以西、皆及ばず。李白の江夏章太守に贈る詩に曰く、萬舸『乙』中來、運帆過二揚州一と。蓋しこの地、唐より衝要の地たり」とある。【七二】吳娃與越豔　王勃の採蓮賦に、吳娃越豔、鄭旋秦妍とあつて、說文に「吳楚の間、好を謂うて娃と爲す」とある。【七三】筋竅　妖冶の貌。【七四】鉛紅　紅粉に同じ。【七五】簾櫳　櫳は房室の窓。【七六】小垂手　舞の手ぶりの一種、樂府雜錄に「舞は樂の容なり、大垂手、小垂手あり、或は靈鴻の如く、或は飛燕の如し」とある。【七七】清水出芙蓉、天然去雕飾　鍾嶸の詩品に「謝詩は芙蓉の水を出づるが如し」といひ、又江淹の詩に敢不二自雕飾一とある。【七八】虎士　侍衛の武士、前に見ゆ。【七九】列戟　古今註に「戟は、木を以て之を爲る。後世刻鐵、復た典型なし。赤漆、これを飾み、亦た之を廸戟といひ、亦た之を棨戟といふ。王公以下通用し、以て前驅と爲す。」唐書百官志に「凡そ、戟、一品の門十六、二品及び京北、河南太原の尹、大都督、大都護の門十四、三品及び上都督、中都督、上都護、上州の門十二、下都督、下都護、中州、下州の門各十、衣柳架るるものは、五歲一たび之を易へ、薨卒するものは、既に葬つて追還す」とある。【八〇】一諾　漢紀に「季布然諾の信を立つ、時人これが語を爲して曰く、黄金百鎰を得るは、季布の一諾に如かず」とある。【八一】青鳥　阮籍の詩に誰言不二可見一、青鳥明三我心一とあるに本づく。【八二】暖氣變寒谷　歲華紀麗に「劉向別錄に曰く、燕地寒谷、五穀を生ぜず、鄒衍、律呂を吹いて以て之を暖む、溫風至り、五穀生ず、因つて黍谷と名づく」とある。【八三】炎烟生死灰　史記に「韓安國、法に坐して罪に抵り、獄吏田甲、安國を辱む。安國曰く、死灰、ひとり復た燃えざらむや。田甲曰く、然らば卽ち之に溺せむと。居ること何くもなくして、梁の内史闕く。漢、使者をして、安國を拜して梁の内史と爲さしめ、徒中より起つて二千石と爲る」とある。【八四】鳳池　通典に「魏晉以來、中書監令、詔を贊し、記を命じ、時事を會し、文書を典作するを掌る。その地、樞近に在るを以て、多く寵任を承く。これを以て、人その位を固くし、これを鳳凰池といふ」とある。【八五】桀犬尙吠堯　史記に「桀の犬、堯を吠えしむべし」とあつて、史思明聖に喩ふ。【八六】千秋　漢書に「車千秋、他の材能學術なく、又伐閱功勞なし、特に一言主を悟らすを以て、旬月にして、宰相封侯を取る。世、未だ嘗て有らざるなり。後、漢の使者、匈奴に至る。單于問うて曰く、聞く、漢、新に丞相を拜すと。何を以て之を得たる。使者曰く、上書事を言ふを以ての故に。單于曰く、苟くも、是の如くならば、漢、丞相を置く、賢を用ふるに非ざるなり、妄一男子上書するも、卽ち之を得む」とあつて、千秋は、宰相もしくは苗晉卿王琪聖に喩ふ。【八七】大國憂　左傳に「今、王室實に蠢蠢たり、吾が小國惴る、然れども、大國の憂なり」とある。【八八】兩山　太華と首陽。【八九】逡雖　戰國策に「諸侯、一なるべからず、猶ほ逡雖の俱に柄に止まる能はざるがごとし、亦た明かなり」とあつて、當時の諸節度に喩ふ。【九〇】寃猶　猶蹂に同じ。【九一】羿　古しへの善射、前に見ゆ。【九二】旋頭　胡星。

【題義】永王璘の叛亂が僅に平いだ後、李白は、本來ならば、重い罪科に處せらるる處であつたが、幸にして、二三の有力者に救はれ、特に天恩を假し、夜郎の地に遠流せらるることとなつた。そこで、李白は、往年豪游の跡を思ひ出で、懷を書して、この詩を江夏の太守韋某に贈つたのである。良

宰は多分その字であらう。江夏は鄂州、卽ち岳陽の地である。方輿勝覽には、この詩を贈つた韋太守は、韋景駿だといつて居るが、何に據つたのか分らない。

【詩意】天上には、白玉の都があつて、そこには、五城といひ、十二樓といふやうな幾多の宮觀が羅列して、その美美しさは何とも譬へやうもなく、幾多の仙人が其處に羣つて居る。われ李白も、元と天界に居たもので、仙人は、我が頭を撫で、我が年なほ壯なる時分、長生の術を習ひ受けた。然るに自分は、天上ばかりで面白くないといふので、一つ人世に降つて、心ゆくばかりに快樂を恣にしたいといふやうな、間違つた了見を起した爲に、やがて、生を此世に受けて、はじめて人間に落ち、そこで、古今治亂の實情を餘程研究して見た。顧みれば、秦の始皇より今の天子に至るまで、千餘年の間、中國には、九十六人の聖君が、入れ替り、立ち替り、帝位に登られたが、空名を浮雲に掛けたに過ぎず、ある時は、乾坤を一擲して、一かばちかの大博奕をやらかし、到底、人間に於ては、戰爭を全廢することが出來ない。そこで、一かどの功名を立てるには、霸王の謀略が必要であるといふ處から、自分も試に之を窮め、やがて、天晴の高官に登つて、大車に乘じ、冠冕を戴くやうな身分に成りたいと思つて居たが、時の運命が豫期と違ひ、どうしても、うまく行きさうにもないので、これを見切つて、東海の邊に赴き、劍を學んだり、文を作つたりした。しかし、劍は一人の敵、萬人の敵に當ることは出來ないので、翻つて自ら其拙を笑ひ、碌碌これを窮めずして中止し、文章を作つたところで、格別何を仕出かすといふことはなく、唯だ聲名を天下に竊むに過ぎず、劍といひ、文といひ、ともに、兒童の戲で、もとより道ふに足らず、やがて、時勢の日に非なるを見て、古しへの梁鴻の如く、五噫の歌を唱へつつ、長安の都を立ち去ることに成つた。かくて、愈よ其地を去らむとする時に際し、慷慨の餘、涙下りて冠の紐を濕す位。ここに、君は、世にすぐれたる倜儻の才略を備へたもので、超然として高く拔き出で、幾多の英才に冠たるべき人物である。君は、離別の筵を開いて、わが行を送り、今次遠地に赴く我が心の悲を慰めて下さつた。その時、君は、同志を引き具し、鞍を置きし馬は、簇つて雲の如く、わざわざ予を驃騎亭まで見送り、歌鐘に和して樂を奏し、別離の意を十分に盡すことが出來ぬ內に、白日は、昆明池上に落ち、天も暮れかかつたから、心ならずも、手を分ち、われは、愈よ長安を立ち去つて仕舞つた。空さむげなる十月の頃、北邊に近き、幽州の地に往つて見ると、そこには、多くの兵士が屯集して、その手にせる矛は、光り輝いて、さながら、星を列ねたるが如く、まことに、只ならぬ模樣であつた。それは何故かといふと、我が君は、北邊廣漠の土を棄て、地を掃うて、一切これを安祿山一輩の邊將に貸し與へたからである。彼等は、長鯨の如く暴ばれ廻り、呼吸すれば、百川の水を逆走せしむべく、その餘威、遠く朔漠に及び、燕然山をも傾け崩さむばかりであつた。かくの如く、邊將は、權を專らにし、殆んど獨立して居るやうな按排で、やがて中原に押し寄せるに相違なく、その弊害は、明かにして、自分は心に之を知つて居たが、誰に語

ることも出來ず、却つて、京地を去つて、蓬萊、瀛洲などいふ仙境に棲みたいと思つた位。弓を挽いても、光芒爛然たる天狼を射落さうといふやうな勇氣も出ず、全くおぢ恐れ、弓には矢を挾んだ儘、敢て引きしぼらうともせず、まことに、意氣地の無い話であるが、これも、邊將の聲威に敵し兼ねたからで、今更どうにも仕方がない。せめて、わが才を認めて用ひて呉れる人でもあれば、又格別であるが、さういふ人は、絶無であるから、かの黄金臺を過ぎては、涙を拂うて古しへを弔ひ、天を呼んで、昭王の再び此世に返らぬを痛哭するばかり。昭王すでに去りし後は、駿馬の骨を重んずる人もなく、騄駬の如き名馬も、飼養されずして、空しく踊り跳ねて居る。それは樂毅にして今日に再生するも、その主に遇はずして、奔り去るより外はない。しかし、どこへ往つても持てぬ處から、馬を驅つて、すごすごと貴鄉縣に還り、そこで、幸にも君に逢つた。その時、君は、縣令の職に居たが、紱歌を奏しつつ、華堂に坐し、そして、配下の縣内は、よく治まり、方百里の間、無爲にして、さながら太古の如く、われも此に逗留して、白晝に高臥すれば、羲皇以上の人に成つた樣な想がした。君は、自分を優待し、昌樂館に於て樂を張り、筵を開いて壺觴を列し、賢豪と稱すべき名士は、佳人の間に立ち交り、燃え立つ燈火に對し、嚴然として行を成すばかり、醉うて、坐客の舞ふ影は、綺席に入り亂れ、女が清き聲して唱へる歌は、梁を繞つて、しばし、たゆたふやうであつた。しかし、折角の樂も、一日に及ばざるに、君は、任滿ちて長安に歸らむとし、餞別の席には、萬人も寄り集まり、供帳は處處に設けられて、互に相望むといふ有樣。一たび相別るれば、忽ち千里を隔て、君と我と、榮枯全く異なれるは、さながら寒暑の如くである。その寒暑が、幾度か改まり、しきりに、年が移る間に、果然、禹域九州の土は、眞中から崩れ潰え、官軍は、賊兵と接戰を始め、その爲に、沙塵は舞ひ上つて、雲の海なす大空も暗く搔き曇り、草木は殺氣に靡いて、星も光を無くし、白骨は積んで邱山の如く、天下の蒼生は、何の罪あつて、かかる憂き目に罹つたのか、まことに、氣の毒千萬の事である。函谷關は、長安の固であつて、その爲に、皇居の壯麗も保つて行かれるので、その少し先の潼關を守れる哥舒翰の雙肩に國家の運命は懸つて居るのである。然るに、無殘なるかな、哥舒翰は、一敗地に塗れ、そこで、函谷の關門を開いて、賊將を迎へ入れ、長戟を擁する三十萬の賊兵は、遠慮なく關中の地に流れ込み、その爲に、公卿は、草間に逃げ惑うて、犬羊の如く、忠義鯁直の人人は、賊に拘へられ、或は鹽漬にされたり、乾物にされたり、散散なひどい目に遇ひ、天子と太子と、遂に長安に居たたまらずして、蜀の方へ逃げ出し、長安洛陽の兩都も、とうとう邱墟と變り果てて仕舞つた。永王璘は、帝子の尊貴を以て、專征の大權を許され、白旄を手にして、南方の楚地を牽制して鎭めることに成つたが、何分、その軍隊の節制は、むかし、齊桓晉文の如き節制なく、將帥は熊虎の如き精鋭の兵士を擁して居ても、まだ大功を立つるに及ばず、一般の人心は、官賊の孰れに付かうかといふので、專ら勝敗を觀望して、去就に迷つて居た處が、賊軍の方が、はるか

に優勢で、その勢は、風雨の飛騰するが如く、やがて、殘らず、賊に付いて仕舞つた。その時、君は、房陵を固守し、忠眞の誠節は、むかしから類もない位。予は、廬山に引き込んで、香爐峰の絶頂に高臥し、雲霞を食ひ、清泉に漱ぎ、仙術を稽古して、心のどかに住みなし、門を開けば、九派の江流の廻轉するを見るべく、枕邊には、五湖の煙水、相連つて、朝夕の眺も好く、世の戰亂を外にして、打澄まして居た。然る處、ある夜半に、水軍忽然として來り聚り、廬山の麓から遠くもあらぬ潯陽の地は、旗さし物が簇る位。わが虛名が適ま此身を誤り、永王璘の部下の將卒どもに脅迫されて、無理無態に樓船に引き摺り上げられて仕舞つた。當座の褒美といふので、永王から、五百金を賜はつたが、これを棄つること浮煙の如く、決して、手にだも觸れず、官をも辭し、賞をも受けず、すでに、永王の野心を看破つた上は、一味でないといふことを見せる爲に、色色やつたが、遂に連坐せられ、永王敗後、われも、夜郎の空に流謫せらるることと成つた。その夜郎といふ處は、萬里の道を踏んで行かねばならぬので、西の方、峽江を溯ると、その危險の程、俄に人の老を催すばかり。時に亂賊はじめて平らぎ、六合の間は掃蕩して、再び清平になつたが、われのみは、霜を被れる草の如く、凋零の餘、何とも言ひやうも無い位。おもへば、日月は偏頗なく照らすのに、われのみ、かかる不幸に罹つたのは、如何なる故か、仰いで蒼天に訴へる便宜さへない。君は、今、江夏に太守となり、風化大に行はれて、世に良牧と稱せられ、神明の德は、衆人を心服せしめ、しかも、仁惠に深く、交道を恤みて、われを歡迎して下さつたのは、まことに有り難い。そこで、辱くも、ここに青雲の士たる君の賓客となり、三度目に黃鶴樓に登つた。ここは、處士禰衡の故蹟であつて、彼が狂狷を以て一生を終りしを思へば、とても、我が及ばぬ處だといつて愧ぢ入る外はなく、その墓のある鸚鵡洲に對しては、茫然自失するばかり。樊山は依然たれども、三吳の霸氣すでに盡き、折しも、天地秋に入つて極めて物さびしい。滔滔たる揚子江は、もと峨眉山の雪が解け込むので、三峽の險を橫ざつて流れ來り、多くの商船は、ここを通り、帆を連ねて、東の方、揚州に下るのである。かくて、萬里空濶なる眺に見ほれ、曠然として、わが愁を散じたのは、まことに心地よき限りである。と見れば、高樓の上、紗窓天に倚つて開け、樓上から俯瞰すれば、水邊の樹木は、綠なること毛髮の如く、やがて、日は名殘を留めず、山に銜まれて、四邊が昏くなると、酒を促して居る間に、月が東にさし上つた。かかる處に、吳越の美人どもは、紅粉の粧を凝らし、窈窕として、なまめかしき態を爲し、客に呼ばれると、二階の段を登つて來て、につこり笑つて、簾を掛けたる窓の邊から出て來る。そして、客に對して、小垂手の手ぶりを爲し、羅衣を春風に翻して舞ひ出し、頻りに、酒邊の興を添へる。やがて、賓客は跪いて、もう十分であるから一休みせよといへど、主人たる君は、情未だ盡きず、この上にも、客の心を慰めたいと思つて居る樣な氣色。この間、君は近作だといつて、荆山紀遊の詩を示されたが、いかにも、善く出來て居て、古しへの詩人、江淹、鮑照の輩も、顏色を動かす

べく、その妙趣は、清水より芙蓉の花が咲き出て、自然に雕飾を去つた如く、まことに技工を超越して居る。かくて、胸襟を披いて、逸興を縱にし、時として招延せられざることなく、現に君の官舍にも往つたことがあるが、朱門堂堂として、その前には、護衞の武士が相集まつて列をなし、列戟は森森として居る。その庭前には、竹を剪り、石を鑿つて、巧に按排し、そして、清い水が縈り流れて、處處に淵を作つて、如何にも、涼しさうである。それで、水に臨める高樓に登り、二人對坐して、緩緩話をしたが、君の議論には、英音多く、決して、尋常一樣のものではなく、加ふるに、片言も白璧より貴く、一諾千金を輕んずるといふ氣概さへ見えた。われは、君の友たるに愧ぢないといふ自信を有し、別後、青鳥に託して、手紙を寄せ、この一片の丹心を明かにしたのである。それから、われは、愈よ旅をつづけて、西に向つた處が、たとへば、五色の鵠が天上に飛鳴し、雲間より下るが如く、料らずも、恩赦の敕書が來たといふので、はじめて、夜郎へ放逐されることを赦され、半途から引きかへすことになり、かの鄒衍が律呂を吹いて、寒谷に暖氣を生ぜしが如く、韓安國の言つたやうに、死灰再び燃えて、炎烟を生ぜしが如く、はじめて、自分も生きかへつて、先づ以て助つた次第である。承れば、君も中書舍人の榮職に登りて、さすがに賈誼の如き經世の才を棄てざりしは、聖代の恩澤で、まことに御目出たい。今しも、安祿山すでに亡ぶと雖も、史思明輩は、依然として、なほ兇虐を縱にし、たとへば、桀の犬が堯に吠えると同じであるし、折角、宰相輩を任用した處で、その人を得ざれば、むかし、漢で車千秋を擢用して、匈奴の單于さへ之を笑つたといふ樣なことにもなるので、人物銓衡が第一である。されば、外には賊徒未だ除き盡されず、內には朝廷の弊事が猶ほ殘つて居るといふ樣な次第で、一たび思うて、ここに至れば、中夜に四五回も嘆息をする位で、常に國家の爲に心配して居る。今しも、旗さし物は、太華・首陽の兩山を夾み、そして、黃河の流が會ま其中央に當つて居るといふ有樣。諸節度使は、恰も雞が止まり木に竝び切れず、從つて、安居を得ざるが如く、獨り挺んでて進軍する譯にも行かないといふので、馬に飲つて、空しく猶豫して居る。この分では、何時長驅して、賊軍を平定するか。折角、賊首を討ち取つたのに、愚圖愚圖して居ては、殘賊どもが、再び勢を盛り返すことが無いとも限らない。願ふところは、古しへの彛の如き弓の名人を得て、一箭に旄頭の胡星を射落したいが、誰が果して、一擊に掃平の功を全うするか、まことに案じられて、堪まらぬ次第である。

【餘論】この詩は、李白が、一身の經歷を敍し、殊に今次罪を獲た原因であるところの永王璘との關係に就いては、三たび意を致し、そして、刻下の形勢に及んだので、その間に、韋太守との交誼、及び離合が點綴してある。これは、集中有數の長篇で、結構の上に於ても、細心の工夫を用ひ、そして、文字も洗鍊してあつて、もとより、大作を以て稱すべきものである。胡震亨は「太白、永王璘の一事、論者、これを刻に失はざれば、卽ち曲げて諱を爲し、これを誣に失す。惟だ蔡寬夫の說を衷と爲す。

贈　經亂離後天恩流夜郎憶舊遊書懷贈江夏韋太守良宰

その言に曰く、太白は人に從つて亂を爲すものに非ず。蓋し其學、本と縱横に出で、氣俠を以て自ら任ず、中原擾攘の時に當り、これを藉つて、以て奇功を立てむと欲するのみ。その詩に曰く、空名適自誤、迫脅上二樓船一と、又曰く、南風一掃胡塵淨、西入二長安一到二日邊一と、亦た其志を見るべし。大抵、才高く、氣廣く、孔北海の徒の如く、もとより未だ必ずしも成功あらず、しかも、人を知つて事を料るは、尤も其の難しとするところの者なり、議者、或は責むるに璘の猖獗にして、仰いで以て事を立てむと欲し、孔巢父、蕭穎士が未萌に察するが如くなること能はざるを以てす、これ可なり。その志の若きは、亦た哀むべし、と。この言や、太白を九原に起すも、倘しくは亦た心服せむ」といひ、乾隆御批にも、略ぼ同一の旨趣を是認して、詩評に及び、下の如く云つて居る。曰く、「白の璘の辟に從ふや、蘇軾、その迫脅に由るを辨ず、論、甚だ平允。この篇、交游の始末を歷敍し、しかも、白が平生の蹤跡、亦た略ぼ此に見ゆ。十月到二幽州一の一段、蓋し白が放たれし後、北、燕趙に遊び、形勢を觀聽し、祿山の必ず叛するを知る、尾大掉はざるの害、言はむと欲して之を述ぶる能はず、猶ほ痛切を覺ゆ。潼關守を失ひ、江陵亂を煽すると、白の璘に脅されて累を受け、遠謫さるるとに至りては、明かなること、掌を指すが如くならざるなし。結尾の一段、廟堂の人なきを慮り、將帥の一ならずして、賊の速に平ぐるを得ざるを憂へ、前に遙に相照應す。通篇、交情時勢を以て互に經緯を爲し、汪洋瀰瀰、百川の河に灌ぐが如く、長江の海を起すが如く、卓乎たる大篇、北征と竝び峙つべし」と。

なる程、これで十分盡して居る樣ではあるが、趙瓯北は、精細に考核し、前後、聊か明邑を缺くものあることを詳論して居る。曰く、「青蓮、安祿山の亂を避け、南、江左に奔り、後、永王璘の爲に招かれて幕中に入り、坐累罪を得るの事、その詩に就いて之を核すれば、亦た其次第を得べきものあり。扶風豪士歌に云ふ、洛陽三月飛二胡沙一、白骨相撐如二亂麻一、我亦東奔向二吳國一、來醉扶風豪士家、と。按ずるに、天寶十四載十一月、祿山反す、十二月、洛陽を陷る。その三月といふは、十五載の春、洛より南奔するなり。猛虎行、竄二身南國一避二胡塵一の下、卽ち云ふ、昨日方爲二宣城客一、と。是れ南奔して先づ宣城に至るなり。又亂後將レ避二地剡中一、贈二崔宣城一の詩あれば、宣城に至りし後、本と剡に入らむと欲す　然れども、贈二王判官一に云ふ、大盜割二鴻溝一、如三風掃二秋葉一、吾非二濟代人一、且隱屏風疊と。すなはち　剡に入らむとして、未だ果さず、卽ち廬山に往くなり。後に贈二江夏太守一の詩あり、自ら永王璘に招致せられて、幕に入りし事を敍して云ふ、半夜水軍來、迫脅上二樓船一、と。是れ、璘、潯陽に至りて之を招致す、而して、舊唐書に「白、璘に宣城に謁見す」といふものは、非なり。青蓮、本と縱横を學び、功名を以て自ら許す。その璘に從ふや、正に藉つて、以て功を立てむと欲す、故に作るところの永王東巡歌、第二首、卽ち云ふ、但用二東山謝安石一、爲レ君談笑靜二胡沙一、と。すでに、隱然、謝安を以て自ら許す。この時、璘、未だ異志あらず、至るところ、富饒なるを見るに及びて、はじめて、江左を窺ふの意あり。然れども、猶ほ未だ顯言せず、青蓮もとより未だ之を知らず、故に第五首

ふ、諸侯不レ救河南地、更喜賢王遠道來と。方にその能く勤王するを美す。末章に云ふ、南風一播胡塵靜、西入二長安一到二日邊一と。猶ほ、その功を成し、京に入つて凱を奏するを望むなり。卽ち云ふところ、雲夢開二朱邸一、金陵作二小山一、小山朱邸は、亦た是れ藩王の事、且つ在二永軍一宴與二諸公一の詩に云ふ、願與二四座公一、靜談金匱篇、所レ冀旄頭滅、功成追二魯連一と。亦た賊を討つを以て志と爲すなり。然らば、青蓮亂に從ふの意ありといふは、もとより辨を待たざるなり。ひとり是れ、璘、初め未だ顯言せず、探訪使李希言の手牒するに及び、璘、乃ち端を借り、怒を發し、渾惟明をして希言を襲はしめ、李廣琛をして廣陵に趨らしめ、すなはち、已に顯然として、逆を爲す。詩中に王出二三山一按二五湖一の句あり、これ已に璘に隨つて金陵より東下す、豈に猶ほ其悖逆を知らず、直に璘が丹陽に敗るるに至りて、はじめて奔逃するか。蓋し、已に璘の軍中に入り、前後左右、璘の兵に非ざるはなく、遂に自ら脫する能はず、必ず敗亂の時に至つて、はじめて、間を得て逃出すべきのみ、然れども、その南奔詩に云ふ、主將勳二讒疑一、王師忽離畔、賓御如二浮雲一、從レ風各消散、と。反つて、李廣琛の反正歸國する者を以て、離畔と爲すに似たり。その愚、亦た甚し。且つ、その洛陽より南奔するの詩に云ふあり、張良未レ遇韓信貧、劉項存亡在二兩臣一、暫到二下邳一受二兵略一、來投二漂母一作二主人一と。又云ふ、蕭曹曾作二沛中吏一、攀龍附鳳會有レ時、と。これ直に亂に因つて風雲際會を圖らむと欲す。且つ永王東巡歌の內に云ふあり、我王戰艦輕二秦漢一、卻似二文皇欲レ渡レ遼と。すなはち、覓に太宗を以て璘に比す。その語言、亦た太だ檢せず。宜なり、その身、重罪に陷り、崔渙宋若思の辨雪を以てするも、終に夜郎の行を免れざるや」と。何は兎もあれ、李白が初め永王璘に隨從したのは、王に勤王の志があると見て、これに因つて、功名を立てむと欲したのに相違ない。李白は、迫脅上二樓船一といつて居るが、これは、跡から自ら辯護する言ひ草で、もとより、確證もないし、第三者の言に非ざる限り、決して、信用する譯に行かぬ。おまけに、永王東巡歌に於て、あれ程まで、王の才略功業を稱嘆したのを見ると、斷じて、脅迫されて、厭厭ながら、幕中に留まつて居るものの口から出たとは思へない。唯だ趙甌北の云へる如く、語言の太だ檢せざると、もう一つ、永王の叛跡を察することの極めて遲かりしとは、彼の過失で、今さらながら、辯護の餘地はない。但し、彼の心、あくまで潔白にして、叛逆に與らざりしことは、無論の事で、今さら贅するにも及ぶまいと思はれる。

江夏使君叔席上。贈史郎中一　江夏使君叔の席上、史郎中に贈る

鳳凰丹禁裏。銜出紫泥書。　鳳凰は丹禁の裏、銜み出す紫泥の書。
昔放三湘去。今還萬死餘。　昔は三湘に放たれて去り、今は還る萬死の餘。
仙郎久爲別。客舍問何如。　仙郎、久しく別を爲し、客舍問ふ何如。

涸轍思流水。浮雲失舊居。
多慙華省貴。不以逐臣疎。
復如竹林下。而陪芳宴初。
希君生羽翼。一化北溟魚。

涸轍、流水を思ひ、浮雲、舊居を失ふ。
多く華省の貴きに慙づ、逐臣を以て疎んぜられず。
復た竹林の下の如く、しかも、芳宴の初に陪す。
希はくは、君、羽翼を生じ、一たび北溟の魚に化せよ。

【字解】〔一〕鳳凰　鳳凰の口に詔書を銜ますこと、前に見ゆ。〔二〕紫泥　元和郡縣志に「武都に紫水あり、泥亦た紫。漢朝、璽書を封ずるに紫泥を用ふ、卽ちこの水の泥なり」とある。〔三〕丹禁　潛確居類書に「天子の居るところ、禁といふ、丹を以て壁に塗る、故に丹禁といひ、紫禁といふ」とある。〔四〕三湘　前に見ゆ。〔五〕涸轍　莊子に「周、昨來る、中道にして呼ぶものあり、周、顧みて視れば、車轍中に鮒魚あり、曰く、我は東海の波臣なり、君豈に升斗の水あつて、我を活かさむか」とある。〔六〕華省　秘書省をいふ。〔七〕竹林下　晉書に「阮咸、任達にして拘はらず、叔父籍と竹林の遊を爲す」とある。〔八〕北溟魚　莊子に「北溟に魚あり、その名を鯤となす、鯤の大、その幾千里なるを知らざるなり、化して鵬となる」とある。

【題義】この詩は、李白が夜郎放流の途中より赦されて歸つて來たとき、族叔なる江夏太守の席上に於て、郎中の史某に贈つたのである。

【詩意】丹禁の中に於て木で造つた鳳凰が紫泥の敕書を口に銜へて下り、わが罪を赦されるといふ御沙汰があつた。さきには、三湘の外に放逐されたが、今は、萬死の餘に、再び還り來ることに成つた。仙郎に比すべき君とは、久しく別れて居たが、今次偶然邂逅したから、客舍に於て、近況如何と問うた。われは、乾きたる轍に居る鮒の如く、氣息奄奄として、流水の中に放たれたいと念じ、舊居は、浮雲の彼方に見えず、折角赦されたものの、進退ここに谷まつて居る。しかるに、君等は、華省の尊貴なる身でありながら、逐臣たる故を以て、吾を疎外されず、依然厚遇されるのは、まことに、辱き次第で、それのみか、今日、芳宴に陪し、さながら七賢輩が竹林の下に於て相會するやうな趣がある。數奇、予の如きものは、もとより道ふに足らぬが、君は天晴の英才、おまけに年も若いことであるから、この處で、一と奮發し、かの北溟の魚たる鯤が羽翼を生じ、化して鵬となつたやうに、目ざましき進境を開かれたいものである。

【餘論】この詩は、ほんの挨拶に過ぎぬが、事情を盡して、極めて簡切明快、結二句は、特に史郎中に囑望したので、依て以て朋友相勵ますの義を見ることが出來る。

博晉鄭太守自廬山千里相尋。入江夏北市門見訪。却之武陵。立馬贈別。

博晉の鄭太守、廬山より千里相尋ね、江夏北市門に入りて訪はる、却つて武陵に之くを、馬を立てて、別に贈る。

大梁貴公子。氣蓋蒼梧雲。

大梁の貴公子、氣は蓋ふ蒼梧の雲。

若無三千客。誰道信陵君。
若し三千の客なくんば、誰か道はむ信陵君。

救趙復存魏。英威天下聞。
趙を救ひ、復た魏を存し、英威、天下に聞こゆ。

邯鄲能屈節。訪博從毛薛。
邯鄲、能く節を屈し、博を訪うて毛薛に從ふ。

夷門得隱淪。而與侯生親。
夷門、隱淪を得、しかも、侯生と親む。

仍要鼓刀者。乃是袖槌人。
仍ほ鼓刀の者を要す、乃ち是れ槌を袖にするの人。

好士不盡心。何能保其身。
士を好んで、心を盡さざれば、何ぞ能く其身を保たむ。

多君重然諾。意氣遙相託。
多とす、君が然諾を重んじ、意氣遙かに相託するを。

五馬入市門。金鞍照城郭。
五馬、市門に入り、金鞍、城郭を照らす。

都忘虎竹貴。且與荷衣樂。
すべて、虎竹の貴きを忘れ、且つ荷衣と樂む。

去去桃花源。何時見歸軒。
去去桃花源、何の時か歸軒を見む。

相思無終極。腸斷朗江猿。
相思、終極なし、腸は斷つ朗江の猿。

【字解】【一】大梁貴公子　信陵君を指す。【二】蒼梧謀　歸藏に「白雪あり、蒼梧より出でて大梁に入る」とある。【三】訪博從毛薛　史記信陵君列傳に「公子、趙に留まる。趙に、處士毛公は博徒に藏れ、薛公は賣漿の家に藏るるを聞き、公子兩人を見むと欲す、兩人自ら匿れて見るを肯んぜず。公子、在るところを聞き、乃ち間歩して往き、この兩人に從つて遊び、甚だ歡ぶ。公子、趙に留まること十年、歸らず。秦、日夜兵を出し、東、魏を伐つ、魏王、これを患へ、使をして、往いて、公子に請はしむ。公子の其之を怒らむことを恐れ、門下を誡め、敢て魏王の使の爲に通ずるものは死せむといふ。毛公薛公、往いて公子を見て曰く、秦、魏を攻む、魏、急にして公子恤へず、秦をして大梁を破り、先王の宗廟を夷げしむれば、公子當に何の面目あつて天下に立たむや、と。語未だ卒るに及ばず、公子、立どころに色を變じ、車を告げ、駕を趣し、歸つて魏を救ふ。魏王、上將軍の印を以て公子に授く。公子、五國の兵を率ゐ、秦軍を河内に破り、勝に乘じ、秦軍を逐うて、函谷關に至る、秦兵敢て出でず、この時に當つて、公子の威、天下に振ふ」とある。【四】夷門得隱淪　信陵君が夷門の隱士侯生の策を用ひ、朱亥をして、鐵椎を袖にして、將軍晉鄙を椎殺せしめ、その軍を奪ひ、進んで、秦兵を擊ち、以て邯鄲を救うて趙を存せしこと、前に見ゆ。【五】重然諾　江淹の詩に延陵輕三寶劍、季布重二然諾一とある。【六】虎竹　前に見ゆ、兵符。【七】荷衣　楚辭に荷衣兮蕙帶とある。【八】桃花源　前に見ゆ。【九】歸軒　歸りの車。【一〇】無終極　盡きず、極まらず。【一一】朗江　方輿勝覽に「朗水は、常德府武陵縣に在り、その水、西南辰錦州より郡界に入り、郡城を經て大江に入る、これを朗江といふ」とある。

【題義】博平は博州で、唐時の博平郡。鄭太守、名字は不詳、廬山は元和郡縣志に「江州潯陽縣東三十二里に在り、本名は鄱山。むかし、匡俗、字は子孝といふものあり、隱淪景を潛め、この山に廬す、漢の武帝、拜して大明公となす、俗、廬君と號す、故に山號を取る。周環五百餘里」とある。この詩は、李白が夜郎放流の途中から歸つて來て、江夏卽ち岳陽に滯留して居た時、博平の太守鄭某が千里を遠しとせずして、廬山から來り尋ね、北市門より江夏の城中に入つて、李白の寓居を訪問し、やがて、轉じて、武陵の方に趣かむとするに際し、馬を立てて之を送り、仍つて、この詩を賦して其人に

贈つたのである。

【詩意】君は、本と大梁の貴公子で、その意氣は、南、はるかに蒼梧の雲を蓋ふ位。しかし、三千の食客を致すに非ざれば、いかで、古しへの信陵君の如き盛名あるべき。抑も信陵君は、趙を救ひ、併せて魏を存し、その英風威名は、ひろく天下に聞こえて居た。信陵君の邯鄲に在るや、能く節を屈し、博徒の居る陋巷を訪うて、毛公、薛公に從つて遊んだ。それから、初め魏に居る時は、夷門に於て隱淪の處士侯嬴を尋ね出して、それを上客とし、その推薦に因つて、鼓刀の屠者朱亥を召し出し、四十斤の鐵椎を袖にし、將軍晉鄙を椎殺せしめて、その兵を奪ひ、遂に不世出の大功を立てた次第。たとひ、士を好むとも、十分に心を盡すに非ざれば、ほんの一時の豪舉で、却つて、其身に殃するやうな事になり、どうして、能く其身を保つて行くことが出來やう。然るに、君は、平生然諾を重んじ、意氣を以て遙かに相託されて居たが、果然、今日は、五馬、きらびやかに市門に入り、金鞍赫灼として城郭を照らすばかり、虎符を分つて、兵に將たる貴き身分をも忘れて、荷衣を著くる無官の窮士たる吾と一所に遊樂されたのは、この身に取つて、まことに辱き次第。かくてこそ、君は愈よ信陵君を以て擬せらるるに負かず、自分も亦た、侯生の如く、君が爲に身を棄て、毛薛二公の如く、君が爲に苦言を呈することを否まぬ譯である。それから、君は、桃花源を以て世に知らるる武陵の方に往かれるさうであるから、御歸りの車を見るは、何日であるか。一たび相別れし後、相思の情、極まるところなく、朗江の岸上に啼く猿の聲を聞いて、日夕斷腸の想に堪へぬことであらう。

【餘論】鄭太守を稱して大梁貴公子といひ、仍つて、その地に著名なる信陵君を以て之に擬したのである。それから、信陵君の事を八句述べたのは、稍や長きに過ぐる樣でもあるが、好レ士不レ盡レ心の二句を以て、これを鄭太守に逆歸せしめた處は、筆力千鈞といひたい處、その下は、現在の事を敍し、結二句、情に入つて更に婉、朗江は、起首の大梁と映帶し、人をして、江湖萬里の感を催さしめる。元來、かういふ詩は、ほんの應酬の文字に過ぎぬが、さすがは李白だけに、一氣呵成、不用意の間に、自然、氣が利いて垢ぬけのした處が、卽ち生命である。それから、蕭士贇の說に「好レ士不レ盡レ心、何能保二其身一、言ふは、公子趙を存し魏を救ふの功、始終、侯生・毛公・薛公の力を得たり、能く其身を保つ所以のもの、是れ心を盡し、士を好むの效に由るなり。この詩、蓋し太白、公子無忌を以て鄭公に屬望し、侯生・毛薛を以て、自ら期するなり」といひ、所論極めて明白である。

江上贈寶長史

江上、寶長史に贈る

漢求二季布一魯朱家。　漢、季布を求む、魯の朱家。

楚逐二伍胥一去章華。　楚、伍胥を逐うて、章華を去らしむ。

【字解】【一】季布　史記に「季布、氣を爲す任俠、楚に名あり。項籍兵に將たらしめ、數ば漢王を

萬里南遷夜郎國。
三年歸及長風沙。
聞道青雲貴公子。
錦帆遊戯西江水。
人疑天上坐樓船。
水淨霞明兩重綺。
相約相期何太深。
棹歌搖艇月中尋。
不同珠履三千客。
別欲論交一片心。

萬里南遷す、夜郎の國。
三年歸つて及ぶ、長風沙。
聞くならく、青雲の貴公子。
錦帆遊戯す、西江の水。
人は疑ふ、天上、樓船に坐するかと。
水は淨く、霞は明かに、兩重の綺。
相約し、相期する、何ぞ太だ深き。
棹歌、艇を搖かして、月中に尋ぬ。
珠履三千の客と同じからず。
別に交を論せむと欲す、一片の心。

に朱家の大俠を知り、季布が其所に匿るゝを意ひ、間を待つて、果して言ふこと、朱家の指の如し、上、乃ち季布を赦す」とある。【三】伍胥　史記に「楚の平王、伍胥を囚へて、その二子を召す。伍尚、遂に歸る。伍胥、弓を彎き、矢を屬し、出でて使者を見て曰く、父、何の罪かあり、以て其子を召す、と。將に射むとす。使者還り走る。遂に吳に出奔す」とある。章華は楚地の臺名、故に章華を去るといつたのである。【三】夜郎　今の雲南地方。【三】長風沙　楊齊賢は池州廣德の下八十里といひ、江南通志には「安慶府の

窘む。項羽滅するに及び、高祖布を千金に購求す。季布、濮陽の周氏に匿る。周氏曰く、漢、將軍を購ふこと急なり、遂して、且に臣の家に至らむとす。將軍、能く臣に聽かば、臣、敢て計を獻ぜむ。もし能はずんば、願はくは、先づ自剄せむ、と。季布、これを許す。乃ち季布を髡鉗し、褐衣を衣せ、廣柳車中に置き、并せて、その家僮數十人と魯の朱家の所に之いて之を賣る。朱家、心に是れ季布なるを知るも、乃ち買うて之を田に置く。朱家、軺車に乘じて、洛陽に赴き、汝陰侯滕公を見る、滕公、心東六十里に在り、李白、ここに泊して、長干行を作る」とある。【五】西江水　湖廣通志に「安陸府景陵縣境に在り、乃ち襄江の一派」とある。【六】棹歌　棹を引いて歌ふ。【七】艇　小舟。【八】珠履　史記に「春申君の客三千餘人、その上客、皆珠履を履む」とある。

【題義】この詩は、夜郎放流の歸途、江上に於て、長史の竇某に贈つたのである。長史は、前に見ゆ。

【詩意】むかし、季布は、項羽の將たりし故を以て、漢の高祖は、きびしく之を詮議したが、季布は、魯の朱家に依り、その御かげで助命された。次に、伍胥は、楚から逐はれて、章華臺の地を去り、やがて、吳に投じて、報復の快擧を爲した。かくの如く、季布も、伍胥も、一時は大分命が危かつたが、どうやら助つたので、われも此と同じく、重罪に處せらるべき處を、幸に赦されて萬里の南なる夜郎の國に謫せられ、三年も立たぬ内に、又赦されて立ち歸り、ここに、長風沙の地に來かかつた。聞けば、長史等、青雲の高きに居る貴公子どもは、錦帆を張つて、舟を西江の水に浮べ、流を上下して遊び戯れて居るさうで、それを遠望すれば、天上に在りながら、樓船に坐して居るかと疑はれるばかり。おまけに、水は碧に澄み、夕やけは赤く燃え、丁度、二反の練絹を曳いたやうである。君は、われと約束して、舟歌を唱へつつ、小舟を搖かし、今夜月中に遊ばうといはれたが、その御厚意は、まことに感佩に堪へぬ。われ等は、かの豪華を競うて珠履を穿てる春申門下三千の客と殊にして、唯だ意氣を以て相感じ、一片の心を以て、交を論せむと欲するのである。それに就けても、君の人物は、わが平

生欽慕する處で、今夜の游も、さぞ面白からうと思はれる。

【餘論】起結兩處に於て、故事を點出し、中間は、極めてあつさりと濟ましてあるが、月下の豪興、さぞかしと豫想される。

贈王漢陽

王漢陽に贈る

天落白玉棺。王喬辭葉縣。
天は白玉の棺を落し、王喬、葉縣を辭す。

一去未千年。漢陽復相見。
一去、未だ千年ならず、漢陽、復た相見る。

猶乘飛鳧舄。尚識仙人面。
猶ほ飛鳧の舄に乘じ、尚ほ仙人の面を識る。

鬢髮何青青。童顏皎如練。
鬢髮何ぞ青青、童顏皎として練の如し。

吾曾弄海水。清淺嗟三變。
吾、かつて海水を弄し、清淺三たび變せしを嗟す。

果愜麻姑言。時光速流電。
果して麻姑の言に愜ふ、時光、流電よりも速なり。

與君數杯酒。可以窮歡宴。
君と數杯の酒、以て歡宴を窮むべし。

白雲歸去來。何事坐交戟。
白雲歸りなむ去來、何事か坐に交戟する。

【字解】【一】天落白玉棺、王喬辭葉縣　後漢書に「王喬は、河東の人、顯宗の世、葉の令たり。喬、神術あり、毎月朔望、常に

鳧より臺に詣つて朝す。帝、その來る數ばにして、車騎を見ざるを怪み、密に太史をして之を伺望せしむ。言ふ、その至るに臨み、輒ち雙鳧あつて、東南より飛び來る。ここに於て、鳧の至るを候し、羅を舉げて之を張る、但だ一雙の履を得たるのみ。乃ち上方に詔して診視すれば、四年中賜ふところ、尚書官屬の履なり。後、天、玉棺を堂前に下す。吏人、推排すれども、終に動搖せず。喬曰く、天帝ひとり我を召すかと。乃ち休浴服飾して其中に寢ね、蓋、便ち立どころに覆ふ。宿昔、城東に葬る。土、自ら墳を成す。その夕、縣中の牛、皆流汗喘乏、しかも人知るものなし。百姓乃ち爲に廟を立てて、葉君祠と號す」とある。【二】清淺　神仙傳に「麻姑云ふ、接待以來、東海の三たび桑田となるを見る、さきに蓬萊に到りしに、水又往日よりも淺し」とある。【三】時光速流電　陶潛の詩に「一生復能幾、倏如三飛電」とある。【四】交戟　陶潛の詩に、貧富常交戟、道勝無戚顏」とある。

【題義】漢陽は縣名、沔州漢陽郡の隷下に在つて、江南西道に屬してゐる。この詩は、漢陽縣令の王某といふ人に贈つたのである。

【詩意】天より、白玉の棺を堂前に下したから、葉縣の令にして、兼ねて道術の聞こえ高かりし王喬は、葉縣を辭し、其中に這入つて葬られて仕舞つた。かくて、一たび去つて未だ千年ならず、その王喬が再生したのが、卽ち我が王君で、漢陽の地に於て、復た相見たのである。王君は、なほ飛鳧の舄を穿ち、そして、その顏は、宛然として、仙人の如く、鬢の毛は青く、童顏は照り輝いて、練絹のやうに、綺麗である。われ嘗て海水を弄し、蓬萊の流が三たびも淺くなつたのを見て、麻姑の言、果して詐ならず、月日の立つのは、流電よりも速であるといふことを愈よ適切に感じた。そこで今日、君と共に數杯の酒を酌み、十分愉快に過したい。かくて、白雲を追うて山中に歸るべく、この浮世に於て

ては、如何なれば、貧富互に変戦して居るか、まことに、見るも、うとましい始末である。

【餘論】同姓の故を以て、王漢陽を王喬に擬し、起八句は其人を寫し、次の四句は自家の經驗を敍し、その次に於て、今夕の歡宴に及んだので、章法整然として、一絲紊れず、そして、自然に仙氣を帶びた處は、李白の特色で、他家に於て、一寸見ぬところである。

贈漢陽輔錄事　二首

漢陽輔錄事に贈る　二首

聞君罷官意。我抱漢川湄。
君が官を罷むるの意を聞く、我は抱く漢川の湄。

借問久疎索。何如聽訟時。
借問す、久しく疎索、訟を聽くの時に何如ぞや。

天清江月白。心靜海鷗知。
天は清くして江月白く、心は靜にして海鷗知る。

應念投沙客。空餘弔屈悲。
應に念ふべし、投沙の客、空しく、弔屈の悲を餘すを。

【字解】〔一〕投沙　前に數ば見ゆ。〔二〕弔屈　風俗通に「賈誼、長沙の太傅となる。すでに官に之くや、內、自得せず、湘水を渡るに及び、弔書を投じて曰く、闇茸尊顯、佞諛得志、と。以て屈原が讒邪の咎に離るを哀み、亦た因つて自ら、鄧通等に慰へられしを傷むなり」とある。

【題義】錄事は、唐時刺史の屬官で、司馬の下に參軍事と共に隷屬して居た。參軍事は、上州は從七品、中州は正八品、下州は從八品であるが、錄事は皆從九品である。又每縣にも錄事があつて、丞尉の下に居り、卽ち流外の官である。この詩は、漢陽の錄事輔某に贈つたので、前詩に見えた王漢陽の屬官である。

【詩意】承はれば、君には、官を罷めて歸休したいといはれるさうで、われは、漢川の岸邊に在つて、感慨に堪へぬ。これまで、久しく御無沙汰をしたが、訴訟を聽かれた時、どうであつたか、或は在官中、御氣に召さぬことでもあつたのか。なる程、官を罷めて、一たび去れば、天は清くして江天月白く、心靜にして唯だ海鷗の知るに任かせ、全く此世を超越することが出來る。さはれ、長沙に謫せられた賈誼が、屈原を弔ひ、兼ねて、自己の不遇を傷んだやうに、君とても、到底、一種の悲慨を免れぬことであらう。

鸚鵡洲横漢陽渡。鸚鵡の洲は横はる漢陽の渡。
水引寒煙沒江樹。水は寒煙を引いて江樹を沒す。
南浦登樓不見君。南浦、樓に登れども君を見ず。
君今罷官在何處。君、今、官を罷めて何の處にか在る。

【字解】〔一〕鸚鵡洲　晉祖居類書に「鸚鵡洲は、湖廣漢陽渡の上に在り、祖衡、かつて鸚鵡賦を作り、後、王を此に埋む、故に洲に名づく。漢江に跨ると雖も、しかも、尾は黃鶴磯に連る、故に、

漢口雙魚白錦鱗。
令傳尺素報情人。
其中字數何多少。
祇是相思秋復春。

漢江の雙魚、白錦の鱗。
尺素を傳へて、情人に報せしむ。
その中、字數何ぞ多少。
祇だ是れ相思秋復た春。

漢口　大別山北に在つて、即ち漢水と涢水と合流して江に入る處。胡三省の通鑑註に「漢口は、漢水江に入るの口、その地、鄂州漢陽縣東大別山下に在り」とある。【三】尺素　楊升菴の說に「古樂府、尺素如二瓊雪一、結成雙鯉魚、要レ知心裏事、看二取腹中書一、この詩に據れば、古人は、尺素、結んで鯉魚の形を爲す、即ち緘なり。文選、客從二遠方一來、遺二我雙鯉魚一、下に云ふ、呼レ兒烹二鯉魚一、中有二尺素書一、亦た證況の言、眞に烹るに非ざるなり。五臣及び劉履謂ふ、古人多く、魚腹に於て書を寄すと。陳涉の丹魚倒鯛の事を引いて之を證す、何ぞ癡人の夢を戲くに異ならむや」とある。

【詩意】名だたる鸚鵡の洲は、漢陽の渡口に横はり、江水は寒煙を引き、江樹も暗くぼんやりして居る。その時、南樓に登つて、漢陽を望むも、君を見ず、君は、今官を罷めて、何處に居られるのか。漢水の江に注ぐあたりには、白い鱗の雙魚が居る。その雙魚のやうな形に手紙を封じ、わが許に寄せて、便りをして下さい。その手紙の中の文字の多少は、もとより論ずるところに非ず。唯だ自分は平生相思うて、秋より春、四時絶えず、思ひ惱んで居るのであるから、手紙さへ貰へば、どんなものであらうとも、きつと心の慰となるからである。

圖經、武昌郡に屬すといふ。秋水漲盛の時、隱沒して見えず、水落つるに至つて、乃ち出づ」とある。【三】漢陽渡　「統志に「漢陽府城の東に在り」とある。【四】南浦　武昌府城の南三里に在る。【五】

江夏贈韋南陵冰

江夏韋南陵冰に贈る

胡騎馬驚沙塵起。
胡雛飲馬天津水。
君爲張掖近酒泉。
我竄三巴九千里。
天地再新法令寬。
夜郎遷客帶霜寒。
西憶故人不可見。
東風吹夢到長安。

胡騎り、馬驚いて、沙塵起り、
胡雛、馬を飲ふ、天津の水。
君は、張掖となつて、酒泉に近く、
我は三巴に竄せらる、九千里。
天地再び新にして、法令寬なり、
夜郎の遷客、霜を帶びて寒し。
西、故人を憶ふも、見るべからず、
東風、夢を吹いて、長安に到る。

【餘論】前首は平淺で、格別の奇もないが、後聯、天清の十字のみは、明瑩である。後首に就いては、乾隆御批に「煙江の風景、登樓見るところ、即ち此れ發端、人を懷ふの意を接出し、最も氣格あり」といふ通り、前半は敍景雄濶、後半は敍情纏綿、一景一情、相配して、自然の好結構を成して居る。

【字解】【一】胡騎　漢書に「孝惠高后の時、冒頓、寇く騎る」とある。騎とは、矜傲の意。【二】胡雛　晉書に「石勒、年十四、邑人に隨つて洛陽に行販し、倚つて上東門に觀く。王衍見て之を異み、顧みて、左右に謂つて曰く、さきの胡雛、晉、その聲を竊て、奇志あるを觀る、蓋らくは、將に天下の患を爲さむとすと。馳せ遣して、之を收めしむ。會ま勒、すでに去る」とある。【三】天津水　洛陽に在る天津橋下の水。【四】張掖　唐時の張掖郡は甘州、酒泉郡は肅州、ともに隴右道に屬し

寧期此地忽相遇。
驚喜茫如墮烟霧。
玉簫金管喧四筵。
苦心不得申長句。
昨日繡衣傾綠樽。
病如桃李竟何言。
昔騎天子大宛馬。
今乘欺段諸侯門。
賴遇南平豁方寸。
復兼夫子持清論。
有似山開萬里雲。
四望青天解人悶。
人悶還心悶。

寧ろ期せむや、この地、忽ち相遇ふを。
驚喜、茫として烟霧に墮つるが如し。
玉簫金管、四筵喧しく、
苦心、長句を申ぶるを得ず。
昨日、繡衣、綠樽を傾け、
病んで桃李の如く、竟に何をか言はむ。
むかしは、騎す、天子大宛の馬、
今は欺段に乘ず、諸侯の門。
賴に南平に遇うて、方寸豁たり、
復た夫子と清論を持す。
山、萬里の雲を開くに似たるあり、
四に青天を望んで、人悶を解く。
人悶え、還た心悶ゆ。

て居た。通典に「漢被郡は、西、瀘泉郡に至る四百二十里」とある。爲に「漢被」とは、其地の太守となりしこと。【七】 三巴九千里　李白は夜郎に流されたが、やつと、三巴まで往つた時、赦に遇うて歸つたから、かう云つたのである。【八】 遷客　流人に同じ。【九】 繡衣　漢書百官公卿表に「侍御史に繡衣直指あり、出でて奸猾を討め、大獄を治む」とあり、顏師古の註に「衣するに繡を以てするは、之を尊寵するなり」とある。【八】 病如桃李竟何言　漢書「桃李言はず、下、自ら蹊を成す」より出づ。【九】 大宛馬　大宛は、今の中央亞細亞の一國で、古しへより、名馬を產する。史記に「大宛に善馬多し、馬汗血、言ふは、その先天馬の子なり」とある。【一〇】 欺段　後漢書に「大澤の車に乘じ、欺段の馬に御す」とあつて、章懷太子の註に「欺は、猶ほ綺のごときなり、謂ふは、形段迴綺なるなり」とある。【一一】 南平　南平太守李之遙を指す、次に見えて居る。【一二】 山開萬里雲　四望青天　衞瓘が樂廣を美ぜし語を用ふ。すでに、前に見ゆ。【一三】 寒灰重暖　死灰再び燃ゆといふこと、韓安國の語を用ふ、亦た前に見ゆ。【一四】 山公　前に見ゆ。【一五】 頭陀　寺の名、楊齊賢は、「頭陀寺は、鄂州に在り、宋の大明五年建つ。天竺に頭陀といひ、此に抖擻といふ、煩惱を抖擻するなり」といひ、元和郡縣志に「頭陀寺は、鄂州江夏縣東南二里に在り」とあり、陸放翁の入蜀記に「頭陀寺は、鄂州城の東隅石城山に在り」とあり、方輿勝覽に「頭陀寺は、黃鶴山上に在り、南齊の王

苦辛長苦辛。
愁來飲酒二千石。
寒灰重暖生陽春。
山公醉後能騎馬。
別是風流賢主人。
頭陀雲月多僧氣。
山水何曾稱人意。
不然鳴笳按鼓戲
滄流。
呼取江南女兒歌
權謳。
我且爲君槌碎黃
鶴樓。

苦辛、長しへに苦辛。
愁來つて、酒を飲む二千石。
寒灰重ねて暖かにして、陽春を生ず。
山公、醉後、能く馬に騎す。
別に是れ風流の賢主人。
頭陀の雲月、僧氣多し。
山水何ぞ曾て人意に稱はむ。
然らずんば、笳を鳴らし、鼓を按じて、
滄流に戲れ、
江南の女兒を呼取して、權謳を歌ふ。
我且つ君が爲に黃鶴樓を槌碎せむ。

贈　江夏韋南陵冰

君亦爲吾倒却鸚　君亦た吾が爲に鸚鵡洲を倒却せよ。
鵡洲。

赤壁爭雄如夢裏。　赤壁、雄を爭ふ、夢裏の如し。
且須歌舞寬離憂。　且つ須らく歌舞して離憂を寬にすべし。

猶ほ擊のごときなり」とある。【一八】 櫂謳　蜀都賦に吹二洞簫一發二棹謳一といひ、劉淵林の註に「棹謳とは、棹を鼓して歌ふなり」とある。【一九】 黃鶴樓、鸚鵡洲　ともに前に見ゆ。【二〇】 赤壁爭雄　華陽國志に「孫權、周瑜・程普を遣し、水軍三萬、先主を助けて曹公を拒がしめ、大に公の軍を赤壁に破つて、その舟船を焚く、曹公、引いて歸る」とあり、楊齊賢は「赤壁磯は、百人山と對峙す、今の鄂州の上流八十里に在り」といつて居る。

【題義】 南陵は縣名、宣城郡の下に在つて、江南西道に隸屬して居た。この詩は、李白が、江夏、卽ち鄂州に滯留して居た時に、南陵縣令の韋氷に贈つたのである。

【詩意】 胡兵は、勢に驕り、その馬は、驚いて馳するが如く、滿目の沙塵、地を捲いて起り、北邊一帶は、すべて胡虜の有となり、胡の若武者は、洛陽に乘り込んで、馬を天津橋下に飲ふといふ樣な騷ぎ。この時、君は張掖の太守となつて、その地、酒泉に近く、われも亦た、都を距ること九千里の三巴の地に放竄せられ、幸にも、この爭亂を目睹せぬものの、話だけ聞いて居るから、愈よ以て家國興亡の歎を爲さずには居られなかつた。しかし、天子新に卽位し、乾坤再び新にして、法令も自然寬かになつたが、われは、元と夜郎に謫せられたので、折からの寒さに遇つて、霜氣身にしむに閉口し、西、長安に居る故人どもを思へども、相見る便もなく、やがて東風に夢を吹かれて、魂が其地に赴くだけである。しかも、料らざりき、一たび旋つて、この江夏に於て、君に邂逅せむとは。かくて、且つ驚き、且つ喜び、心落ち付かず、さながら、煙霧の中に墮ちたやうである。そこで、酒宴を催し、玉簫金管の聲、四筵に喧しく、大分面白さうではあるが、いかに苦心しても、この胸中の感懷を長句に盡して、君に示すことが出來ず、つまり、感餘あつて、言葉が之に副はないのである。願みれば、君は、先ごろまで、繡衣使者として、權勢も盛で、得意に綠樽の酒を傾けたが、今は、病みほうけて、桃李の物言はぬが如くである。われも亦た昔は、天子御乘用の大宛に產する名馬を借り出して乘り廻り、隨分、愉快であつたが、今日は、欵段のやくざ馬に乘じて諸侯の門を敲き、その引立を願ふといふ始末。しかし、幸にも、南平太守の李之遙に遭ひ、どうやら、胸も稍や透いた上に、又淸論を以て世に聞こえたる貴下に逢ひ、たとへば、萬里の雲を開いて、高山が兀然と顯はれ、四に靑天を望んで、煩悶の心を解くと同じである。何は兎もあれ、悶えるといへば、心が悶えるのであるし、苦辛は、いつまでも直らず、まことに遣る瀨もない次第。かくて、暗愁を拂ふ爲に、酒を飲むこと二千石の多きに及べば、冷えた灰が再び暖まつて、陽春の氣を生ずると同じく、はじめて、生きかへつた樣な氣がした。しかし、山簡は、醉後、馬に跨つて逍遙し、隨分狂態を盡したが、それは別に

巾、碑を作つてより、遂に古今の名刹となる」とある。【二一】 鳴笳　謝靈運の詩に鳴笳發二春渚一といひ、李周翰の註に「笳は笛なり」とある。【二二】 按鼓　楚辭に鼓二鼙鐘一按鼓造二新歌一些といひ、劉良の註に「按は、

風流の賢主人があつたからのことで、さもなくば、如何に山公と雖も、かくまで十分に放縱になることは出來ない。この近傍には、頭陀寺といふ名所があつて、雲月の眺、世に聞こえたれども、何分坊主臭くて、おもふ存分、愉快を盡すことも出來ず、從つて、山水も到底わが意に協はない。そこで、止むなくんば、簫を吹き、鼓を擊つて、滄浪の流に戯れ、江南の女兒を呼んで來て、舟歌を唱へしめ、そして、したたかに酒を飲み、酔つての揚句に、われは君の爲に、かの黄鶴樓を槌で擊ち碎くべく、君も亦た我が爲に、かの鸚鵡洲を脚で踏み倒して呉れろ。つまり、古來の陳跡を、その歴史と併せて一掃し去り、興亡の感を脱して、はじめて心が落ち付いて、のんきに成らうといふのである。されば、魏呉の二軍が、乾坤を賭し、赤壁に於て雄を爭つたといふのも、夢中の戯と同じで、格別、取り立てて言ふにも及ばず、しばらく歌舞して、離別の憂を寛にしたが善からう。

【餘論】この詩は、稍や散漫の傾向はあるが、縱横に揮霍したので、當時の逸興が、しのばれる。それから、黄鶴樓、鸚鵡洲の二句は、古來から疑案となつて、色色の説もあるが、それは、いづれ、後章に於て詳述することにする。

贈盧司戸

盧司戸に贈る

秋色無遠近。出門盡寒山。

秋色、遠近なく、門を出づれば盡く寒山。

白雲遙相識。待我蒼梧間。

白雲、遙に相識り、我を待つ蒼梧の間。

借問盧虨鶴。西飛幾歲還。

借問す盧虨の鶴、西飛、幾歲か還る。

【字解】【一】蒼梧　前に數ば見ゆ。【二】盧虨鶴　水經註に「鄧德明の南康記に曰く、むかし、盧虨あり、州に仕へて治中となる。少にして、仙術を習ひ、善く羣飛を解す。毎夕、輒ち盧を浚いで家に歸り、曉には州に還る。かつて、元會に於て、朝に至りしが、朝列に及ばず、化して白鶴となつて、閤前に至り、回翔して下らむと欲す。威儀、石を以て之を擲つ、一隻の履を得たり。就驚き、還つて列に就く、内外左右、駭異せざるなし」とある。

【題義】この詩は、盧司戸に寄せたのである。司戸は官名。そして、この人は、どういふ人か分らぬが、西飛の一句を以て見れば、この頃、長安に居たものと思はれる。

【詩意】秋色に遠近なく、門を出づれば、眺めやる限り、寒山である。そして、白雲は、遙に相識れるが如く、心ありげに、われを蒼梧の間に待つて居る。そこで、愈よ其地に行きたいのであるが、あやにく、同伴者がなく、かの白鶴に化せし盧虨の後身と思はるる我が司戸は、一たび西に飛んで、長安に赴きしまま、いつ還るとも分らず、愈よ以て相思の情に堪へない。

【餘論】乾隆御批には「高調、省淨に妙なり」とある。この詩の妙處は、發端に在るので、嚴滄浪は「起二句清絶、安んぞ此の如きの畫手を得む」といひ、そして「只だ前四句を存し無題とする、更に佳」といつて居る。

贈從弟南平太守之遙　二首

少年不得意。
落魄(一)無安居。
願隨任公子(二)。
欲釣呑舟魚。
常時飲酒逐風景。
壯心遂與功名疎。
蘭生谷底人不鋤。
雲在高山空卷舒。
漢家天子馳駟馬。
赤車蜀道迎相(三)如。
天門九重謁聖人。
龍顏一解四海春。
彤(四)庭左右呼萬歲。
拜賀明主收沈淪。
翰(五)林秉筆回英(七)眄。
麟(八)閣崢嶸誰可見。
承恩初入銀臺(九)門。
著書獨在金鑾(一〇)殿。
龍駒(一一)雕鐙白玉鞍。
象牀綺(一二)席黃金盤。
當時笑我微賤者。
却來請謁爲交歡。
一朝謝病遊江海。
疇昔相知幾人在。
前門長揖後門關。

從弟南平太守之遙に贈る　二首

少年、意を得ず、
落魄、安居なし。
願はくは、任公子に隨ひ、
呑舟の魚を釣らむと欲す。
常時、酒を飲んで、風景を逐ひ、
壯心遂に功名と疎なり。
蘭は谷底に生じて、人、鋤かず、
雲は高山に在つて、空しく卷舒す。
漢家の天子、駟馬を馳せ、
赤車、蜀道、相如を迎ふ。
天門、九重、聖人に謁す、
龍顏一たび解くれば、四海の春。
彤庭、左右、萬歲を呼ぶ、
拜賀す、明主の沈淪を收むるを。
翰林、筆を秉つて、英眄を回し、
麟閣崢嶸、誰か見るべき。
承恩、はじめて入る銀臺の門、
著書、ひとり金鑾殿に在り。
龍駒、雕鐙、白玉の鞍、
象牀、綺席、黃金の盤。
當時、我が微賤なる者を笑ふ、
却つて、來つて謁を請うて交歡を爲す。
一朝、病を謝して、江海に遊ぶ、
疇昔、相知、幾人か在る。
前門には長揖して、後門は關づ、

【字解】【一】落魄　落ちぶれる。史記に「酈生、家貧、落魄以て衣食の業を爲すなし」とある。【二】任公子　莊子に「任公子、竿を東海に投じて、大魚を釣り得たり」とある。【三】相如　司馬相如、赤車駟馬の事、前に見ゆ。【四】天門九重　郊玄の禮記註に「天子は九門、路門なり、應門なり、雉門なり、庫門なり、皐門なり、城門なり、近郊門なり、遠郊門なり、關門なり」とある。【五】彤庭　前に見ゆ。【六】翰林　夢溪筆談に「唐の翰林院は禁中に在り、乃ち人主燕居の所、玉堂、承明、金鑾殿、皆その間に在り、供奉に應ずるの人、學士より以下、工伎、章官、司議、その間に雜し、皆翰林と稱す。今の翰林學官、翰林待詔の類の如き、是れなり」とある。【七】英眄　謝朓の詩に「俯仰流二英眄一」とあるに本づく。【八】麟閣　初學記に「漢の西京、未央宮中に麟閣あり。亦た祕書を藏す、卽ち揚雄校書の處なり」とある。【九】銀臺門　石林燕語に「唐の翰林院は、銀臺門の北に在り」とある。【一〇】金鑾殿　玉海に「兩京記、大明宮、紫宸殿、北を蓬萊殿といひ、その西を還周殿といひ、還周の西北を金鑾殿といひ、殿旁の坡を金鑾坡といふ」とあり、又「金鑾殿は蓬萊正西微南に在り」とある。【一一】龍駒　名馬。【一二】綺席、疇昔　前に見ゆ。【一三】夢得池塘生春草　南史に「謝惠連、年十歲、能く文を屬す、族兄靈運、これを嘉賞して云ふ、篇章ある每に、惠連に對すれば、輒ち佳語を得、と。かつて、永嘉の西堂に於て詩を思ふ、

今日結交明日改。　今日交を結んで、明日は改まる。
愛君山岳心不移。　愛す、君が山岳心移らず、
隨君雲霧迷所爲。　君に隨つて、雲霧、爲すところに迷ふ。
夢得池塘生春草。(一三)　夢に得たり、池塘、春草を生ずるを、
使我長價登樓詩。(一四)　我をして、長く登樓の詩を價せしむ。
別後遙傳臨海作。(一五)　別後遙に傳ふ臨海の作、
可見羊何共和之。(一六)　見るべし、羊何の共に之に和するを。

【一三】羊何　泰山の羊瑒之、東海の何長瑜をいふ。靈運・惠連と文章を以て賞會し、ともに山澤の遊を爲した。

【題義】南平は郡名、卽ち渝州、先に巴郡といつたが、天寶元年、名を更めたので、劍南に屬して居る。この詩は、李白が夜郎放流の歸途、渝州に於て、その從弟たる南平太守李之遙に贈つたのである。

【詩意】われは、少年の時、志を得ず、落ちぶれて安居することも出來なかつたから、任公子に從ひ、東海へ往つて、呑舟の巨魚を釣り、この浮世と全く絶緣したいと思つて居た位。その頃は、平生酒を縱にして、風景を探り歩いて居たから、壯心は依然たれども、功名富貴とは、自然疎濶であつ

寳日成らず、忽ち夢に惠連を見、卽ち池塘生春草を得、大に以て工と爲す。かつて曰く、この語、神助あり、吾が語に非ざるなり」とあり、夫に王琦の說に「按ずるに、池塘生春草の句は、乃ち靈運池上の樓に登るの詩、故に長價登樓詩といふ、靈運、又登臨海嶠初發强中作あり、從弟惠連と與にすと、見るべし、羊何ともに之に和せしを」といつて居る。

【一四】臨海　晉時の郡名、今の臺州。

た。われに才能あるも、人に知られず、たとへば、蘭が空谷の底に生じ、その儘、そこに開落して、人に移し植ゑられざるが如く、又雲が高山に在つて、人知れず空しく卷舒するやうなものであつた。然るに、漢家の天子に比すべき今の皇帝は、辱くも駟馬を馳せ、わざわざ赤車を蜀道に遣して、當年の司馬相如に比すべき、われ李白を迎へられた。そこで、われは、長安に至り、九重の宮門の奥に於て天子に拜謁すると、天子は、御顏に笑を含ませられ、四海皆春の景色を催したから、赤漆で塗つた殿前の地に居並ぶ左右の羣臣は、一齊に萬歲を唱へ、聖明の人主が、沈淪せる英才を收用されたのを拜賀した。われは、それより、翰林院に在つて、筆を執り、得意に願眄しつつ、誰も知らぬ麟閣の峰嶾たる間をも、自由に通行することを許され、又天恩を承けて、銀臺門に入り、ひとり金鑾殿に居て、著書に從事して居た。この頃は、さすがに、自分も得意であつて、雕刻せる鐙や、白玉で造つた立派な鞍を名馬に置いて、長安の市中を遊行し、そして、象牙の牀や、ねり絹で飾つた座席や、黃金の杯盤などの狼藉たる間に於て、酒を縱にして、醉歌して居たので、はじめ、我が微賤を笑つて輕蔑して居た手合までが、わざわざ遣つて來て、面會を乞ひ、日夜交歡を爲した。しかし、榮枯盛衰は、免れぬもので、一朝病を謝して、江海に遊べば、前日の知己は、幾人もない位、前門に於て長揖して慇懃に禮を爲せしものも、後門を閉ぢて入れず、今日交を結んでも、明日は忽ち改まつて、見むきもしない位。浮世の狀態は、大抵こんなものである。しかし、君の心は、山嶽の如く重くして移らず、

まことに、感心なことであるが、刻下配流の途中に在つて、折角君に逢つても、雲霧立ち迷ふ中に於て、どうしたら善いかと、爲すところに迷ふ位。君の我に於けるは、從兄弟の間柄で、丁度靈運と惠連との如く、むかし、靈運は、夢に惠連を見て、池塘生二春草一の一句を得、登樓の詩として其價を增したといふが、われも亦た其通、されば、惠連が臨海の作を爲し、羊璿之、何長瑜の輩が之に和したやうに、われと別れし後、汝も亦た一首の新詩を作り、知友どもの之に和したのを併せて、遙に我が處に寄せて貰ひたい。

【餘論】この詩は、渝州で作つたのであるから、夜郎放逐の歸途であらうと思はれる。前半に於ては、自己の閲歴を述べて居るが、今次配流の事などは、緣起でもないから、詳細に敍せず、一朝謝レ病の二句の中に、極めて手輕に、さつさと片づけて仕舞つた。それから李之遙との交情に移り、結二句、更に別後の事に及んだのである。乾隆御批に「炎にして附き、寒にして去る、自ら是れ俗情の薄、翟公、門に書し、殷浩、詩を詠ず、白、何ぞ見るの晩きや。蘭生二谷底一の二句、邈韻賞すべく、復た深味あり、末二句、古を用ひて化に入り、別に清新の致を具ふ」とある。

東平與南平。今古兩步兵。　東平と南平と、今古兩步兵。

素心愛美酒。不是顧專城。　素心、美酒を愛し、是れ專城を顧るならず。

謫官桃源去。尋花幾處行。　謫官、桃源に去り、花を尋ねて幾處にか行く。

秦人如舊識。出戶笑相迎。　秦人、舊識の如く、戶を出でて笑つて相迎ふ。

【字解】【一】東平　阮籍をいふ。文選註に引ける魏樂緒の晉書に「阮籍、東平の相に拜せらる、政事を以て務と爲さず、沈醉日に多し」とある。【二】南平　卽ち太守李之遙を指す。【三】步兵　晉書に「阮籍、步兵の厨人、善く釀し、貯酒三百斛あるを聞き、乃ち求めて步兵校尉となる」とある。【四】素心　本心に同じ。【五】專城　縣令、專ら一城の政事を主とするを得るが故に云ふ。陌上桑の詩に三十侍二中郎一、二四十專二城居一とある。【六】桃源　前に見ゆ。

【題義】李白の自註に「南平、時に飲酒過度に因つて、武陵に貶せらる」とあつて、この一首は、專ら其事に就いて述べたのである。

【詩意】君と古しへの阮籍とを竝稱して、今古の兩步兵と爲すべく、性來、酒が好きであつて、縣令の職などは、少しも顧みず、終日醉ひ潰れて居た。そこで、今次流謫されて、古しへの桃源の地へ往くといふが、桃源は、名だたる桃の名所、花を尋ねて、幾處に行くことか、その地に住む秦人は、さながら、舊知の如く、戶を出でて、笑つて君を迎ふべく、決して、寂寞の想を爲さぬであらう。

【餘論】この詩は、李之遙が酒好である處から、阮籍を以て之に比し、そして、後半には、桃源を點出し、自然穩秀の趣がある。

贈潘侍御論錢少陽

潘侍御に贈り、錢少陽を論ず

繡衣柱史何昂藏。繡衣の柱史、何ぞ昂藏、
鐵冠白筆横秋霜。鐵冠白筆、秋霜を横ふ。
三軍論事多引納。三軍、事を論じて、引納多し、
堦前虎士羅干將。堦前の虎士、干將を羅ぬ。
雖無二十五老者。二十五老者なしと雖も、
且有一翁錢少陽。且つ一翁錢少陽あり。
眉如松雪齊四皓。眉は松雪の如く、四皓に齊しく、
調笑可以安儲皇。調笑、以て儲皇を安んずべし。
君能禮此最下士。君、能く此を禮して、最も士に下らば、
九州拭目瞻清光。九州、目を拭うて、清光を瞻む。

【字解】【一】繡衣　漢書に「王賀、武帝の繡衣御史となり、魏郡の軍盜、堅虛等の黨與を逐捕す」とあり、漢書に「漢の武帝の時、侍御史、又繡衣直指者あり、出でて奸猾を討ち、大獄を理む、しかも、常には置かず」とある。【二】柱史　初學記に「漢官儀に曰く、侍御史は周官なり、柱下史たり、法冠を冠る、一名柱後、鐵を以て柱と爲す、その審固撓まざるを言ふなり」とある。【三】昂藏　昂然たる氣概を藏す。【四】白筆　魏略に「帝、かつて大に殿中に會す。御史、白筆を執し、階に側つて立つ。上、左右に問ふ、これ何の官となし、何かを主ると。左右對へず。辛毗曰く、これを御史となす、舊時筆を執し、以て不法を奏す、今は直に官に備へ、但だ筆を執るのみ」とある。【五】虎士　侍衛の武士。【六】干將　古しへの劍士の名、ここでは、轉じて劍をいふ。吳越春秋に「吳の闔閭、干將に請うて、名劍二枚を作る。干將の妻、髮を斷ち、爪を剪つて、爐に投じ、遂に以て劍を成す。陽を干將といひ、陰を莫耶といふ。陽は龜文を作し、陰は漫理を作す」とあり、又子虛賦に「建三干將之雄鋒」とあつて、張揖の註に「干將は、韓王の劍師、堆截胡矛、鉅あるものは、干將の造るところ」とあるから、劍をも干將といふのである。【七】二十五老者　說苑に「公子推、行年十五にして、劍に相たり。仲尼、これを聞き、人をして往いて觀ぜしむ。還つて曰く、廊下に二十五俊士あり、堂上に二十五老人あり。仲尼曰く、二十五人の智を并せば、湯武よりも智。二十五人の力を并せば、彭祖よりも力あり。以て天下を治む、其れ固く免れむか」とある。【八】四皓　前に見ゆ。【九】調笑　調は諧戲。【一〇】安儲皇　四皓が太子を保護し、その位を失はしめざりしこと、前に見ゆ。

【題義】この詩は、潘侍御に贈り、錢少陽の人物を論じ、これを賞揚して、推薦したのである。錢少陽に就いては、後にも贈錢徵君少陽の一首があるが、その閲歷等は、少しも分らない。但し徵君といふ以上は、進士に及第した老才子であつたと見える。

【詩意】君は、今、繡衣侍史の職に居り、卽ち周代の柱史に相當し、おまけに、その氣象昂然として、決して撓まず、鐵冠を戴き、白筆を執し、遠慮なく不法の者を罰するといふので、その凜凜しきことは、さながら、秋霜の如くである。かくて、軍中に於て事を論ずる場合にも、いつも、君の言葉が引合に出される位で、階前の武士は、戟を列ねて、君を護衛し、まことに、素張らしい勢である。今、君の門下には、むかし楚國の宰相の處に居たといふ樣な二十五人の老人が堂上に居ないが、唯だ一人錢少陽といふ老翁が居る。錢翁の眉は白くして、松にかかれる雪の如く、古しへの四皓を目の前に見

るやうな感じがする。それのみか、錢翁の才識名望は、戯笑の間に、かの四皓が爲せし如く、太子の位を安んぜしむることが出來る。錢翁は、天晴の人物であるから、君にして、能く之に禮し、天下の士に下るならば、愈よ以て、その職務を全うするを得べく、九州全土、目を拭うて、曇りなき君の清光を仰ぐことであらう。

【餘論】この詩は、取りも直さず、錢少陽の人物を論じ、侍御史の幕賓とするのに至極適當であるといつて推薦したので、これを四皓に比したのは、聊か過ぎて居るかも知れぬが、この位に言はねば、利き目が無いかも知れぬので、もとより、所好に佞したものでは無からう。

贈柳圓

竹實滿秋浦。鳳來何苦饑。
還同月下鵲。三繞未安枝。
夫子卽瓊樹。傾柯拂羽儀。
懷君戀明德。歸去日相思。

柳圓に贈る

竹實、秋浦に滿つ、鳳來るも、何ぞ饑に苦まむ。
還た同じ月下の鵲、三繞未だ枝に安んせず。
夫子、卽ち瓊樹、傾柯、羽儀を拂ふ。
君を懷うて明德を戀ふ、歸り去つて日に相思ふ。

【字解】【一】鳳　陸機の詩疏に「鳳凰、一名鵷、梧桐に非されば棲まず、竹實に非されば食はず、醴泉に非されば飲まず」とある。【二】月下鵲　魏の武帝の短歌行に、月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、何枝可依とある。【三】傾柯　幹を傾ける。【四】拂羽儀　鳥等止まつて羽ばたきをする。【五】瓊樹　卽ち瓊枝、琪琳琅玕を以て實となし、それが鳳凰の食となるのである。

【題義】柳圓は、如何なる人か分らぬが、李白は、これに詩を贈つて、汲引の惠を謝したので、起句を見れば、その人は、秋浦に居たのであらう。

【詩意】竹の實は、秋浦に滿ちて居るから、鳳凰は此處に飛んで來ても、饑に苦むことはない。しかし、鳳凰は、かの烏鵲が月下に樹を三匝して、その枝に安んぜざるが如くである。われも、曩には、この鳳凰の通りで、甚だ弱り切つて居たが、君は、瓊枝に比すべき其幹を傾けて、鳳凰の來宿を待つて居たから、われも君の處に往つて、隨分御世話に成つた。かくて、君を懷うて、その明德に感佩し、この地に歸り來りし後も、日日相思の情に堪へぬ次第である。

【餘論】ほんの一片の挨拶に過ぎぬが、鳳凰を以て自ら比し、且つ月下の鵲を以て陪客となし、その互に照映する處に自然の趣があるので、結二句に於て、はじめて本意を逗出したのである。

流夜郎半道承恩放還。兼欣尅復之美。書懷示息秀才

夜郎に流され、半道にして恩を承けて放還せらる、兼ねて尅復の美を欣び、

懷を書して息秀才に示す

黄口爲人羅。白龍乃魚服。
得罪豈怨天。以愚陷網目。
鯨鯢未剪滅。豺狼屢翻覆。
悲作楚地囚。何日秦庭哭。
遭逢二明主。前後兩遷逐。
去國愁夜郎。投身竄荒谷。
半道雪屯蒙。曠如鳥出籠。
遙欣尅復美。光武安可同。
天子巡劍閣。儲皇守扶風。
揚袂正北辰。開襟攬羣雄。
胡兵出月窟。雷破關之東。
左掃因右拂。旋收洛陽宮。

黄口は人に羅せられ、白龍乃ち魚服す。
罪を得るも、豈に天を怨まむや、愚を以て、網目に陷る。
鯨鯢、未だ剪滅せず、豺狼、屢ば翻覆。
楚地の囚となるを悲む、何の日か、秦庭に哭せむ。
二明主に遭逢し、前後兩遷逐。
國を去つて、夜郎を愁へ、身を投じて、荒谷に竄せらる。
半道にして屯蒙を雪ぎ、曠として鳥の籠を出づるが如し。
遙に尅復の美を欣び、光武安んぞ同じうすべけむや。
天子、劍閣を巡り、儲皇、扶風を守る。
袂を揚げて北辰を正し、襟を開いて羣雄を攬す。
胡兵、月窟を出で、雷破す關の東。
左掃因つて右拂、旋つて收む洛陽宮。

廻輿入咸京。席卷六合通。
叱咤開帝業。手成天地功。
大駕還長安。兩日忽再中。
一朝讓寶位。劍璽傳無窮。
媿無秋毫力。誰念嬰鏁翁。
弋者何所慕。高飛仰冥鴻。
棄劍學丹砂。臨爐雙玉童。
寄言息夫子。歲晚陟方蓬。

輿を廻して咸京に入り、席卷して六合通ず。
叱咤、帝業を開き、手づから天地の功を成す。
大駕、長安に還り、兩日、忽ち再び中す。
一朝、寶位を讓り、劍璽、無窮に傳ふ。
媿づ秋毫の力なきを、誰か念はむ嬰鏁の翁。
弋者、何の慕ふところぞ、高飛、冥鴻を仰ぐ。
劍を棄てて丹砂を學び、爐に臨む雙玉童。
言を寄す息夫子、歲晚、方蓬に陟らむ。

【字解】【一】黄口爲人羅　家語に「孔子、雀を羅するものを見る、皆黄口の小雀。これに問うて曰く、大雀、獨り得ざるは何ぞや。羅者曰く、大雀善く鳴いて得難し、黄口は食を貪つて得易し」とある。黄口は、雀の初めて孵化して、その吻なほ黄色を帶ぶるものである。【二】白龍乃魚服　東京賦に「白龍魚服、見困豫且」とあつて、この詳は前に見ゆ。【三】網目　網孔、網の目。【四】鯨鯢　曹間の六代論に「掃除兇逆、剪滅鯨鯢」とあつて、李周翰の註に「鯨鯢は大魚、小魚を呑食するもの、以て不義の人に喩ふるなり」とある。【五】秦庭哭　吳越春秋に「申包胥、乃ち秦に之き、楚を救ふを求む。豈聽せず、夜趨り、足の趼破勞裂し、裳裹膝鵠、秦庭に倚哭する七日七夜、口に聲を絕たず」とある。【六】二明主　玄宗と肅宗。【七】兩遷逐　李白、前に明皇に事へ、讒を被つて遠に遷ひ、後、肅宗に値ひ、坐累して遠流されしをいふ。【八】屯蒙　屯蒙は蒙昧の義。【九】鳥出籠　楞嚴經に、道離三有、如二

鳥出と龍とあるに本づく。【一〇】 劍閣　蜀に入るの險道、前に見ゆ。【一一】 儲皇　肅宗をいふ。至德元載七月、扶風を改めて鳳翔郡となし、二載二月、肅宗、鳳翔に幸し、十月に至つて、兩京克復し、はじめて鳳翔より長安に還る、兵を扶風に駐むるもの凡そ十月に亙つた。【一二】 正北辰　初學記に「荊州星占に曰く、北辰、一名は天關、一名は北極、北極は紫宮太乙の座なり、此を以て天子の位に喩ふ」とある。【一三】 胡兵出月窟　以下數句は、郭子儀が長安を克復し、上皇が還御に成つたことを指すのであるが、その事實は、長いから、ここに省略して置く。【一四】 大駕　天子の乘り物。【一五】 兩日忽再中　玄宗と肅宗、長安に歸りしことをいふ。【一六】 劍璽　西京雜記に「漢帝、相傳ふるに、秦王子嬰奉するところの白玉璽、高帝白蛇を斬りし劍を以てす」とある。【一七】 墨縗　老いて益〻壯健なること、勇ましき貌、後漢書に「武威將軍劉尙、五溪の蠻夷を擊つて、深く入り、軍沒す。馬援、因つて復た行かむことを請ふ。時に年六十二。帝、その老を愍んで、未だ之を許さず。援、自ら請うて曰く、臣尙ほ能く甲を披き、馬に上る、と。帝これを試みしむ、援、鞍に據つて顧眄し、以て用ふべきを示す。帝笑つて曰く、矍鑠たるかな是翁や」とある。【一八】 弋者何所墓　逸民傳に「揚雄曰く、鴻冥冥に飛ぶ、弋者何ぞ墓せむ、と。その患に遠ふの遠きを言ふなり。章懷太子註、墓の字、諸本、或は墓に作る、法言に墓に作る。宋衷曰く、墓は取なり、鴻高く冥冥に飛んで、天に薄る。弋人ありと雖も、何の巧を施して取るところぞ。賢者隱處、暴亂の害に罹らざるに喩ふるなり」とある。【一九】 方蓬　方丈・蓬萊、海中の二神山。

【題義】 この詩は、夜郎に流される途中、天恩を承けて、特に放ち還されることに成り、同時に、長安洛陽の兩都が尅復されたから、一身の喜に兼ぬるに國家の慶を以てし、因つて、懷を書して、息秀才に贈つたのである。但し、息秀才は、如何なる人か分らない。

【詩意】 吻の黃色い雛雀は、毎に人の爲に網せられ、白龍も魚服すれば、豫且の爲に困めらるといふが、罪を得、殃に罹るのは、すべて自業自得で、格別、天を怨むに當らないし、つまり、自分が愚である爲に、網の目に懸つたのである。今しも、鯨鯢に比すべき賊首は、未だ滅されず、豺狼に比すべき逆徒等は、勝敗を觀望して、反復常ならざる有樣である。然るに、おのれは誤つて罪を得て、楚地の囚人となり、かの申包胥が救を乞ふ爲に、七日七夜、秦庭に哭したやうな眞似をすることも出來ない。おもへば、われは、二代の聖明の君に遭遇しながら、前後二回、放逐せられ、遂に本土を去つて夜郎に謫せられ、この身を投じて、荒谷の底に流竄せらるることと成つた。幸なるかな、中途にして、艱難蒙晦の厄を雪いで、罪を赦されることになり、心はのびのびとして、鳥が籠から出た樣な氣がした。おまけに、兩京克復の報を得て、喜、自ら堪へず、今帝の英武なる、後漢の光武などと一所にすることは出來ない。さきに、天子、都を出でて蜀地に幸せむとし、劍閣の險に差しかかり、太子は、ひとり別れて扶風を守り、袞龍の御衣の袂を揚げて、天子の位を正し、襟を開いて、羣雄の心を總攬し、討賊の準備がそろそろ出來た。かくて、胡兵は、月窟にも比すべきその根據地から出て來たが、官軍は、風雷の如き凄じき勢を以て、これを函谷關東に敗り、左右に掃拂して、やがて、洛陽の宮殿をも回復した。そこで、新帝は、龔を回して長安に入り、さながら席を捲くが如く、賊徒を平らげて、六合の間、はじめて、道が通ずるやうになり、叱咤して、帝業を開き、手づから、乾坤を整頓する大功を成し遂げられた。上皇の御車も、相繼いで長安に還り、二聖相並んで、天下に君臨すること、さながら兩日の正に中するが如く、上皇より、公然寶位を讓られ、傳國の表證たる劍璽を子

子孫孫の末にまで傳ふることに成つて、まことに、目出たきことの限りである。唯だ愧づらくは、この中興の功績に對して、われは、兎の毛ほども、貢獻したことなく、老いて愈よ壯なれども、全く棄却して、誰も相手にして呉れない。これより、われは、鴻の冥冥に飛び、弋者からも其巧を施すところなく、隱處して、暴亂に罹らぬといふことを理想とし、劍を棄てて、丹砂を鍊る術を學び、兩個の仙童を相手にし、爐に臨んで、清修を事としたいと思ふ。わが息夫子も、定めて同感であつて、やがて歳を過ぎし後は、方丈蓬萊などいふ海中の仙山を尋ねられることであらうが、その時は、無論、お伴をしたいと思つて居る。

【餘論】起四句は、懺悔の聲であつて、その簡警にして格言めいた處が面白い。それから、自己の厚赦、兩京の克復に及び、最後におのが希望を述べ、併せて息秀才に寄語したので、結構は、極めて緊健である。

贈張相鎬 二首

神器難竊弄。天狼窺紫宸。
六龍遷白日。四海暗胡塵。

張相鎬に贈る 二首

神器、竊弄し難く、天狼、紫宸を窺ふ。
六龍、白日を遷し、四海、胡塵暗し。

昊穹降元宰。君子万經綸。
澹然養浩氣。欻起持大鈞。
秀骨象山嶽。英謀合鬼神。
佐漢解鴻門。生唐爲後身。
擁旄秉金鉞。伐鼓乘朱輪。
虎將如雷霆。總戎向東巡。
諸侯拜馬首。猛士騎鯨鱗。
澤被魚鳥悅。令行草木春。
聖智不失時。建功及良辰。
醜虜安足紀。可貽幗與巾。
倒瀉溟海珠。盡爲入幕珍。
馮異獻赤伏。鄧生倏來臻。
庶同昆陽舉。再覩漢儀新。

昊穹、元宰を降し、君子、方に經綸。
澹然、浩氣を養ひ、欻ち起つて、大鈞を持す。
秀骨、山嶽に象り、英謀、鬼神に合す。
漢を佐けて鴻門を解き、唐に生まれて後身となる。
旄を擁して金鉞を秉り、鼓を伐つて朱輪に乘ず。
虎將、雷霆の如く、總戎、東に向つて巡る。
諸侯、馬首に拜し、猛士、鯨鱗に騎す。
澤被つて、魚鳥悅び、令行はれて、草木春なり。
聖智、時を失はず、功を建てて、良辰に及ぶ。
醜虜、安んぞ紀するに足らむ、幗と巾とを貽るべし。
倒に溟海の珠を瀉ぎ、盡く入幕の珍となる。
馮異、赤伏を獻じ、鄧生、倏ち來り臻る。
庶はくは、昆陽の舉を同じうし、再び漢儀の新なるを覩む。

晉爲管將鮑。中奔吳隔秦。
一生欲報主。百代期榮親。
其事竟不就。哀哉難重陳。
臥病宿松山。蒼山空四鄰。
風雲激壯志。枯槁驚常倫。
聞君自天來。目張氣益振。
亞夫得劇孟。敵國空無人。
捫蝨對桓公。願得論悲辛。
大塊方噫氣。何辭鼓青蘋。
斯言儻不合。歸老漢江濱。

むかしは、管と鮑とたり、中ごろ、吳に奔つて秦を隔つ。
一生、主に報いむと欲す、百代、榮親を期す。
その事、竟に就らず、哀いかな、重ねて陳べ難し。
病に臥す宿松山、蒼山空しく四鄰。
風雲、壯士を激し、枯槁、常倫を驚かす。
聞く君が天より來るを、目張つて氣益す振ふ。
亞夫は劇孟を得、敵國空しくして人なし。
蝨を捫つて、桓公に對し、願はくは悲辛を論ずるを得む。
大塊、方に噫氣、何の辭か青蘋を鼓せむ。
この言、もし合はざれば、歸老せむ漢江の濱。

【字解】【一】 神器　東京賦に、巨猾間歷、竊弄二神器一とあつて、薛綜の註に、「神器は天位なり」とある。【二】 天狼　星の名、亂賦に當ててある。【三】 紫宸　天子の居。【四】 六龍　もと日の車を引くのであるが、轉じて日車その物を言ひ、仍つて、天子に比す。【五】 吳雲　ともに天を指す。吳は顯氣の顯汗なるより云ひ、雲は形の尊嚴を爲せるより云ふ。【六】 元宰　冢宰に同じ、即ち首相。【七】 經綸　國家を治めること、絲にて布匹を織り出すに譬ふ。【八】 欻起　忽然として起る。唐書に「張鎬、布衣より興り、數年ならずして、將相に位す」といひ、獨孤及の唐故洪州刺史張公鎬遺愛頌に「南山に隱居する、蓋し三十期。天寶十四年、はじめて獨衣召見、これに由つて、一命左拾遺、再命右補闕、三命侍御史、四命諫議大夫、五命中書侍郎同中書門下平章事、布衣より起り、二年にして、相印を紐し、王業を佐く」とある。【九】 佐漢解鴻門　漢書に「項羽、鉅鹿の鴻門に至る、沛公が關中に王とし、獨り秦の府庫珍寶を有せむと欲するを聞く。亞父范增、羽に勸めて、沛公を擊たむとして、士を饗し、且日合戰せむとす。羽の季父項伯、素より張良に善し。良、時に沛公に從ふ。項伯、夜、以て良に語る。良、輿に俱に見ゆ。沛公、伯に因つて自ら羽に解く。明日、沛公、百餘騎を從へ、鴻門に至つて羽に謝し、自ら秦の府庫を封じ、軍を霸上に還し、以て大王を待ち、關を閉ぢて以て他盜に備へ、敢て德に背かざるを陳す。羽の意、すでに解く。范增、沛公を害せむと欲す、張良樊噲に賴つて免るるを得たり」とある。【一〇】 擁旄　擁は持つ。旄は、旌旗の屬で、衆を指揮するもの。【一一】 乘金鉞　乘は執る。古今註に「大將軍出征、特に黃鉞を加ふるものは、鉞を以て之を爲り、黃金もて飾る。刃及び柄は、純金を得す。黃鉞を賜ふを得ば、持節の將を斬る」とあり、天寶元年正月改元、詔して「文宣訓を垂れ、事、必ず名を正す。黃鉞は、古しへ、金を以て飾と爲す。金は五行の數に應じ、肅殺の威を布く。金を去つて黃と稱す、理或は未だ當らず、それ黃鉞は、宜しく改めて金鉞となし、威武の意を符すべし」とある。【一二】 可跏帽與巾　通鑑に「司馬懿、諸葛亮と相守ること百餘日、亮、數ば戰を挑む。懿、出でず。亮、乃ち懿に巾幗婦人の服を遺る。懿、怒り、上表して、戰を請ふ。亮曰く、彼、本と戰情なし、固く戰を請ふ所以のものは、以て武を衆に示さむとするのみ」とある。巾幗は婦人の服。【一三】 濱海球　獨孤及の張公鎬遺愛碑に「乃ち僚を音選する、必ず國の良、博陵の崔實、昌黎の韓洞、趙郡の李惟岳、北海の王士華、河間の邢宙、河東の裴孝智、隴西の李道の若きあり、皆輔材なり、嘉言碩畫を以て、公の軍事を贊す」とある。【一四】 入幕珍　晉書に「謝安、王坦之と書て桓溫に謂りて、事を論ず。溫、郗超をして、帳中に臥して、之を聞かしむ。風動いて、帳開く。安笑つて曰く、郗生は、入幕の賓といふべし」とある。【一五】 馮翼獻赤伏　後漢紀に「蕭王、中山に至り、羣臣、尊號を上る。王、聽かず。讖書國家を治めること、絲にて布匹を織り出すに譬ふ。王、馮翼を召し、問ふに羣臣の讖を以てし、且つ曰く、我、昨、夢に赤龍に乘じて、天に上り、覺悟すれば、心中悸動す、これ何の祥ぞや。翼再拜して賀して曰く、これ、天命、精神に發す、心中悸動するは、大王重愼の至なり、と。會ま、諸生疆華、長安

より赤伏符を奉じて鄗に至る、羣臣、固く請ひ、六月己未、皇帝の位に鄗に即く」とあつて、これが後漢の光武帝である。【一六】鄧生　後漢書の本傳に「馮、光武が河北を安集せしと聞き、即ち策に杖いて北渡し、追うて、鄗に及ぶ。光武、これを見て、甚だ歡ぶ」とある。【一七】昆陽擊　光武が王莽の將、王邑、王尋の兵を昆陽に破つたので、漢書の王莽傳に「世祖、悉く郾定陵の兵數千人を發し、來つて、昆陽を救ふ。尋邑、これを易り、自ら萬餘人に將とし、陣を行り、諸營に敕し、皆部を按じて動くことなからしめ、ひとり迎へ、漢兵と戮つて剌あらず、大軍敢て擅に相救はず。漢兵、勝に乘じて、尋を殺す。昆陽中の兵、出でて竝に戰ふ。邑走り、軍卒奔走し、各〻その郡に還歸す」とある。【一八】漢儀新　後漢書に「時に、三輔の吏士、東して、更始を迎ふ。諸將の過ぐるを見るに、皆冠幘して婦人の衣を衣る。諸子繡襦、これを笑はざるはなし、或は長れて走るものあり。司隸の僚屬を見るに及びて、皆歡喜して、自ら勝へず、老吏或は涕を垂れて曰く、圖らざりき、今日復た漢官の威儀を見むとは」とある。【一九】管將鮑　將は興に同じ、管仲鮑叔牙の事、前に見ゆ。【二〇】柴觀　爵縣名譽。【二一】宿松山　太平寰宇記に「舒州宿松縣、本と漢の皖縣の地、元始中、松滋縣となし、廬江に屬す。晉武、吳を平らげ、荊州に松滋縣あるを以て、遂に改めて、宿松縣となす」とある。【二二】亞夫得劉孟　前に梁甫吟の處に見ゆ。【二三】問蘇對桓公　晉書に「桓溫、關に入る。王猛、褐を被て、之に謁り、一面して當世の事を談じ、虱を捫して言ふ、旁に人なきが若し」とある。【二四】大塊方噫氣　莊子に「大塊の噫氣、その名を風と爲す」とある。【二五】青蘋　宋玉の風賦に、風生二於地一、起二於青蘋之末一とある。

【題義】題下の自註に「時に難を逃れ、病んで宿松山に在つて作る」とある。舊唐書に「張鎬は、博州の人、風儀魁岸、廓落にして大志あり、經史を涉獵し、好んで、王霸の大略を談ず。天寶の末、褐衣より左拾遺に拜す。玄宗、蜀に幸す。鎬、山谷より、徒步扈從す。肅宗即位、玄宗、鎬を遣して行在所に赴かしむ。鎬、鳳翔に至り、奏議、弘益するところ多し。諫議大夫に拜し、尋いで、中書侍郎同中書門下平章事に遷る。帝、意を將帥に注ぎ、鎬が文武の才業あるを以て、命じて、河南節度使持節都統淮南等道諸軍事を兼ねしむ、兩京を收復するに及び、鎬に銀青光祿大夫を加へ、南陽郡公に封せられ、本軍を以て、汴州に駐まり、殘孽を招討す」とある。杜甫の洗兵馬にも「關中既留蕭丞相、幕下復用張子房。張公一生江海客。身長九尺鬚眉蒼。徵起適遇風雲會。扶顛始知籌策良」とあつて、一時の聲望、想ひ見るべしである。それから、杜甫が房琯を辯護して上疏し、その爲に罪を獲むとした時も、この人の營救に因つて、はじめて、罪を免れた。して見ると、李杜二人、ともに齊しく、張鎬に關係があつたので、彼は元と文武の全才を以て稱せられたからである。

【詩意】帝位は、元と神器と稱すべきもので、勝手に竊んで玩ぶといふことは出來ぬものであるが、それに拘はらず、安祿山は非望を企て、天狼の妖星が紫宸の帝居を窺ひ、白日の下、六龍は西に幸し、四海の廣きも胡塵に暗くなつた位、まことに、由由しき大事である。この時、皇天より冢宰となるべき大人物を下したのが、我が張鎬で、一身を以て經綸の端緒に就くこととなり、平生澹然として、世間を外に、浩然の氣を養つて居たが、一朝にして、天下を統治する大權を手に握つた。君の秀でたる骨相は、さながら山嶽に象り、その英謀は、自ら鬼神と其軌を一にして居る。むかし、張良は、漢の高祖を輔けて、鴻門の會の大災厄を解いて救つたが、その張良が、今唐の世に生まれ合せ、つまり張良の後身が、即ち我が張鎬と成つたのである。そこで、白旄の外に金鉞を手にし、天子から全權を付與されて、肅殺の威を布き、そして、淵淵たる鼓聲の中に、朱輪の小車に乘つて、軍中を縱橫に

馳せて行く。虎の將領輩は、その勢、雷霆の如く、總大將たる君は、東に向つて巡り、洛陽の西、一帶に於ける安祿山の殘黨を平定しやうといふのである。東方の節度使どもは、馬前に拜して、謹んで、命令を承り、そして、麾下の猛士は、鯨や大魚に乘つた想を爲し、專ら君に因つて、大功を立てやうとして、心から勇んで居る。その德澤の被るところ、魚鳥までも喜を爲し、令行はるれば、草木までが、春の景色を催すばかりである。君の如き聖智の才德を以て、千載の一時と稱すべき場合にめぐり合ひ、良辰に及んでは、天晴の大功を立てやうと、自ら心に豫期して居られる。されば、醜虜の如きは、もとより、齒牙に掛くるに及ばぬもので、彼等が勢威に恐れて、すこしも出て來ぬのも、尤も千萬、仍つて、巾幗婦人の服を贈つて、之を辱めて遣つたらば善からう。君の人物材幹、すでに此の如く、從つて、一時の才俊、輩出し、たとへば、溟海の底に集まれる名珠の有らむ限りを、倒に注いだやうに、齊しく來つて、幕中の賓客となつて、各〻嘉言碩畫を以て、君の軍事を輔けて居る。されば、自然の瑞祥は、馮異が光武帝に勸めて赤伏符に應せしめた如く、遠方から英才の來ることは、鄧禹が策に仗つて態態光武の軍を訪うた如く、やがて、昆陽の夜戰の如き一大捷を得て、すつかり、胡兵を追ひまくり、再び風俗を昔に歸して、漢の威儀の新なるを目睹することは、何の造作もないことである。われと君とは、その初、管仲が鮑叔牙に於けるが如く、互に心を知り拔いた親友であつたが、中ごろ、われは吳に出かけた爲に、秦地に居る君とは、自然阻隔するやうになつた。

かくて、われは、百代の末までも輝くやうに榮譽爵祿を得たいと念じて居たものの、その事、竟に成功せず、その間の經過に就いては、何分重ねて此に述べ立てることも出來ない。それから、終には病氣になつたから、保養の爲に、宿松山に籠つたが、煙嵐蒼茫として、四鄰といふべきものなく、まことに、淋しさの限り、滿目の風雲に對して、むかしながらの壯志を振ひ起すものの、形容枯槁の極、見る人さへ驚く位。君は、九重の帝都より降り來り、殘賊を退治しやうといふので、これを聞くと、兩目を見張つて、氣が振ひ立つ位。むかし、周亞夫は、吳楚七國を征するとき、劇孟を得て、おのが幕下に入れ、この上は、敵國に人物なく、全く恐るるに足らぬといひ、王猛は、桓溫に對し、虱を撚りつつ、悲むに堪へたる當世の時務を論じたといふが、われも亦た劇孟や王猛を以て自ら任じて居るもので、君は果して周亞夫となり、桓溫となつて、これを用ひて下さるか、どうか。大塊、即ち天地が、欠伸をすると、それが風となつて、水面に浮ぶ靑蘋を動かすので、われも君に用ひらるれば、如何に、面倒くさい樣な瑣事でも、少しも、辭退せずして、之に當ることは申すまでもない。かくまで、意中を盡して申し上げるに、君にして、これを御取上に成らぬならば、愈よ致方ないものと思ひ切つて、漢江の邊に歸老して、この世を棄てる外はない。

(二) 本家隴西人。先爲漢邊將。　本家は隴西の人、先は漢の邊將たり。

功略蓋天地。名飛青雲上。
苦戰竟不侯。當年頗惆悵。
世傳崆峒勇。氣激金風壯。
英烈遺厥孫。百代神猶王。
十五觀奇書。作賦凌相如。
龍顔惠殊寵。麟閣憑天居。
晩途未云已。蹭蹬遭讒毀。
想像晉末時。崩騰胡塵起。
衣冠陷鋒鏑。戎虜盈朝市。
石勒窺神州。劉聰劫天子。
撫劍夜吟嘯。雄心日千里。
誓欲斬鯨鯢。澄清洛陽水。
六合灑霖雨。萬物無彫枯。

功略、天地を蓋ひ、名は飛ぶ青雲の上。
苦戰、竟に侯たらず、當年頗る惆悵。
世、崆峒の勇を傳へ、氣は金風の壯なるに激す。
英烈、厥孫に遺し、百代、神猶ほ王。
十五にして奇書を觀、賦を作つて相如を凌ぐ。
龍顔、殊寵を惠み、麟閣、天居に憑る。
晩途、未だ已むと云はず、蹭蹬、讒毀に遭ふ。
想像す晉末の時、崩騰、胡塵起る。
衣冠、鋒鏑に陷り、戎虜、朝市に盈つ。
石勒、神州を窺ひ、劉聰、天子を劫す。
劍を撫して、夜、吟嘯し、雄心、日に千里。
誓つて、鯨鯢を斬り、洛陽の水を澄清せむと欲す。
六合、霖雨を灑ぎ、萬物、彫枯なし。

我揮一杯水。自笑何區區。
因人恥成事。貴欲決良圖。
滅虜不言功。飄然陟蓬壺。
惟有安期鳥。留之滄海隅。

我、一杯の水を揮ひ、自ら笑ふ、何ぞ區區たる。
人に因て事を成すを恥ぢ、良圖を決せむと欲するを貴ぶ。
虜を滅して功を言はず、飄然として、蓬壺に陟る。
惟だ安期の鳥あり、これを滄海の隅に留めむ。

【字解】【一】本家隴西人、先爲漢邊將　唐書宗室世系表に「李氏は、高姓より出づ。その後、仲翔あり、河東大守征西將軍となり、叛羌を素昌に討つて戰殁し、隴西狄道東川に葬り、因つて家す。仲翔、伯考を生む、隴西河東二郡の太守。伯考、尙を生む、成紀令。尙、廣を生む」とあつて、これが卽ち李廣。これから、十數世にして、西涼武昭王暠に至り、暠から九世にして、李白に至るのである。【二】不侯　李廣、數奇にして、戰功あるに拘はらず、終に侯に封ぜられなかつた。史記に「廣、かつて、望氣王朔と燕語して曰く、漢、匈奴を擊つの軍功を以て、侯を取るもの、數十人、廣、人に後れたりと爲さず、然れども、尺寸の功以て封邑を得るものなきは何ぞや、豈に吾が相、侯に當らざるか、且た固より命なるか」とある。【三】崆峒勇　羅雅に「太平の人は仁、丹穴の人は智、大蒙の人は信、空桐の人は武」とあつて、郭璞の註に「地氣、これをして然らしむるなり」とある。崆峒は山名、史記正義に「括地志に云ふ、崆峒山は肅州福祿縣東南六十里に在り」とあり、又「弇頭山、一名崆峒山、原州高平縣西百里に在り」とある。そして、通典に「原州平高縣に崆峒山あり、岷州溢樂縣に崆峒山あり、肅州福祿縣に崆峒山あり」と云へば、崆峒山は、すべて三處に在るのであるが、岷州の、漢の時、隴西郡に屬して居た。【四】金風　秋は西方、金を主るから秋風を金風といふ。【五】聊猶王　王は旺なること、同音なるが故に通用す。【六】相如　司馬相如。【七】龍顔惠殊寵　李白が召見された時、玄宗が御手奏を調へ、步輦にて降迎した事を指す。【八】天居　天子の御住居。【九】蹭蹬　步行困難の貌。【一〇】崩騰　破壞の貌。【一一】石勒、劉聰　晉書孝愍帝記に「永嘉

五年六月癸未、劉曜、王彌、石勒、同じく洛川に寇し、王師潰りに破られ、死者甚だ衆し。丁酉、劉曜、王彌、京師に入る。帝、華林園の門を開き、河陰の藕池に出で、長安に幸せむと欲し、曜等に追及せらる。曜等、遂に宮廟を焚燒し、紀后を逼辱し、百官士庶、死するもの三萬餘人。帝、平陽に蒙塵す。劉聰、帝を以て會稽公と爲す」とある。【二二】區區　瑣小の貌。【二三】因人恥成事　史記に「毛遂曰く、公等碌碌、謂はゆる人に因つて事を成すものなり」とある。【二四】蓬蒿　蓬萊に同じ。【二五】安期羇　南方草木狀に「番禺の東に澗あり、澗中に菖蒲を生ず、皆一寸九節。安期生、採つて服し、仙し去り、但だ玉舄を留むるのみ」とある。

【詩意】　わが本家は、元と隴西の人で、先祖は、漢の邊將として、神射の譽を世に轟かした李廣その人である。李廣の功業材略は、天地を蓋ふばかり、その英名は、青雲の上に飛び上る位、しかも、運命數奇にして、しばしば、苦戰したが、終に封侯の位を得ず、その當時、自ら惆悵して嘆息して居た。李廣は、崆峒山下の生まれで、土地から、自ら勇あつて、世に知られ、その豪氣は、秋風に激して、愈よ壯んであつた。かくて、その英烈の氣概は、子子孫孫に傳はり、百代の後に至るも、依然として、精神が旺盛で、遂にわれ李白のやうな人物が出來たのである。われは、年十五に及ぶ頃、天下の奇書を讀み盡し、賦を作れば、古しへの司馬相如を凌ぐ位。されば、天子に謁見した時、玄宗皇帝は龍顏を和らげて、特別の恩寵を賜はり、御手づから羹を調へ、步輦を降つて、迎へられた位。平生出仕する麒麟閣は、天子の御住居に近く、つまり侍從の末班に參し、追追登庸される筈であつて、晩年の仕途、未だ止むことは無いと思つて居た。然る處、一朝、行步艱難の有樣で、讒言に遭ひ、やがて、放逐の憂き目を見るに立ち至つた。これに次いで、安祿山の亂が一たび起ると、恰も晉末の時の騷擾を想起する程で、衣冠の縉紳輩は、鋒鏑に罹つて命を殞し、胡人どもは、亂入して朝市の間に充滿し、さながら、石勒が中原を窺ひ、劉聰が天子を劫すといふ樣な事で、おのれは之を見聞する毎に、慨慨禁せず、劍を撫して、中夜に吟嘯し、一片の雄心、日に千里の遠きに馳せ、誓つて、鯨鯢の如き逆賊を斬り、今しも濁れる洛陽の水を一たび澄清し、六合の中に霖雨を灑ぎ、萬物を凋枯せしめず、すべて甦るやうにしたいと思つて居る。われは、焚ゆる火を消す爲に、一杯の水を注ぎかけるやうなもので、まことに、こせこせして、何の役にも立たず、考へれば、をかしいやうであるが、本來、人に縋つて、功を立つるを愧ぢ、曲りなりにも、獨立して遣つて行かうといふので、心に思つて居る折角の良圖を斷行したいのである。もとより、胡虜を滅するとも、その功績を言ひ立てず、飄然として、この世を辭し、はるかに、蓬萊に遊んで、仙人を尋ね、古しへの安期生が菖蒲を服し、其跡に靴を殘したといふ樣に、滄海の邊に名殘を留めて、超然高踏したい。それにつけても、君には、われを引き立てて、天晴、大功を立てるやうに世話して戴きたいものである。

【餘論】　連作二首、前首は、主として、張鎬の人物功業を述べ、次に自己との關係に及び、後首は、自己の家世より始めて、功名の念あることに及び、いづれも、その末に於ては、張鎬の汲引を囑望したのである。甌北詩話に「張相鎬に贈る詩に云ふ、臥病宿松山、蒼茫空四鄰、聞君自天來、目張氣益振、と。按ずるに、張鎬が宰相を以て、河南節度使を兼ね、出でて、河南の帥たるは、至德二載の

秋に在り、而して、永王璘の敗、この年の春に在り、璘敗れ、青蓮、卽ち亡げて、宿松に奔り、潯陽の獄に繫がる、安んぞ、詩を以て鎬に贈るを得むや。豈に亡げて宿松に奔る時、なほ未だ繫がれず、鎬の將に至らむとするを聞いて、詩を以て之を干すか」といつて、その疑を挾んだのは、いかにも尤もであるが、遺憾ながら、史料が缺乏して居るから、前後の事を詳に考へることは出來ない。

聞謝楊兒吟猛虎詞。因此有贈

謝楊兒が猛虎詞を吟ずるを聞き、此に因つて贈あり

(一)同州隔秋浦。聞吟猛虎詞。同州は秋浦を隔つ、猛虎の詞を吟ずるを聞く。
晨朝來借問。知是謝楊兒。晨朝來つて借問す、知る、是れ謝楊兒。

【字解】【一】同州隔秋浦　王琦の解に「謂ふは、同、池州に在つて、隔つるところのものは祇だ一の秋浦の水なり。秋浦水は、池州府城の西南八十里に在り」とある。なほ、秋浦は、前に詳しく説明して置いた。

【題義】謝楊兒といふは、何者か分らぬが、名前から判斷すると、歌妓の類であるかとも思はれる。猛虎詞とは、樂府の猛虎行であらう。この詩は、謝楊兒が猛虎行の詩を歌ふといふことを聞いて、その人に贈つたのである。

【詩意】同州と秋浦とは、ともに池州に隸屬し、相去ること遠からず、そして、その中間に在つて隔となすのは、一條の水である。われは、池州に居て、對岸の秋浦に猛虎行の詩を吟ずる聲を聞いた。その調子が如何にも巧である處から、朝來、歌の主は誰かといつて頻りに問うた處が、音に聞こえた謝楊兒であるといふことが分かつた。因つて、取り敢へず、記念として、拙作を贈る次第である。

【餘論】この詩は、平淺にして、他の奇もなく、その有無、もとより相關せざる底の率作である。

宿清溪主人

清溪の主人に宿す

夜到清溪宿。主人碧巖裏。夜、清溪に到つて宿す、主人碧巖の裏。
簷楹挂星斗。枕席響風水。簷楹、星斗を挂け、枕席、風水を響く。
月落西山時。啾啾夜猿起。月、西山に落つるの時、啾啾として夜猿起る。

【字解】【一】啾啾　楚辭に猿啾啾兮狖夜鳴とあつて、呂延濟の註に「啾啾は猿聲」とある。

【題義】この清溪は、前にも見える通り、池州に在つて、卽ち秋浦と程遠からぬ處である。李白は、その地に宿した時、これを賦して、その家の主人に贈つたのである。

【詩意】われは、終日遊び歩き、夜に成つて、清溪にたどり著いて、碧巖の中なる此家を尋ねあて、

主人に逢うて、やがて、ここに一泊することに成つた。この家は、溪山の幽處に當り、軒の柱の間には、星を掛け、枕席の近くには、風水相和する聲が琅琅然として聞こえる。それから、夜半を過ぎて、月、斜に西山に落つる時分には、啾啾たる猿の聲が聞こえ、まことに、此世を離れた想がする。

【餘論】嚴滄浪は「その境、清きに過ぎて、久しく宿するに堪へず」といひ、乾隆御批には「奇語、眼前より得たり」とあつて、尤も妙なるは、簷楹の十字、これは、その實景を目睹せしものに非ざれば、斷じて、道破し得ぬところである。

繫尋陽上崔相渙　三首

邯鄲四十萬。同日陷長平。
能廻造化筆。或冀一人生。

【字解】〔一〕邯鄲四十萬　史記に「白起、韓魏を越えて、張趙を攻め、北、馬服を坑にし、四十餘萬の衆を誅屠し、これを長平の下に盡すや、流血川を成し、沸聲雷の若く、遂に入つて邯鄲を圍む」とあり。論衡に「秦將白起、趙の降卒を長平の下に坑にすること四十餘萬、同時に皆死す」といひ、沈炯の白三長安還至三方山一愴然自傷と題せる詩に秦軍坑三趙卒一遂有三一人生一とある。

【題義】この詩は、李白が永王璘の亂後、尋陽の獄に繫がれた時、崔渙に上つて、その救助を依囑したのである。

【詩意】今次、永王の亂に與みして殺されしものは、隨分多く、むかし、邯鄲より發せし四十萬の趙卒が、同日に長平に敗れて坑殺されたと同一の慘狀である。かくて、永王幕下の者どもは、齊しく誅殺される筈でもあらうが、君にして、公明なること、造化に等しき筆を廻らして、判決を下されたならば、われ一人は、どうにかして生き殘ることも出來ると思はれるので、何分宜しく御助力を願ふ次第である。

毛遂不墮井。曾參寧殺人。
虛言誤公子。投杼惑慈親。
白璧雙明月。方知一玉眞。

【字解】〔一〕毛遂　西京雜記に「趙に兩毛遂あり。野人毛遂、平原君の客に非ざるを知るなり」とある。〔二〕曾參　戰國策に「曾參、費に處る。費人、曾參と名族を同じうするものありて、人を殺す。人、曾子の母に告げて曰く、曾參、人を殺す、と。曾子の母曰く、吾が子、人を殺すと。織ること自若たり。頃くあつて、人又曰く、曾參、人を殺す、と。その母、織ること尙ほ自若たり。これに頃くあつて、一人又これに告げて曰く、曾參、人を殺す、と。その母懼れ、杼を投じ、牆を踰えて走る」とある。〔三〕杼　ひ、說文に「機の緯を持するものなり」とある。

【詩意】世間には、兎角、讒誣を事とする手合があつて、その爲に、正しき人も迷惑するので、自分

も、刻下、その樣なひどい目に遇つて居る。むかし平原君の客たる毛遂は、井に落ちたのではなかつたが、同じ姓名の野人の事から、一事の虚言も、平原君を誤信せしめて、ひどく力を落したといふ話があるし、曾參は、決して人を殺しはしないが、同じ姓名の者が大罪を犯し、告ぐるもの三度に及び、さしもの曾參の母も、はじめて之を疑ひ、自分も連坐せられむことを恐れ、杼を投げ出し、急に機から飛び下りて、逃げ出したといふ話があつて、卽ち讒誣の人を誤惑せしむることの證據になつて居る。白璧と明月と竝ぶとき、光輝爛然として、互に見間違へる程であるが、少し心を留めて見れば、玉の玉たる所以の眞相が分ると同じく、讒誣の言と雖も、決して、實情の分らぬことは無いから、閣下に於ても、その心して、私の身の上に關する讒誣の言を善く聞き分けて、これに惑はされぬことを希望する次第である。

(一)虛傳一片雨。枉作陽臺神。　虛しく傳ふ一片の雨、枉げて陽臺の神となる。
縱爲夢裏相隨去。　たとひ、夢裏相隨つて去らるるも、
不是襄王傾(二)國人。　是れ襄王傾國の人ならず。

【字解】【一】虛傳一片雨　これは巫山神女の事で、前に數ば見えたから、ここには略する。なほ奥信の詩に、何勞一片雨、喚作陽臺神」とある。【二】傾國人　傾國は李延年の歌に再顧傾二人國」とあるに本づく。

【詩意】巫山の神女は、暮には行雨となるといふので、陽臺の神とされて居るが、そは古しへの虛傳に過ぎず、もとより事實でも何でもない。それから、神女が楚王の夢に入つたといふことはあつたにしても、決して襄王を惑はし、これをして、國家を危くせしめたなどいふ事は絶無で、世人が普通巫山の神女に就いて考へて居ることは、間違つて居る。世俗の見解は、大抵かうしたものであるから、今次、わが事に就いて樣樣の事を言つて居るだらうが、その心して、御聽取あらむことを希望する。

【餘論】首首、いづれも淺薄で、たとひ、讒誣を辯ずること急なるが爲とはいへ、あまりに甚しいかと思はれる。殊に第三首に至りては、舊註に「この一首、恐らくは崔相に上りしに非ず、亦た恐らくは、太白の作に非ず」とさへ云つて居る。

巴陵贈賈舍人

巴陵にて賈舍人に贈る

(一)賈生西望憶京華。　賈生、西望、京華を憶ふ。
湘浦南遷莫怨嗟。　湘浦に南遷すとも、怨嗟する莫れ。
聖主恩深漢文帝。　聖主の恩は漢の文帝よりも深く、
憐君不遣到(二)長沙。　君を憐んで、長沙に到らしめず。

【字解】【一】賈生　史記に「賈生、年少、諸子百家の書に通ず、文帝、召して以て博士と爲し、超遷して、一歲中に太中大夫に至る。後、亦た之を疏んじ、その議を用ひられず、乃ち以て長沙王太傅と爲す。賈生、すでに辭して往き、行く長沙の

卑濕なるを聞き、自ら以へらく、壽、長きを得ず、と。又謫を以て去り、意自得せず。湘水を渡るに及び、賦を爲り、以て屈原を弔ふ」とある。【三】長沙　洞庭湖の南に在り、「巴陵を去つて、遠きこと又五百五十里」とある。

【題義】唐時の巴陵郡は、卽ち岳州で、江南西道に隷屬して居た。唐書に「賈至、字は幼鄰、明經の第に擢んでられ、褐を單父の尉に解き、玄宗に從つて蜀に幸し、起居舍人知制誥に拜せられ、中書舍人を歷、至德中、小法に坐し、岳州司馬に貶せられ、寶應の初、召して故官に復す」とある。この詩は、李白が夜郎に赴く途中、岳州に遊び、そこで、賈至に遇つたから、賦して贈つたのである。

【詩意】當年の賈誼に比すべく、且つ同姓の因ある賈至は、湘水の浦口なる岳州の司馬に貶謫せられ、しきりに、西望して、都[illegible]を思つて居るが、よくよく考へて見て、決して怨み歎かぬが善い。何となれば、今の聖主の恩は、漢の文帝よりも深く、君を憐んで、賈誼の如く長沙にまでは遠流せず、この地に止められた位であるからである。

【鑑論】通篇、賈生を以て賈至に擬し、後半に於て、故事を翻用して新意を發した處が面白いので、まさしく、一種の篇法である。

李太白詩集　卷十一

贈別舍人弟臺卿之江南

贈別舍人弟臺卿之江南に之くに贈別す

去國客行遠。還山秋夢長。
國を去つて、客行遠く、山に還つて、秋夢長し。

梧桐落金井。一葉飛銀牀。
梧桐、金井に落ち、一葉、銀牀に飛ぶ。

覺罷攬明鏡。鬢毛颯已霜。
覺め罷んで明鏡を攬り、鬢毛、颯としてすでに霜なり。

良圖委蔓草。古貌成枯桑。
良圖、蔓草に委し、古貌、枯桑と成る。

欲道心下事。時人疑夜光。
心下の事を道はむと欲す、時人、夜光を疑ふ。

因爲洞庭葉。飄落之瀟湘。
因つて洞庭の葉となつて、飄落して瀟湘に之く。

令弟經濟士。謫居我何傷。
令弟、經濟の士、謫居、我何ぞ傷まむ。

潛虬隱尺水。著論談興亡。
潛虬、尺水に隱れ、著論、興亡を談ず。

客遇王子喬。口傳不死方。
客は王子喬に遇ひ、口づから不死の方を傳ふ。

入洞過天地。登眞朝玉皇。洞に入つて、天地を過ぎ、登眞、玉皇に朝す。
吾將撫爾背。揮手凌蒼蒼。吾、將に爾の背を撫し、手を揮つて、蒼蒼を凌がむとす。

【字解】【一】 梧桐落金井、一葉飛銀牀　淮南王篇に後園鑿井銀作牀、金瓶素綆汲寒漿とあり、庾肩吾の詩に銀牀落井桐とある。顧愈に「井幹は、井上の木欄なり、その形四角、或は八角、又これを銀牀といふ、皆井欄なり」とある。【二】 疑夜光　史記に「明月の珠、夜光の璧、暗を以て人に道路に投ずれば、人、劍を按じて相眄みざるものなし。何となれば、因なくして前に至ればなり」とある。【三】 洞庭葉　楚辭に洞庭波兮木葉下とある。【四】 令弟　謝靈運の詩に、來路值令弟とあつて、自分の弟を尊稱していふ。【五】 滑虬　謝靈運の詩に滑虬媚幽棲とある。說文に「虬は龍の角あるもの」とある。【六】 王子喬　仙人王子喬の碑に「王子喬は、蓋し上世の眞人、聞く其仙、何の代に興るかを知らざるなり、博く道家に聞く、或は言ふ潁川、或は言ふ蒙に產す」とある。【七】 不死方　長生の藥を鍊る祕方、抱朴子に「李少君、不死の方あり」とある。【八】 登眞　眞は仙、登仙に同じ。

【題義】 舍人弟臺卿といふのは、李白の族弟で、中書舍人の職に居た李臺卿といふ人である。臺卿は、字かと思はれるが、本名は分らない。そして、詩中に謫居我何傷とあれば、この人も、何か罪を獲て、江南に遷謫せられ、李白は、之に洞庭の邊に遇ひ、仍つて、この詩を賦して、その行を贈つたのである。王琦の說に「舊唐書の永王璘傳に、璘、薛繆・李臺卿・蔡垧を以て謀主となす、其れ卽ちこの臺卿か。太白の永王璘に徵さる、想ふに、斯人これが累を爲すなり」とあつて、或はさうかとも思はれる。

【詩意】 われは、今次國を去つて、夜郎に向はむとし、客行日に遠く、唯だ長き夜の夢の中に、故山に歸るのみである。頃しも秋で、梧桐は金井に落ち、一葉輕く飄つて、井桁の上に飛び散つた。かくて、夢覺めて、はじめて起き出で、明鏡を手にして、わが影を照らし見れば、鬢の毛は、さわさわと亂れ、おまけに、霜を帶びて白く成つて居た。おもへば、胸中に蓄へし折角の良謀は、實施するに由なく、むなしく蔓草に委し、今樣ならぬ古貌は、枯れた桑と同じく、瘦せはてて仕舞つた。かくて、心中の事を語り出でむとするも、時人は、暗中に夜光の珠を投ずると同じく、不思議に思つて、目を見張るばかり。やがて、罪を獲て、遠謫せらるることとなり、洞庭に翻る木葉の如く、ひらひらと飄つて、瀟湘にまで行くことに成つた。わが弟は、經濟の道に詳しき才士でありながら、今次、矢張、罪を得て、この地に謫居したのであるが、われは、決して之を傷まない。君は、虬が潛むとき、わづかばかりの水の中に隱るるが如く、そして、十分餘暇もあることだから、著述をして、古今の興亡を縱談すべく、それから、王子喬の樣な仙人に出遇つたならば、口づから、長生鍊藥の祕方を傳授して貰ひ、洞中に入つて、この世ならぬ別天地を過ぎ、登仙して、天上におはす玉皇に朝謁するが善からう。われも亦た仙道に志あるものだから、汝の背を撫し、手を揮つて、この世を謝し、やがて共に雲霄の間に翱翔すべく、遷謫の厄などは、くよくよと嘆くにも及ぶまい。

【餘論】 李臺卿は、如何にして、遷謫されたか、この詩だけでは分らぬ。もし王琦の說を眞なりとすれば、永王璘の參謀たりし故を以てしたので、李白が詩中に於て之を詳言せぬのは、尤も千萬の事で

ある。この詩は、謫居中、著論を爲し、及び仙を學ぶことを勸めたので、いかにも李白の言ひさうなことである。

醉後贈王歷陽

醉後、王歷陽に贈る

書禿千兎毫。詩裁兩牛腰。書は千兎の毫を禿にし、詩は兩牛の腰を裁す。
筆蹤起龍蛇。舞袖拂雲霄。筆蹤、龍蛇を起し、舞袖、雲霄を拂ふ。
雙歌二胡姬。更奏遠清朝。雙歌、二胡姫、更る奏して清朝に遠ざかる。
舉酒挑朔雪。從君不相饒。酒を舉げて朔雪に挑げ、從かず、君が相饒さざるに。

【字解】【一】禿千兎毫　晉書に「千兎の輪を禿すと雖も、棄むれば一毫の筋なし」とあるに本づく。【二】裁兩牛腰　蘇頌の言に「詩裁二兩牛腰一とはその卷大にして、牛腰の如きなり」とある。【三】起龍蛇　梁武帝書に王右軍の書を評して「龍の天門に跳り、虎の臥闕に臥するが如し、故に歷代これを寶とし、永く以て訓となす」とある。【四】清朝　齊威の歌に、清朝俄レ牛至二夜半一とあつて、清朝は清晨に同じ。【五】不相饒　相許さずと訓ずべし、從君不二相饒一は、しばらくも止まないが、これは、御勝手といふ意であらう。

【題義】歷陽は縣名、和州歷陽郡に隸し、淮南道に屬して居た。この詩は、歷陽の縣令王某に贈つたのである。

【詩意】君は、詩書の兩道にかけて、頗る妙域に到達したもので、書は、羊毛の筆を千本までも坊主にする程、稽古をつづけ、詩は、積んで卷冊をなし、その大、牛腰にも比ぶべく、しかも、それが二冊もあるといふ位。かくて、筆の跡は龍蛇の跳るが如く、時に興に乘じて舞ひ出せば、その袖は、雲霄を拂ふばかり、傍には、二人の胡姫が居て、かはるがはる歌を唱へ、清晨より始めて、しばらくも止まない。この歌の聲を聞きつつ、君は酒を擧げて、折からの雪に見ほれて御座るが、それも、まことに、お宜しい事で、遨興、さこそと推察せられる。

【餘論】この詩は、王歷陽の人物風懷を述べただけで、格別、深い意味もなく、つまり應酬の率作である。

贈歷陽褚司馬。時此公爲稚子舞。故作是詩也。

歷陽の褚司馬に贈る、時に此公、稚子の舞を爲す、故に是詩を作る

北堂千萬壽。侍奉有光輝。北堂千萬壽、侍奉して光輝あり。
先同稚子舞。更著老萊衣。先づ稚子の舞を同じうし、更に老萊の衣を著く。
因爲小兒啼。醉倒月下歸。因つて、小兒の啼を爲し、醉倒して、月下に歸る。

人間無此樂。此樂世中稀。　人間、この樂なし、この樂、世中に稀なり。

【字解】【一】老萊衣　藝文類聚に「列士傳に曰く、老萊子、二親を孝養す、行年七十、嬰兒自ら娛み、五色の采衣を著く　かつて嬰を取り、堂に上つて跌仆し、因つて、地に臥して、小兒の啼を爲し、或は鳥鳥を親の側に弄す」とある。

【題義】歷陽の司馬褚某といふ人が、稚子の舞をしたから、席上、この詩を作つて贈つたのである。

【詩意】君の御母堂は、千萬年の高壽を期すべく、まことに、御目出たいことで、これに侍養して居る君も、名譽の極である。そこで、第一に稚兒の樣な踊を爲し、それから老萊子の如き五采の衣を著けて、專ら母の心を慰めやうとして居る。この席上に於ても、かくし藝として、小兒の泣き聲を眞似、やがて醉ひつぶれて月下に歸つて往かれた。君の孝養は、滅多に見ない位、人間に此樂は無く、この樂は、又世の中に於て極めて稀なものである。

【餘論】前半は、褚司馬の平生の孝養を敍し、次の二句は、席上に於ける仕ぐさ、終の二句は論贊的に加へたので、語意重複、反覆詠嘆した處に趣がある。

對雪醉後贈王歷陽

雪に對して醉後王歷陽に贈る

有身莫犯飛龍鱗。　身あるも、犯す莫れ、飛龍の鱗。
有手莫辮猛虎鬚。　手あるも、辮する莫れ、猛虎の鬚。

【字解】【一】猛虎鬚　莊子に、「疾走して虎頭に觝り、虎鬚を編む、幾んど虎口を免れざるか」とある。

君看昔日汝南市。　君看よ、昔日汝南の市。
白頭仙人隱玉壺。　白頭の仙人、玉壺に隱るるを。
子猷聞風動窓竹。　子猷、風の窓竹を動かすを聞き、
相邀共醉杯中綠。　相邀へて、ともに醉ふ杯中の綠。
歷陽何異山陰時。　歷陽、何ぞ異ならむ山陰の時。
白雪飛花亂人目。　白雪花を飛ばして、人目を亂る。
君家有酒我何愁。　君が家に酒あり、我何ぞ愁へむ。
客多樂酣秉燭遊。　客多く、樂酣にして、燭を秉つて遊ぶ。
謝尙自能鸛鴿舞。　謝尙は自ら鸛鴿の舞を能くし、
相如免脫鵠鷄裘。　相如は鵠鷄裘を脫するを免る。
淸晨鼓棹過江去。　淸晨棹を鼓し、江を過ぎて去る。
千里相思明月樓。　千里相思ふ、明月の樓。

【二】汝南市　神仙傳に「壺公は、その姓名を知らず。汝南の費長房、市掾たり、忽ち公が遠方より來り、市に入つて藥を賣り、常に一空壺を屋上に懸け、日入るの後、公跳つて壺中に入るを見る。人能く見るなし。惟だ長房樓上より之を見、常人に非ざるを知り、乃ち日日自ら公の座前の地を掃ひ、及び飼物を供す。公、受けて辭せず、久しきを積んで、長房弱ほ懈らず、亦た敢て求むるところあらず。公、長房の篤信を知り、長房に謂つて曰く、暮れて人なき時に至つて更に來れ、と。長房、その言の如くして卽ち往く。公、房に語つて曰く、我が過つて壺中に入る時を見て、痛、便ち我に救うて驕るべし、自ら當に入るを得べし、と。長房、言に依り、果してすでに入るを覺えず、入る後、復た是れ壺ならず。惟だ仙宮世界樓觀重門閣道を見る、公の左右侍者數十人。

癸、屑に語つて曰く、われは仙人なり、むかし、天曹に處り、公事勤めざるを以て貶められ、因つて、人間に謫せらるるのみ。爾、敢ふべし、故に我を見るを得たり」とある。【三】子猷　王子猷、山陰に居り、夜、大雪、眠覺め、室を開き、命じて酒を酌みしこと、前に見ゆ。【四】杯中綠　綠は綠酒。【五】謝尙　晉書に「王導、謝尙を辟して、掾と爲す、はじめて、府に到つて通謁するや、導、その勝會あるを以て、謂うて曰く、聞く、君、能く鸜鵒の舞を爲すと、一坐傾想す、寧ろ此理あるか。尙曰く、淦なり、と。便ち衣幘を著けて舞ふ。導、坐者をして、掌を拍し、節を擧たしむ。尙、その中に俯仰し、旁に人なきが若し」とある。【六】鸜鵒裘　鸜鵒は鳥の名、その羽を集めて造つた皮衣。西京雜記に「司馬相如、著くるところの鸜鵒裘を以て、市人、楊昌に就いて酒を貰ふ」とある。【七】明月樓　吳均の詩に相思自有レ處、春風明月樓とあり、太平寰宇記に「江陵縣湘東苑に明月樓あり、顧之推の詩に云ふ、屢陪明月宴と、將軍思義の作るところ」とある。

【題義】この詩は、李白が雪に對して、一醉せし後、席上、賦して例の歷陽縣令王某に贈つたのである。

【詩意】この身ありとも、飛龍の鱗を犯してはならぬ、龍には顎の下に逆鱗があつて、それに觸るれば忽ち死んで仕舞ふ。この手ありとも、猛虎の鬚を編んではあらぬ、虎の鬚を編まうとすると、虎口を免れず、忽ち一口に食はれて仕舞ふ。されば、この世に在るものは、務めて禍難に罹らぬ樣に用心せねばならぬのが、それが、身を保ち生を全うする第一の要義である。むかし、汝南の市に於て、費長房は、壺公といふ仙人に遇つたが、その仙人は、髮すでに白く、そして、玉壺を以て家と爲し、平生、その中に隱れて住んで居たといふので、苟くも、かういふ風に仙術に達すれば、身を保ち、難を避ける上に於て、この上も無いことである。わが今歷陽に滯留して居るのは、丁度その樣な心持である。君は、古しへの王子猷の如く、平生竹を愛し、風さわさわと窓前の竹を搖かすを聞いては、大に興を催したといふので、われを迎へて、ともに杯中の綠酒に醉つた。その內に、寒氣いや增し、白雪は片片として飄り、さながら花を飛ばすが如く、人の見る目を亂すばかり。かの子猷が山陰に居て、夜雪に興を催したのと全く同じである。君が家には酒があるから、まことに心强く、おまけに、多くの佳客が一堂に集まり、樂方に酣なるとき、更に夜を卜し、燭を乘つて遊び、いつ宴を撤するといふことなく、頻りに笑ひ興じて居る。座中には、謝尙に比すべき人が居て、巧に鸜鵒の舞を爲し、又酒はいくらでも貯へてある處から、司馬相如をして、その著用せる鸜鵒裘を質に入れしめる心配もない。かくて、夜が明けたならば、淸晨の雪景さこそと思はれるから、棹を蔽いて、大江に浮び、千里を遠しとせず、今まで夢寐にも忘れざりし明月樓を尋ねて、心ゆくばかりの豪興を縱にしたいものである。

【餘論】起筆は極めて面白く、聊か緣遠い樣であるが、徐徐として本題に引き入れ、表面より降雪を言はず、偶然に降つて來て、その爲に興を添へたといふのは、極めて妙である。結二句は、更に一歩を拓開して、自ら遠神がある。

贈宣城宇文太守。兼呈崔侍御。

白若白鷺鮮。淸如淸唳蟬。

白は白鷺の鮮なるが若く、淸は淸唳の蟬の如し。

受氣有本性。不爲外物遷。
飲水箕山上。食雪首陽顚。
廻車避朝歌。掩口去盜泉。
岩嶤廣成子。倜儻魯仲連。
卓絕二公外。丹心無間然。
昔攀六龍飛。今作百鍊鉛。
懷恩欲報主。投佩向北燕。
彎弓綠弦開。滿月不憚堅。
閒騎駿馬獵。一射兩虎穿。
回旋若流光。轉背落雙鳶。
胡虜三嘆息。兼知五兵權。
鎗鎗突雲將。却掩我之妍。
多逢勦絕兒。先著祖生鞭。
據鞍空矍鑠。壯志竟誰宣。
蹉跎復來歸。憂恨坐相煎。
無風難破浪。失計長江邊。
危苦惜頹光。金波忽三圓。
時遊敬亭上。閒聽松風眠。
或弄宛溪月。虛舟信洄沿。
顏公二十萬。盡付酒家錢。
興發每取之。聊向醉中仙。
過此無一事。靜談秋水篇。
君從九卿來。水國有豐年。
魚鹽滿市井。布帛如雲煙。
下馬不作威。氷壺照清川。
霜眉邑中叟。皆美太守賢。

氣を受くる、本性あり、外物に遷されず。
水を飲む箕山の上、雪を食ふ首陽の顚。
車を廻して朝歌を避け、口を掩うて盜泉を去る。
岩嶤廣成子、倜儻魯仲連。
卓絕、二公の外、丹心、間然なし。
むかしは、六龍を攀ぢて飛び、今は百鍊の鉛となる。
恩を懷いて主に報せむと欲し、佩を投じて北燕に向ふ。
弓を彎けば、綠弦開き、滿月堅きを憚らず。
閒に駿馬に騎して獵し、一射、兩虎を穿つ。
回旋して流光の若く、背を轉じて雙鳶を落す。
胡虜三嘆息、兼ねて、五兵の權を知る。
鎗鎗たり雲を突くの將、却つて我の妍を掩ふ。
多く勦絕の兒に逢ひ、先づ祖生の鞭を著く。
鞍に據つて空しく矍鑠、壯士竟に誰にか宣べむ。
蹉跎復た來り歸り、憂恨坐して相煎す。
風なくして、浪を破り難し、計を失ふ長江の邊。
危苦、頹光を惜み、金波、忽ち三たび圓。
時に遊ぶ敬亭の上、閒に松風を聽いて眠る。
或は宛溪の月を弄し、虛舟、洄沿に任かす。
顏公二十萬、盡く付す酒家の錢。
興發して、每に之を取り、聊か向ふ醉中の仙。
これを過ぎて一事なく、靜に談ず秋水の篇。
君は、九卿に從つて來り、水國に豐年あり。
魚鹽、市井に滿ち、布帛、雲煙の如し。
馬を下つて、威を作さず、氷壺、清川を照らす。
霜眉邑中の叟、皆太守の賢を美す。

贈宣城宇文太守兼呈崔侍御

時時慰風俗。往往出東田。
竹馬數小兒。拜迎白鹿前。
含笑問使君。日晩可廻旋。
遂歸池上酌。掩抑清風絃。
曾標横浮雲。下撫謝朓肩。
樓高碧海出。樹古青蘿懸。
光祿紫霞杯。伊昔忝相傳。
良圖掃沙漠。別夢繞旌旃。
富貴日成疎。願言杳無緣。
登龍有直道。倚玉阻芳筵。
敢獻繞朝策。思同郭泰船。
何言一水淺。似隔九重天。
崔生何傲岸。縱酒復談玄。

時時、風俗を慰め、往往、東田に出づ。
竹馬、數小兒、拜して迎ふ白鹿の前。
笑を含んで、使君に問ふ、日晩れて廻旋すべしと。
遂に歸つて池上に酌み、掩抑す清風の絃。
曾標、浮雲に横はり、下に撫す謝朓の肩。
樓高くして、碧海に出で、樹古くして青蘿懸る。
光祿紫霞の杯、伊れ昔相傳を忝うす。
良圖、沙漠を掃ひ、別夢、旌旃を繞る。
富貴、日に疎を成し、願うて言に、杳として緣なし。
登龍、直道あり、玉に倚つて芳筵を阻む。
敢て繞朝の策を獻じ、思は郭泰の船に同じ。
何ぞ言はむ、一水淺く、九重の天を隔つるに似たり。
崔生、何ぞ傲岸なる、酒を縱にし、復た玄を談ず。

身爲名公子。英才若迅湍。
鳴鳳託高梧。凌風何翩翩。
安知慕羣客。彈劍拂秋蓮。

身は名公子たり、英才、迅湍するが若し。
鳴鳳、高梧に託し、風を凌いで何ぞ翩翩たる。
安んぞ知らむ羣客を慕ひ、劍を彈じて秋蓮を拂ふを。

【字解】【一】箕山　登封縣志に「箕山は、縣の東南二十五里に在り、高大四絶、その形、箕の如し。山北が黄城となす、許由隱れし處なり。又許由山と名づく。潁川、山より東流して去る。世に箕潁と稱す。虛巖幽壑、茂草平林、卽ち盛夏に當るも、亦た炎蒸の氣なし。旁なるを棄瓢巖となす。むかし、許由、箕潁の間に隱れ、手を以て水を掬して之を飲む。人、一瓢を遺り、以て飲を採るを得せしむ。飲訖つて、木上に挂け、風吹いて、歷歷琴あり。由、以て煩となし、これを巖下に棄つ、故に棄瓢巖と名づく。洗耳泉は、其西に在り」とある。【二】首陽　元和郡縣志に「首陽山は、河南府偃師縣の西北二十五里に在り」とあり、太平寰宇記に「首陽山は、偃師縣の西北三十五里に在り」とあり、阮籍の詩に步出上東門、北望首陽岑、下有三採薇士、上有三嘉樹林」とある、山上には夷齊の廟がある、但し、雪を食ふといふことは、何に本づいたか分らない。【三】遶朔歌　漢書に「邑を朝歌と號すれば、墨子車を廻す」とあつて晉灼曰く「紂、朝歌の音を作す、朝歌とは時ならざるなり」とある。【四】去盜泉　尸子に「孔子、勝母に至る、暮れたり、宿せず、盜泉に於て渴したり、飲まず、その名を惡むなり」とある。【五】廣成子、魯仲連、六龍　ともに屢ば前に見ゆ。【六】百鍊鉛　その柔なるを謂ふ。鉛、性、剛なる能はず、百鍊を經て益す柔なり」とある。【七】授佩　官を去ること。【八】落雙鳧　白帖に「後魏の托跋翰、太宗に從つて、白登の東北に登る、雙鳧あり、上に飛鳴す。太宗、左右に命じて之を射る、能く中るなし。鳧、旋飛、稍や高し。翰、因つて自ら之を射る、二箭、雙鳧を下す、太宗これを嘉し、御弓矢を賜うて之を旌し、雙して射鳧都尉といふ」とある。【九】五兵　戈殳戟酋矛夷矛をいふ。【一〇】組生縷　晉書に「劉琨、胡遂と友たり。遂の用ひらるるを聞き、親舊に書を與へて曰く、吾、戈に枕して旦を待ち、逆虜を梟せむことを志す、常に組生が吾に先つて縷を著けむことを恐る、と。その意氣、相期すること、かくの如し」とある。【一一】駿緤　馬援の故事、前に見ゆ。【一二】無風縠破浪　宋書に「宗慤曰く、願はくは、長風

に乗じて、萬里の浪を破らむ」とある。【二四】 金波　波にうつれる月光、穆穆として、金の波流するが如きをいふ。【二四】 宛溪　一統志に「宛溪は寧國府城の東に在り、源、鄱陽山より出づ、その流清澈」とある。【二五】 額公二十萬　宋書に「顏延年、尋陽に在り、陶潛と情款す、後、始安郡となり、經過日日潛に造り、往く每に、必ず酣飲、醉を致す。去るに臨んで、二萬錢を留めて潛に與ふ、潛、悉く酒家に送り、稍く就いて酒を取る」とある。【二六】 秋水　莊子の篇名。【二七】 九鼎　通典に據れば、唐では、太常、光祿、衛尉、宗正、太僕、大理、鴻臚、司農、太府を以て九鼎とした。【二八】 如雲煙　その多きをいふ。【二九】 竹馬數小兒　後漢書に「郭伋、并州の牧となる、はじめて至り、部を行つて、西河の美稷に至る。童兒、數百あり、各竹馬に騎し、道次に迎へ拜す。伋、兒曹に問ふ、何ぞ遠きよりして來る、と。對へて曰く、使君の到るを聞いて喜び、故に迎ふ、と。伋、これを辭謝す。事訖るに及び、諸兒復た送つて郭外に至る。問ふ、使君、何の日か當に還るべき、と。伋、謂ふ、別駕從事、日を計つて、當に之を告ぐべしと。部を行つて、すでに還り、期に先つこと一日、伋、信を諸兒に違ふが爲に、途に野亭に止まり、期を須つて入る」とある。【三〇】 拜迎白鹿前　藝文類聚に謝承の後漢書に曰く「鄭弘、臨淮太守となり、春を行る、兩白鹿あり、車に隨ひ、轂を夾んで行く。弘怪んで、主簿黃國に鹿の吉凶たるを問ふ、國、拜賀して曰く、聞く、三公の車繩、畫いて鹿を作す、と。明府當に宰相たるべし、と。後、弘、果して太尉となる」とある。【三一】 曾標　曾は層で、その標致の高きをいふ。【三二】 登龍　後漢書に「李膺、ひとり風藪を持し、聲名を以て自ら高うす。士、その容接を被るものあれば、名づけて、登龍門と爲す」とあつて、章懷太子の註に「魚を以て喩となすなり、龍門は、河水下るところの口、今の絳州龍門縣に在り、辛氏三秦記に曰く、河津一名龍門、水險にして通ぜず、魚鼈の屬、能く上るなし、江海の大魚、龍門の下に海集する數千、上るを得ず、上れば龍となるなり」とある。【三三】 倚玉　世說に「魏の明帝、后弟毛曾をして夏侯玄と共に坐せしむ。時人、夔龍、玉樹に倚るといふ」とある。【三四】 槐朝策　左傳に「士會、乃ち行いて朝を槐る、これに贈るに策を以てす」とあつて、杜預の註に「策は馬鞭、別に臨んで、これに馬鞭を授く」とある。【三五】 郭泰船　後漢書に「郭泰、字は林宗、洛陽に遊び、はじめて河南尹李膺を見る。膺、大に之を奇とし、途に相友とし善し。ここに於て、名、京師に震ふ。後、鄉里に歸る。衣冠諸儒、送つて河上に至る、車數千兩。林宗、唯だ李膺と舟を同じうして濟る。衆賞、これを望めば神仙の如し」とある。【三六】 九重天　楚辭に圜則九重、孰營三度之」とあつて、王逸の註に「言ふは、天圓にして九重、孰れか營度して之を知らむや」とある。【三七】 傲岸　傲然として氣岸ある貌。【三八】 縱酒　縱適して酒を飲む。【三九】 談玄　玄は老莊の道。【四〇】 逍遙　行き遊くして迫まざるの貌。【四一】 拂秋蓮　劍の燒刃の匂、芙蓉の新に水を出でしに比して云ふ。

【題　義】　宣城は、唐時の郡名で、江寧西道に隷し、卽ち後の寧國府である。この詩は、宣城の太守宇文某に寄せ、併せて、侍御崔某に呈し、例の如く、汲引の惠を垂れむことを囑望したのである。

【詩　意】　すべて白いといふ內でも、白鷺の羽毛の鮮なるが第一であるし、清いといふ內でも、蟬の清き聲が第一である。鷺の羽の白いのも、蟬の聲の清いのも、ともに天然であつて、人の本性も、亦た此の如く、天地より氣を受けて、そこで本性となるので、この本性てふものは、決して、外物の爲に遷されるものではない。われ李白に於ても、その通りで、狂狷の本性は、むかしも今も變りなく、終始一貫して居る。そこで、われは、古しへの許由を慕ひ、箕山に隱れて水を飲み、又夷齊の跡を尋ね、首陽山の頂に留まつて、薇の無い時分雪を食つて居た。又あくまで一身を潔くする爲に、邑を朝歌といへば、その時ならぬ名を厭うて、直に車を廻し、潁泉といふ名が物騷だといふので、如何に渴するも、決して其水を飲まない。それから、その行の高邁なることは、廣成子の如く、倜儻不羈なることは、魯仲連の如く、この二人の外に在つて、卓然獨絕、一片の丹心は、誰にも引けを取らぬ積りである。むかしは、天子の恩遇を得て、翰林に供奉したこともあるが、今は、放逐されて、江湖に放浪し、

專ら仙を學び、鉛汞を鍊つて、丹藥を造つて居る。しかし、當日天恩の渥かりしことを思うて、人主に報いむとし、官を去り、佩玉を投じて、安祿山の模樣を窺ふ爲に、北方の燕地に向つた。かくて、弓を引けば、綠色の弦を十分に開いて、さながら滿月の如く、その堅い位は、何とも思はず、ゆつたりと駿馬に跨つて、獵場に出かけると、物の見事に、一射して兩個の虎を射倒し、身を回して驅け出すその捷さは、流星の如く、そして、體を撚つた序に、二羽の鳶をさへ射落した。その手練の程、いかにも見事で偉いといふので、平生、騎射を生命とする胡人でさへも、三たび歎息する位。その上に五兵の用法をも知つて居るので、雲を突くやうな大男の胡將が之を妬み猜んで、兎角、わが才藝の美を掩ふ位。幽燕の地に於ける將帥どもは、いづれも、叛志を抱いて早晩誅滅すべきものあると見極め、われは、祖逖の如く、逸早く鞭を著けて、その始末をしたいと思つたが、不幸にして、意の如くならず、歲月むなしく過ぎて、次第に老い去り、かの馬援の如く、矍鑠として鞍に據るの意氣はあれども、折角の壯志を誰に告げむ由もなく、遂に零落して南に歸り、憂恨の念が互に相煎るやうであつた。されば、宗愨の雄志はありながら、長風の便なければ、萬里の浪を破るべき方法もなく、計策、意の如くならずして、長江の邊に流浪し、危苦の中に歲月の遷るを惜みつつ、江心の金波に涵される月の三たび圓なるを見、つまり、この宣城の地に滯留すること、三個月の久しきに及んだ。その間、時時敬亭山下に遊んで、松風の聲を聞きつつ、午眠を爲し、或は宛溪の月夜に舟を浮べて、流を溯つたりして、心の之くままに遊び樂んで居た。すると、顏之推の樣な人があつて、錢二十萬を贈つて呉れた故に、盡く酒屋に預けて飲代となし、興發する毎に、酒を取り寄せて、聊か醉中の仙と成つたやうな心持、この外には、一事もなく、唯だ靜に莊子の秋水篇を討論して、玄虛の道を講ずるだけで、凡て世すて人の樣な境涯に居た。すると、君は、九卿の高きより、太守となつて、來任せられ、會ま水國の豐年に當つたから、何から何まで饒富で、備はらざるものなく、魚鹽は市井に滿ち、布帛の多く簇れることは雲煙の如く、これでは、人民も衣食足つて、自然よく治まる譯である。君は著任して、馬を下つても、格別威勢を張るにも及ばず、心の清きことは、さながら、玉壺が清川を照らすが如く、もとより公平無私である。されば、眉毛の白き邑中の老人どもも、皆太守の賢明なることを稱美し、太平の風俗を見て、心を慰めむが爲に、時時東田に遊山に出かけるし、竹馬に乘れる數個の兒童も、太守の車に隨へる白鹿を迎へ、笑を含んで、貴下は、いつ又御還りに成るかといつて問ひ、丁度、古しへの郭伋のやうな有樣である。君は、公退の後、宅に歸り、池上に於て晩酌を催し、清風に向つて琴を彈じて心のどかに樂んで居られる。君の巍然たる風采は、浮雲に横はり、古しへの謝朓輩を眼下に見おろして、その頭を撫でる位。現に日夕倚るところの樓は、高く碧海の上に出で、庭上の樹木は、古くして青い蔦が綬のやうに垂れて居る。われは、早くより、君と交誼を結んだので、むかし都に於て、君が光祿卿たりしとき、一所に會飲して、紫霞の杯を頂戴したことがある。その後、

われは、良圖を實行し、一かどの功名を立てむが爲に、沙漠に近き北邊に向つたが、別後の夢、なほ君の居る處に飛んで、旌旗を繞つた。しかし、富貴を博するなどいふ希望は、日にまし疎になり、君を思うても、杳然として相見る便もない。君に拜謁するのは、龍門に登ると同じやうに、まことに、名譽なことであるが、唯だ直道を以てすべく、芳筵に於て、君に陪するは、秉瑕、玉に倚ると同じであるか、それも、今はとんと機會がない。別に臨んでも、馬の鞭を奉るにも及ばず、もし同舟に乘せて戴いたならば、さながら、當年の郭泰の樣に神仙と見誤られるであらう。君の居るところと此處とは、中間に一水を隔つるのみなれども、深くして、たやすくは渉れず、宛して九重の天を隔つる想がして、何時御目にかかることが出來やう、さつぱり分らない。侍御の崔生は、氣岸傲然として、ひとり羣を拔き、酒を縱にして、玄虛の道を談ずるを常とし、もとより、知名の公子で、英才ありながら、今以て轗軻不遇、行き難くして進み兼ねて居る。これも洵に御氣の毒な話。もし鳴鳳が高梧に止まり、やがて、風を凌いで翩翩と飛び上がる樣に、その託する處を得て、追追と立身したならば、どんなに愉快であらうか。然るに、今や、他人の出世を羨みつつ、秋さく蓮の匂にまがふ寶劍を拂うて彈じて居るのは、われと相去ること遠からずといひたい樣なので、定めて、同情を寄せて下さることであらう。

【餘論】この詩は、前半に於て、自己の人物并に經歷を敍し、君從二九卿一來より以下、宇文太守の治績に及び、光祿紫霞杯より以下、爾我の交情より、延いて刻下の有樣に及び、何言一水淺、似レ隔二九重天一の二句は、千萬無量の想がある。その下は、崔侍御の事を附說し、彼の不遇を傷むは、翻つて自ら傷む所以である。

贈宣城趙太守悅

宣城の趙太守悅に贈る

趙得二寶符一盛。山河功業存。
趙は寶符を得て盛に、山河、功業存す。

三千堂上客。出入擁平原。
三千堂上の客、出入に平原を擁す。

六國揚清風。英聲何喧喧。
六國、清風を揚げ、英聲、何ぞ喧喧たる。

大賢茂遠業。虎竹光南藩。
大賢、遠業茂く、虎竹、南藩に光る。

錯落千丈松。虬龍盤古根。
錯落たり千丈の松、虬龍、古根を盤す。

枝下無俗草。所レ植唯蘭蓀。
枝下、俗草なく、植うるところは唯だ蘭蓀。

憶在南陽時。始承國士恩。
憶ふ南陽に在るの時、はじめて國士の恩を承く。

公爲柱下史。脫レ繡歸田園。
公は柱下の史たり、繡を脫して、田園に歸る。

伊昔簪白筆。幽都逐遊魂。
伊れ昔、白筆を簪し、幽都に遊魂を逐ふ。

持斧冠三軍。霜清天北門。
差池宰兩邑。鶚立重飛翻。
焚香入蘭臺。起草多芳言。
夔龍一顧重。矯翼凌翔鵷。
赤縣揚雷聲。彊項聞至尊。
驚飈頹秀木。跡屈道彌敦。
出牧歷三郡。所居猛獸奔。
遷人同衞鶴。謬上懿公軒。
自笑東郭履。側慙狐白溫。
閒吟步竹石。精義忘朝昏。
顯頡成醜士。風雲何足論。
獼猴騎土牛。羸馬夾雙轅。
願借羲皇景。爲人照覆盆。

持斧を持して三軍に冠たり、霜は清し天の北門。
差池、兩邑に宰とし、鶚立して、飛翻を重んず。
香を焚いて、蘭臺に入り、起草、芳言多し。
夔龍、一顧重く、翼を矯げて、翔鵷を凌ぐ。
赤縣に雷聲を揚げ、彊項、至尊に聞こゆ。
驚飈、秀木を頹し、跡、屈して、道、彌よ敦し
出牧、三郡を歷、居るところ、猛獸奔る。
遷人、衞鶴に同じく、謬つて上る懿公の軒。
自ら笑ふ、東郭の履、側に慙づ、狐白の溫。
閒吟、竹石に步し、精義、朝昏を忘る。
顯頡、醜士となり、風雲、何ぞ論ずるに足らむ。
獼猴、土牛に騎し、羸馬、雙轅を夾む。
願はくは、羲皇の景を借りて、人の爲に覆盆を照らさむ。

溟海不震蕩。何由縱鵬鯤。
所期要津日。倜儻假騰騫。

溟海、震蕩せざれば、何に由つてか、鵬鯤を縱にせむ。
期するところは要津の日、倜儻假つて騰騫せむ。

【字解】【一】 趙得賚符盛　史記の趙世家に「簡子、諸子に告げて曰く、吾、賚符を常山の上に藏す、先づ得るものは賞あらむ、と。諸子驩せて常山の上に之く、求むれども得るところなし。母鄔還つて曰く、すでに符を得たり。簡子曰く、これを奏せよ。母鄔曰く、常山の上より代に臨む、代、取るべきなり、と。簡子、ここに於て、母鄔の賢を知り、以て太子となす。簡子卒す、母鄔代り立つ、これを襄子となす、遂に兵を興して代地を平らぐ」とある。【二】 三千堂上客　史記の平原君傳に「平原君勝は趙の諸公子なり、諸子中、勝、最も賢なり、賓客を喜ぶ、賓客蓋し至るもの、數千人。趙の惠文王及び孝成王に相たり、三たび相を去つて、三たび位に復し、東武城に封ぜらる」とある。【三】 虎竹　前に見ゆ、漢の時、郡守に與へた割符。【四】 南藩　諸侯は天子の藩蔽なるが故に藩といひ、宣城は南方なるが故に南藩と云つたのである。【五】 千丈松　世說に「庾子嵩、和嶠を目して、森森たること、千丈の松の如し、磊砢、節目ありと雖も、これを大廈に施さば棟梁の用あり」といつた。【六】 蘭蓀　香草の名、蓀はあやめ、菖蒲の類。詩意は、千丈の松を以て平原君に喩へ、蘭蓀を趙太守に喩へ、英豪の後、その子孫、自ら俊異多きを云つたのである。【七】 南陽　唐の南陽郡は鄧州で、山南東道に屬して居た。【八】 國士眄　戰國策に「豫讓曰く、智伯、國士を以て臣を遇す、臣、故に國士を以て之に報ず」とある。【九】 柱下史　史記に「張蒼は秦時御史となつて、柱下の方書を掌る」とあつて、索隱に「周秦、皆柱下史あり、御史を謂ふなり、掌るところ及び侍立する、恆に殿柱の下に在り、故と老聃周の柱下史たり」とある。【一〇】 脫繡　武帝の時に繡衣御史を置いた、その繡衣を脫したのである。【一一】 簪白筆　前に見ゆ、魏の殿中御史が白筆を簪し、陛に側ちて立つて居た。【一二】 幽都　淮南子に「南、交趾に至り、北、幽都に至る」とあつて、幽都の北方は匈奴である。太平寰宇記に「晉地道記に曰く、幽州は幽都に因つて、以て名と爲す」。山海經に「幽都の山あり、今北荒に列す」とあり、郭璞の爾雅註に「幽都は卽ち幽州、今の燕に在り」とある。【一三】 遊魂　北史に「勃寇魂を北に遊ばす」とある。【一四】 持斧　漢書に「武帝の末、軍旅數ば興し、郡國盜賊蠭起す、繡

衣御史為勝之、使して斧を持し、盜賊を逐捕し、軍興を以て事に從ひ、二千石以下を誅殺す」とある。【一五】差池　不揃なること、前後に同じ。【一六】鵠立　埤雅に「鵠、性、跱を好む、故に立つ毎に、更に處を移さず」とある。【一七】蘭臺　漢書に「御史中丞は、殿中蘭臺に在り、圖籍祕書を掌り、外、部刺史を督し、內、侍御史を領す」とあり、通典に「御史居るところの署、後漢以來、これを御史臺といひ、亦たこれを蘭臺寺といふ」とある。【一八】赤縣　胡三省の通鑑註に「唐制、凡そ都を置く、その郭下の縣を赤縣となし、餘縣を畿縣となす」とあり、通鑑辨誤に「唐の西京は長安萬年を以て赤縣となし、東都は河南洛陽を以て赤縣となす」とある。【一九】張項　後漢書に「董宣、洛陽の令たり、時に湖陽公主の蒼頭、白日に人を殺し、因つて主の家に匿る。吏、得る能はず。主の出行するに及びて、奴を以て驂乘たらしむ。宣、夏門亭に於て之を候し、奴を叱して車を下らしめ、因つて之を格殺す。主、卽ち宮に還つて帝に訴ふ。帝、宣をして、叩頭して主に謝せしむ。宣、兩手、地に據り、終に肯て俯せず。帝、因つて、張項令出でよ、と敕す」とある。【二〇】猛獸奔　後漢書に「劉昆、弘農の太守に遷る、これより先、崤厄の驛道、虎災多く、行旅通ぜず。昆、政を爲す三年、仁化大に行はれ、虎、皆子を負うて河を渡る」とある。【二一】衞鶴　左傳に「衞の懿公、鶴を好み、鶴に軒に乘ずるものあり」とある、軒は大夫の車。【二二】東郭履　史記に「東郭先生、久しく公車に待詔す、貧困飢寒、衣敝し、履穿からず。雪中に行くに、履、上あつて下なく、足盡く地を踐む。道中の人これを笑ふ。東郭先生、これに應へて曰く、誰か能く履、雪中を行くと。人をして之を視せしむれば、その上は履なり、その履の下處は乃ち人足に似たるものか」とある。【二三】狐白　狐白裘、狐腋の白い處のみを集めて造つた皮衣。【二四】羅綺騎土牛　三國志の註に「世語に曰く、司馬宣王、周泰を辟す、泰、頓りに考妣祖を喪ひ、九年喪に居る。宣王、留缺して之を待ち、三十六日に至り、擢んでて、新城太守と爲す。宣王、泰の爲に會し、尚書僕射をして、泰を調せしむ。君、羯を轉いて宰府に登る、三十六日、麾蓋を擁んでて、兵馬を守る、郡の乞兒小車に乘じ、一に何ぞ駛するや。泰曰く、まことに之あり、君は名公の子、少にして文采あり、故に吏職を守る。羅綺、土牛に騎す、又何ぞ遲きや」とある。【二五】羲皇景　日御を羲和といひ、遂に日その物をもいふ、羲皇は卽ち羲和。【二六】覆盆　抱朴子に「これ、三光、覆盆の內を照らさざるを貴むるなり」とある。【二七】溟海　列子に「終髮の北に溟海といふものあり、天池なり。魚あり、その廣さ數千里、その長さ稱ふ、その名を鯤と爲す。鳥あり、その名を鵬と爲す、翼、垂天の雲の若く、その體稱ふ。世、豈に此物あるを知らむや。大禹行いて之を見、伯益知つて之に名づけ、夷堅聞いて之を知る」とある。【二八】要津　要路津に同じ、任官して要職に居るものを謂ふ。亦た高足を遡め、要津に居れば、人の出入これに由るが如きが故に云ふ。【二九】雲　飛舉の喩。

【題義】この詩は、宣城太守趙悅といふ人に贈つたので、その旨意は、例の通りである。

【詩意】趙君は、戰國の時の趙の苗裔である。その趙は、襄子が寶符の謎を解き、やがて、代を併定して國勢愈よ盛になりしに始まり、その功業は、山河と共に長しへに存して居る。次に、平原君は、堂上に三千人の食客を養ひ、出入の際は、常に此等の人人に擁せられ、六國の間に於て清風を揚げ、その英名は、囂しきまで世に喧傳した。今、君の樣な大賢が出て來て、祖先の遺業を一層廓張し、虎竹の符を分ち、刺史となつて、南方の藩屏を輝かすことになつた。たとへば、錯落たる千丈の松の古い根は盤屈して、さながら虬龍の如く、そして、木の下には俗草なく、唯だ、蘭やあやめなどを植ゑた樣なもので、英豪の子孫は、自然俊異の人のみである。むかし、われ南陽に在りし時、はじめて、君と相知り、國士を以て待遇された。その內に、君は古しへの柱下史に相當する侍御史となられたが、未だ幾ならざるに、繡衣を脫ぎ棄てて、田園に歸られた。その侍御史たる間は、白筆を簪して、殿陛の下に立ち、遠慮なく不法の者どもを書き留め、一たび外に出づれば、北方幽燕の地に向つて寇賊どもを逐ひ、又斧鉞を持し、三軍を佐けて、郡國の盜賊を逐捕し、その勢威の凜凜たることは、北門

の天に霜が降つて、その氣が自然冷かなるが如くであつた。それから、前後して、兩邑の長官となり、かの鸚が凝然亭立して、一朝志を得れば、飛翻するが如く、やがて、御史中丞となり、蘭臺の香を焚いて居る處に出仕する身分となり、その起草に係る詔勅には、芳言多く、まことに、この上もない出來ばえであつた。かくて、古しへの夔龍に比すべき才能を以て、天子の一顧を得、翼を揚げて飛び翔る鵷鷺の列を凌ぎ、追追と昇進し、雷の如き名聲は、都下に轟きわたり、性來強項にして正義の爲には決して屈しないといふ評判は、天子の御耳にも入つた位。そこで、衆人の妬を受け、たとへば、秀でたる木が旋風に摧かるる如く、いつしか、位を退くことになり、その跡は屈したが、その道は愈よ敦く、これを知れるものは、愈よ尊敬して措かなかつた。そこで、外に出されて地方長官となり、三郡に歴任したが、到る處、治化よく行はれ、今まで害を爲して居た虎でさへも、その子を引き具して、他領へ移るといふ位、今日、君は宣城の太守として、令名日に高く、まことに結構な事である。これに反して、われは、今遷謫の身の上で、むかし、天子の眷顧を得たのは、たとへば、鶴が衞の懿公に愛せられて、大夫の車に上つたやうなものであつたが、目下は甚だ零落し、東郭先生が雪中を歩くに、履の裏がなく、ちかに冷たい雪を踏んだといふやうなもので、温き狐白裘を著て居る人に對しては、まことに愧ぢ入るばかり。仍つて、事なきままに閑行して、竹石の間に吟じ、玄虛の義理を窮め、仙術の稽古をして、朝夕を忘れ、顏色憔悴して、見苦しいものに成り下り、風雲に御して功名を立てるなどいふことは、とても、望んでも出來ぬことに成つて仕舞ひ、猿が土牛に乘つて歩くことは、まことに遲いといふ譬への通り、又疲れたる馬は、二つの轅の間に夾まれて、車を牽くことに成つたものの、どうして、勢よく驅け出すことが出來やう。時の不利とはいひながら、折角の才能を沒して、世に用ひられざりしは、まことに情ないやうな始末。これでは、成らぬといふものの、ひとりで、力んで見たところで仕方がないから、折入つて、君に御願ひする次第であるが、願はくは、太陽の光を借りて、覆つた盆の下に蹋んで居る者を照らして、今一度世間に出る樣にして貰ひたい。かの北溟に住む鯤が化して鵬となり、そして、南を圖るといふのも、海の震蕩することを要するので、然らざれば、到底、その勢を鼓舞することが出來ない。自分には、鯤鵬の天資がありながら、刻下弱り切つて居るから、君にして、海を震蕩して呉れたならば、はじめて、その變化を極めることも出來やう。期するところは、要路の津に登り、倜儻の才略を展べて、心ゆくばかりに飛騰翺翔をして見たいので、それに就いては、是非有力者の助がなくてはならず、そこで、折入つて、君に御願ひをするのである。

【餘論】この詩は、第一に趙悅の先祖に筆を著け、まことに堂堂たる勢がある。以下、所〻居猛獸奔に至るまでは、趙太守の閲歴で、數次の升沈を極めて簡切に敍し、すこしも、重複せぬ處は、さすがに手際である。その間に、憶在二南陽一時の二句を挾んで、自己との交情を敍し、後段の伏線としたのは、

まことに寸分のゆるみもなく、極めて細心の工夫に本づいたものである。遷人同二衞鶴一より以下、專ら自分の落魄を敍し、兼ねて、汲引の惠を囑したのであるが、皆故事を以て之を行つた故に、毫も暴露せず、含蓄もあつて、一段の趣がある。この詩は、李白の晩年の作で、宣城、歷陽、二郡の間を往來した頃であらうかと思はれる。この時、李白は、すでに六十を過ぎて居たに拘はらず、なほ一片の雄心を存し、何か一つ仕出來さうと。斷えず考へて居たので、それに就けても、彼の人物の極めて驚異なることは、容易に推測される。

贈從弟宣州長史昭

從弟宣州の長史昭に贈る

淮南望江南。千里碧山對。
淮南より江南を望めば、千里碧山對す。

我行倦過之。半落青天外。
我が行、倦んで之に過ぐ、半ば落つ青天の外。

宗英佐雄郡。水陸相控帶。
宗英、雄郡に佐たり、水陸、相控帶す。

長川豁中流。千里瀉吳會。
長川、中流豁たり、千里、吳會に瀉ぐ。

君心亦如此。包納無小大。
君が心、亦た此の如く、包納、小大なし。

搖筆起風霜。推誠結仁愛。
筆を搖かせば風霜を起し、誠を推して仁愛を結ぶ。

訟庭垂桃李。賓館羅軒蓋。
訟庭、桃李を垂れ、賓館、軒蓋を羅ぬ。

何意蒼梧雲。飄然忽相會。
何ぞ意はむ蒼梧の雲、飄然として忽ち相會するを。

才將聖不偶。命與時俱背。
才は聖と偶せず、命は時と俱に背く。

獨立山海間。空老聖明代。
獨立す山海の間、空しく老ゆ聖明の代。

知音不易得。撫劍增感慨。
知音得易からず、劍を撫して感慨を增す。

當結九萬期。中途莫先退。
當に九萬の期を結ぶべし、中途に、先づ退く莫れ。

【字解】【一】淮南望江南　王琦の解に「唐時の淮南道、江南道は、皆古しへの揚州の境、中に一江を隔つ。江の北を淮南となし、江の南を江南となす」とある。【二】宗英　宗室中の英豪、漢書に「河間は賢明、禮樂是れ修し、漢の宗英たり」とある。【三】吳會　王琦の解に「三國志、孫賁傳、時に、策、すでに吳會二郡を平らぐと。又朱桓傳、吳會二郡を部伍せしむと。知る、吳會とは是れ吳郡と會稽となるを。然れども、この詩に稱するところの吳會は、專ら吳地を指して言ふ。蓋し、春秋の時に在つて吳國たり、秦漢に在つて會稽郡たり、後又分つて吳郡となし、合せて吳會といふなり」とある。【四】蒼梧雲　歸藏啓筮に「白雲あり、蒼梧より出づ」とある。【五】九萬期　莊子に「扶搖に搏つて、羊角して上るもの九萬里」とある。

【題義】宣州は、唐では上州で、上州の長史は從五品の官であつた。この詩は、李白が、その從弟たる宣州の長史李昭といふ人に贈つたのである。

【詩意】淮南より江南を望めば、その間に一水を隔つるのみで、千里も續く碧山は、近く相對して居

る。われ今行いて之を過ぎ盡し、やがて、青天の外と思はるる處まで往つた。この二郡は、形勝雄偉の地で、水陸が互に相控帶し、そして、今や、宗室中、英豪を以て稱せらるる御方が之を守つて居られる。その間を流るる長江は、中流甚だ開け、やがて東に流れて、吳地に注ぐのである。君の心も、この長江の水の如く、小大の別なく、如何なるものでも包納せられ、そして、筆を動かせば、風霜の氣を起すべく、誠心を推せば、人に對して、仁愛を結ぶことも出來る。されば、訴訟の庭たる白洲に於ても、桃李が花を開いて、その下、自ら蹊を爲し、賓館に於ては、立派な車や天蓋を列ね、王公貴人輩が頻りに來訪せられる。われは、蒼梧より出づる白雲の如く、飄然として、この地に來り、料らずも、ここで君に遇ふことが出來た。元來、才と聖とは、兎角一處にならず、命と時とは、互に背くもので、われは、山海の間に獨立して、同行の友もなく、この聖明の御世に際して、むなしく、老い行くのみである。世に知音といふものは、容易に求むべきものでなく、これを思へば、劍を撫して、感慨を增すばかり。かの大鵬が九萬里を飛ぶといふやうに、我が志を遂ぐる日を豫め期して努力すべく、中途で先づ退くといふやうなことは、決して爲さぬ積りである。

【餘論】 前半は、李昭の人物を主とし、後半は、自己の窮狀に及び、何意蒼梧雲の二句が、その間の關鍵となつて居る。結末二句は、自奮の意を觀るべく、そして、暗に李昭に囑望して居るのである。

於五松山贈南陵常贊府

五松山に於て、南陵常贊府に贈る

爲草當作蘭。爲木當作松。
蘭幽香風遠。松寒不改容。
松蘭相因依。蕭艾徒丰茸。
雞與鸞並食。鸞與鸞同枝。
揀珠去沙礫。但有珠相隨。
遠客投名賢。眞堪寫懷抱。
若惜方寸心。待誰可傾倒。
虞卿棄趙相。便與魏齊行。
海上五百人。同日死田橫。
當時不好賢。豈傳千古名。
願君同心人。於我少留情。
寂寂還寂寂。出門迷所適。

草と爲る當に蘭と作るべく、木と爲る當に松と作るべし。
蘭は幽にして香風遠く、松は寒くして容を改めず。
松蘭相因依し、蕭艾徒に丰茸。
雞は鸞と並に食ひ、鸞は鸞と枝を同じうす。
珠を揀んで、沙礫を去れば、但だ珠の相隨ふあり。
遠客、名賢に投じ、眞に懷抱を寫すに堪へたり。
もし方寸の心を惜まば、誰を待つて傾倒すべき。
虞卿は、趙相を棄て、便ち魏齊と行く。
海上の五百人、同日、田橫に死す。
當時、賢を好まずんば、豈に千古の名を傳へむや。
願はくは、君、同心の人、我に於て少しく情を留めよ。
寂寂還た寂寂、門を出でて、適くところに迷ふ。

長鋏歸來乎。秋風思歸客。

長鋏歸り來らむか、秋風、歸るを思ふの客。

【字解】【一】 丰茸　衆飾の貌。【二】 沙礫　礫は小石。【三】 虞卿棄趙相、便與魏齊行　史記の范雎傳に「秦の昭王、趙王に書を贈つて曰く、范君の仇魏齊、平原君の家に在り、王、人をして疾く其頭を持ち來らしめよ。然らずんば、吾、兵を擧げて、趙を伐たむと。趙の孝成王、乃ち卒を發して、平原君の家を圍むこと急なり。魏齊、夜亡げ出でて、趙相虞卿を見る。虞卿、趙王の終に說くべからざるを度り、乃ち其相印を解いて、魏齊と亡ぐ」とある。【四】 田橫　史記の田儋傳に「漢、項籍を滅し、立つて皇帝となる。田橫、その僚屬五百餘人と、海に入つて島中に居る。高帝、これを聞き、使をして、田橫の罪を赦して、之を召さしむ。橫、乃ち其客二人と傳に乘じ、洛陽に詣らむとし、未だ至らざる三十里、尸鄉の廐置に至つて自刎し、客をして、その頭を奉じ、使者に從つて、驛せて之を奏せしむ。高帝、これが爲に流涕し、その二客を拜して郎尉となし、卒二千人を發し、王者の禮を以て田橫を葬る。すでに葬るや、二客、その墳旁に孔を穿ち、皆自刎し、下、これに從ふ。高帝、これを聞き、乃ち大に驚き以へらく、田橫の客、皆賢なり、と。使をして、之を召さしむ。至れば、田橫の死を聞いて、亦た皆自殺す。ここに於て、田橫の能く士を得たるを知るなり」とある。【五】 長鋏歸來乎　戰國策に「齊人、馮煖といふものあり、貧乏にして、自ら存する能はず。人をして孟嘗君に屬せしめ、願はくは、門下に寄食せむといふ。左右、君の之を賤むを以て、食はすに菽具を以てす。居ること頃らくあつて、柱に倚つて其劍を彈じ、歌うて曰く、長鋏歸來乎、食無魚、と。孟嘗君曰く、これに食し、門下の客に比せよと。居ること須らくあつて、復た其鋏を彈じ、歌うて曰く、長鋏歸來乎、出無車、と。孟嘗君曰く、これが駕を爲つて、門下の車客に比せよと。後頃くあつて、復た其劍鋏を彈じ、歌うて曰く、長鋏歸來乎、無以爲家、と。孟嘗君、人をして、その食用を供せしめ、乏しきところなし」とある。

【題義】 南陵縣は、唐時江南西道の宣州に隸して居た。一統志に「五松山は、池州銅陵縣南五里に在り。銅陵は、唐に在つて、南陵縣の銅官治たり。南唐の時、はじめて、分つて銅陵縣を置き、昇州に隸す。宋、改めて、池州に隸す」とある。贊府は、容齋隨筆に「唐人、縣丞を呼んで贊府と爲す」とある。すると、この詩は、李白が五松山に遊んだ時、賦して、その地の縣丞常某に贈つたのである。

【詩意】 草となつては、當に蘭となるべく、木となつては、常に松に成つて居たい。何となれば、蘭は幽趣に富み、その香氣は風に入つて、遠くまでも匂ふからであるし、松は寒げに見ゆるも、霜雪の中に在つて、その容を改めぬからで、草では蘭、木では松といへば、各その主位に居て、超然羣を拔いて居るからである。かくて、松と蘭とは、互に依り添ひ、よもぎなどの雜草が勝手次第に茂りはびこるのを藐視して居る。その松と蘭との相竝ぶ有樣は、たとへば、雞と雞とが竝び食し、鸞と鸞とが枝を同じうしてゐるやうなもので、つまり、同類の好みがあるからである。それから、珠を擇り出すには、沙礫を振ひ去るを要するので、さうすると、珠ある上にも、又ぞろ、珠が相隨つて來るので、これも同類の好みである。今われ遠客の身を以て、足下の如き名賢の處に投宿したのは、まことに、稀に見るところの遇合で、その心中に思ふことを寫し出して示すことが出來る。もし、方寸の心を惜んで、容易に打解けて與れなかつたならば、われは、今さら誰に向つて傾倒して敬意を表すべきか。むかし、虞卿は、趙の宰相の位を棄てて、魏齊とともに間行したし、海島に殘つて居た五百人の者どもは、田橫の死を聞いて、同じ日に自殺して仕舞つた。それ等は、皆賢を好んで、その身命を投じたるに因つて、千古の名を留めたのである。君、すでに我と同心の人である以上、願はくは、われに對

して、少しく情を留め、剡下の窮狀を憐んで呉れろ。寂寂又寂寂、われは、今門を出でて、何處へ往かうかと、心に迷つて居る位。ここに於て、古しへの馮煖の如く、劍を彈じて、長鋏歸りなむと歌ひつつ、秋風の裏に、故郷に歸らうと思つて居る。君にして、どうかして呉れぬ上は、この地を立ち去る外はない。

【餘論】起首は古謠諺を學びて、極めて高古に出來て居るし、以下、これを詳說し、願君同心人以下入句に於て、その實情を盡して居る。

自梁園至敬亭山見會公談陵陽山水兼期同游因有此贈

梁園より敬亭山に至り、會公に見えて、陵陽の山水を談じ、兼ねて同游を期す、因つて此贈有り

我隨秋風來。瑤草恐衰歇。我、秋風に隨つて來り、瑤草、衰歇を恐る。
中途寡名山。安得弄雲月。中途に名山寡く、安んぞ雲月を弄するを得む。
渡江如昨日。黃葉向人飛。江を渡る、昨日の如し、黃葉、人に向つて飛ぶ。

敬亭愜素尙。弭棹流清輝。敬亭、素尙に愜ひ、棹を弭めて、清輝を流す。
冰谷明且秀。陵巒抱江城。冰谷明且つ秀、陵巒、江城を抱く。
粲粲吳與史。衣冠耀天京。粲粲たり吳と史と、衣冠、天京に耀く。
水國饒英奇。潛光臥幽草。水國、英奇饒し、光を潛めて幽草に臥す。
會公眞名僧。所在卽爲寶。會公、眞に名僧、所在、卽ち寶と爲す。
開堂振白拂。高論橫青雲。堂を開いて白拂を振ひ、高論、青雲に橫ふ。
雪山掃粉壁。墨客多新文。雪山、粉壁を拂ひ、墨客、新文多し。
爲余話幽棲。且述陵陽美。余の爲に幽棲を話し、且つ述ぶ陵陽の美。
天開白龍潭。月映清秋水。天は開く白龍潭、月は映ず清秋の水。
黃山望石柱。突兀誰開張。黃山、石柱を望み、突兀、誰か開張せむ。
黃鶴久不來。子安在蒼茫。黃鶴、久しく來らず、子安、蒼茫に在り。
東南焉可窮。山鳥飛絕處。東南、焉んぞ窮むべけむや、山鳥飛絕の處。
稠疊千萬峰。相連入雲去。稠疊千萬峰、相連つて雲に入つて去る。

聞〻此期〻振策。歸來空閉〻關。
相思如〻明月〻。可〻望不〻可〻攀。
何當移〻白足〻。早晩凌〻蒼山。
且寄一書札〻。令〻予解〻愁顔〻。

【字解】【一】弭棹　弭は止める。【二】吳興史　吳史兩銓ないふ。【三】卽爲寶　十六國春秋に「佛圖澄は、天竺の人なり、本銓席氏。少にして出家し、清眞、學を務め、經數百萬言を誦す。石虎、心を傾けて澄に事ふ。乃ち書を下して曰く、和尙は國の大寶、榮爵加へず、高祿受けず、衆祿廻るに匪ず、何を以て德を旌さむ」とある。【四】白拂　白い毛の拂子、法華經に「手に白拂を執つて、左右に侍立す」とある。【五】雪山掃粉壁　雪山を白壁の上に畫きしないふ、會公は畫が上手であつたと見える。【六】墨客多新文　輪囷の人が、多く新文を以て之を讚美せしないふ。【七】白龍潭　楊齊賢の解に「白龍潭は、宣州に在り、世傳ふ、寶子明、官を棄て、道を學び、白龍を釣り得て、これを此に放つ、因つて白龍潭と名づく」とある。【八】黃山　江南通志に「黃山は、徽州歙縣の西北二百八十里、寧國府太平縣南三十里に在り。山は二郡の界に當り、高さ一千三百七十丈、盤亙三百里、舊名黟山。唐の天寶間、敕して今の名に改む、圖經に稱して、軒轅樓眞の所と爲すが故なり。上に古木靈藥多し、その泉、香美清溫、冬夏變ぜず、沐浴して之を飲めば、百疾皆癒ゆ、三十六峰、三十六泉あり」とある。【九】石柱　寧國府旌德縣西六十里に在り、雙石挺立して、一巨石これを承け、釣子尖と名づく。【一〇】黃鶴久不來、子安在蒼茫　列仙傳に「陵陽子明は、涇鄉の人なり、好んで、魚を旋溪に釣る。白龍を釣り得たり。子明懼れ、釣を解き、拜して之を放ち、後、白魚を得たり、腹中に書あり、子明に服食の法を敎ふ。子明、遂に黃山に上り、五石脂を采り、水を沸して之を服すること三年、龍來り迎へ、去つて、陵陽の山上に止まること百餘年、山は地を去ること千餘丈、大に山下の人を呼んで、山中に上らしめ、告げて言ふ、溪中、子安、當に來り、子明の釣車在りや否やを問ふべし、と。後二十餘年、子安死す、人、取つて石山の下に葬る、黃鶴あり、來りてその塚邊の樹に棲み、鳴いて子安を呼ぶといふ」とある。【一一】振策　鞭を擧げる。【一二】白足　法苑球林に「前魏太武の時、沙門曇始、甚だ神異あり、常坐して臥せざること五十餘年、足に履を踏まず、泥猶中を跣行するも、足を擧ぐれば便ち淨く、色白きこと面の如し、俗、呼んで白足阿練といふ」とある。【一三】書札　古詩十九首に客從遠方來、遺我一書札とあつて、張銑の註に「札は筆なり」とあるが、王琦は之を駁し「顏師古の漢書註、札は木簡の薄小なるものなり、と。古時未だ紙あらず、故に札に書す、以て筆と爲すものは、恐らくは未だ是ならず」といつた。

【題義】一統志に「梁園は、開封府城の東南に在り、一名梁苑、漢の梁の孝王遊賞の地」とある。敬亭山は、寧國府城の北十里に在る。陵陽は江南通志に「陵陽山は、石埭縣の西北より迤邐して來り、三峰連亙、東、宣州に接す、西の二峰の下に黃鶴池あり。むかし、寶子明、鶴に跨つて、此に飛昇す。丹池あり、卽ち子明、丹を鍊る處」とある。會公は、名僧といふが、その傳記等は、分らない。この詩は、李白が長安を去りし後、梁園より南して、敬亭山に至り、そこで會公といふ坊さんに逢つて、陵陽の山水を談じ、同遊の約束を爲せしに就いて、後に賦して贈つたのである。

【詩意】われは、秋風に隨つて、梁園より南に向ひ、折から、瑤草の枯れはつるを恐れ、忙しげに歩き廻はつたが、敬亭に至るまでの間、名山といふべきもの少く、どうして、雲月を弄することが出來やうか。かくて、江を渡つたのは、昨日の樣であるが、秋は最早末になつて、黃葉が人に向つて飛んだ。敬亭山は、さすがに、平生の好に協つたので、舟の棹を止めて眺むれば、清輝流るるばかり。その山の氷れる谷は、明且つ秀であるし、山の餘脈は、丘陵岡巒となつて、江城を抱いて居る。ここに、

異だの、史だのいふ名族があつて、衣冠は耀いて天京を現出するばかり。元來、水國には、英奇の人物が多く、しかも光を潛めて、幽草に臥して、世間から隱れて居るが、わが會公も、その一人で、まことに名僧たる天資を備へ、到る處で、國の大寶と稱せられて居る。かくて、會公が、堂を開いて壇に登り、白い拂子を振つて說法をすれば、高論は靑雲に橫はるかと疑はれ、おまけに、畫が上手で、白壁に雪山を畫いたこともある。そこで、翰墨の客は、爭つて、新に文章を作つて、これを讚美した。その會公が予の爲に幽棲の有樣を話し、且つ陵陽山水の美を述べた。その話に據ると、白龍潭は、天工に成り、淸秋の頃、月が潭水にうつる景色は、えもいはず、黃山より眺むれば、石柱山は、突兀として、誰が開張したかと思はれる位。黃鶴久しく來らず、子安は、如何にしたか、その消息も分らない。それから、東南の方は、鳥さへも飛ばぬ位で、その險絕せること、到底探檢も出來ず、千萬峰が重り合ひ、相連つて、半は雲の中に隱れて居る。われ既に此話を聞き、鞭を擧げて、其地に遊ばむことを期せしものから、時機未だ至らず、歸り來つて、空しく門を閉ぢて高臥して居る。君を思へば、明月の如く、望むことは出來るが、攀づることは出來ない。君は、白足を移し、いつか蒼山を凌いで、遊賞を縱にせられることであらうが、さうしたならば、一片の手紙を寄せて、その模樣を詳しく報知し、われをして、愁顏を解かしめられよ。われも、亦た遠からず、出かけて、きつと前日の約束を實行する。

【餘論】起八句は、自分が敬亭に至りしまでの經過、次の八句は、敬亭の風光及び人物、次の六句は會公、天開白龍潭より以下十句は、會公の語り聞かせし陵陽の風光、結八句は、會公に對する相思を述べたので、次第に遞送し、章法は太だ整つて居る。かういふ詩は、李白の本領のあるところで、敍景の一段の如き、簡潔ではあるが、極めて餘情があつて、一讀、人をして、神往の想に勝へざらしめるものである。

贈友人　三首

友人に贈る　三首

蘭生不當戶。別是閒庭草。
夙被霜露欺。紅榮已先老。
謬接瑤華枝。結根君王池。
顧無馨香美。叨沐淸風吹。
餘芳若可佩。卒歲長相隨。

蘭、生じて戶に當らざれば、別に是れ閒庭の草。
夙に霜露に欺かれ、紅榮すでに先づ老ゆ。
謬つて瑤華の枝に接し、根を君王の池に結ぶ。
顧るに、馨香の美なく、叨に淸風の吹くに沐す。
餘芳、若し佩ぶべくんば、歲を卒るまで長しへに相隨はむ。

【字解】【一】欺　壓倒する。【二】紅榮　陳琳の詩に喜木凋二綠葉一、芳草殘二紅榮一とあつて、秋草の花をいふ。【三】瑤華　楚辭に折二疎麻兮瑤華一とあつて、王逸の註に「瑤華は玉華なり」とある。【四】結根　古詩十九首に冉冉孤生竹、結二根泰山阿一とある。【五】

卒歲　史記に「優なるかな、游なるかな、維れ以て歳を卒ふ」とある。

【題義】この三首は、友人に寄せて、純ら自己の感懷を述べたのである。

【詩意】蘭は、折角生えても、人に愛でられ、鉢にでも植ゑられて、戸の側に飾つて置かぬ上は、唯だ閑庭の草たるに過ぎず、早くより、霜露に痛められて、花が咲いても、先づて凋んで仕舞ふ。しかるに、何たる幸か、その蘭が瑤華の仙木に接近して、根を君王の池の邊に結んだ。されば、馨香の美なるものなくとも、瑤樹の清風の吹くを受けて、のびのびして居る。かくて、蘭は、日に増し、盛に育つであらうが、その餘芳、もし佩ぶるに堪へたらば、われも、亦た優游して、歳を卒へ、長く之と相隨ふであらう。

【餘論】謬接二瑤華枝一、結二根君王池一の二句を觀るに、この詩は、李白が翰林に供奉して居た時分の作で、もし天恩を辱うするを得ば、いつまでも、かくてありたいといふ意味を述べたものと思はれる。

袖中趙七首。買自徐夫人。
玉匣閉霜雪。經燕復歷秦。
其事竟不捷。淪落歸沙塵。

袖中の趙七首、徐夫人より買ふ。
玉匣、霜雪を閉ぢ、燕を經、復秦を歴たり。
その事、竟に捷たず、淪落して沙塵に歸す。

持此願投贈。與君同歲寒。
荆卿一去後。壯士多摧殘。
長號易水上。爲我揚波瀾。
鑿井當及泉。張帆當濟川。
廉夫唯重義。駿馬不勞鞭。
人生貴相知。何必金與錢。

これを持して、願はくは投贈し、君と歳寒を同じうせむ。
荆卿、一たび去りし後、壯士多くは摧殘。
長號す易水の上、我が爲に波瀾を揚ぐ。
井を鑿たば、當に泉に及ぶべく、帆を張らば、當に川を濟るべし。
廉夫、唯だ義を重んじ、駿馬は、鞭を勞せず。
人生、相知るを貴ぶ、何ぞ必ずしも金と錢とならむや。

【字解】【一】趙七首　史記の刺客列傳に「太子、讓め天下の利七首を求め、趙人徐夫人の七首を得たり、これを百金に取り、乃ち藥うて荆卿を遣る」とあつて、索隱に「徐は姓、夫人は名、男子を謂ふなり」とある。なほ荆軻の事は、すでに屢ば前に見えて居た。【二】閉霜雪　刀の善く磨いて、光り輝く狀を形容して云ふ。西京雜記に「高祖が白蛇を斬りし劍、刃上、常に霜雪の如し」とある。

【詩意】荆軻が袖中に匿したる七首は、もと趙人徐夫人の製作に係り、世にも稀なる業物であつて、これを玉匣の内に收めて置くと、さながら、霜雪を閉ぢ置きたるが如く、そして、荆軻は之を持つて、燕を經、又秦を歴、やがて咸陽の都に乗り込んだのである。しかも、不幸にして、荆軻は、始皇を刺さうといふ夙志を遂げずして殺されて仕舞ひ、その七首も、淪落して、沙塵に埋沒して仕舞つた。そ

の匕首を、今願はくは君に贈り、そして、君と急難を同じうして、生死の間に出入したいと思ふ。おもへば、荊卿一たび去りし後、壯士は多く殺されて仕舞ひ、仍つて、荊卿の遺蹟たる易水を過ぐれば、長く號哭し、その聲は波瀾を揚ぐるばかり。昔人すでに歿して、今又身命を擲つて義に赴くやうなものは、滅多に無い。今夫れ、井を掘らば、水の出る處まで掘り下げねばならぬし、帆を張つた上は、勢に乘じて川を渡るべく、如何なる事でも、その結末まで、遣り遂げねば、何にもならない。廉士は、唯だ義を重んじ、これが爲には、命を惜まず、何時どこへでも驅け出すことは、駿馬が鞭を勞せざると一般である。人生は相知るを貴び、つまり、肝膽相照らし、互に義の爲に命を惜まぬといふ上は、金錢などは、何の必要もない。そこで、今、君に向つて、若し有つたならば徐夫人の匕首を贈り、そして、義俠を旨とする我が心の表證としたいのである。

【餘論】この詩は、專ら義俠を重んずる李白の半面の性格を遺憾なく顯はしたもので、或は、壯時の作であつたも知れぬ。

慢世薄功業。非無胸中畫。
謔浪萬古賢。以爲兒童劇。
立產如廣費。匡君懷長策。

世を慢つて功業を薄しとし、胸中の畫なきに非ず。
謔浪、萬古の賢、以て兒童の劇と爲す。
產を立つる、廣費の如く、君を匡すに、長策を懷く。

但苦山北寒。誰知道南宅。
歲酒上逐風。霜鬢兩邊白。
蜀主思孔明。晉家望安石。
時來列五鼎。談笑期一擲。
虎伏被胡塵。漁歌遊海濱。
弊裘恥妻嫂。長劍託交親。
夫子秉家義。羣公難與鄰。
莫持西江水。空許東溟臣。
他日青雲去。黃金報主人。

但だ山北の寒に苦む、誰か知らむ道南の宅。
歲酒上つて風を逐ひ、霜鬢、兩邊に白し。
蜀主、孔明を思ひ、晉家、安石を望む。
時來つて五鼎を列し、談笑、一擲を期す。
虎伏、胡塵を被り、漁歌、海濱に遊ぶ。
弊裘、妻嫂に恥ぢ、長劍、交親に託す。
夫子、家義を秉り、羣公、與に鄰たり難し。
西江の水を持して、空しく東溟の臣に許す莫れ。
他日、青雲に去らば、黃金、主人に報せむ。

【字解】【一】慢世　世を侮る。嵇康の司馬相如賛に「長卿、世を慢り、禮を棄て自放」とある。【二】謔浪　詩の國風に、「謔浪笑敖」とあつて、ふざけ戲れる意。【三】道南宅　三國志に「孫策、周瑜と同年、ひとり相友とし善し。瑜、道南の大宅を推して、以て策を舍せしめ、堂に升つて母を拜し、有無通共す」とある。【四】上逐風　梁元帝の詩に「灑壁下濺石、猿鳴上逐風」とあり、又、長條乘拂地、輕花上逐風とあるに本づく。【五】孔明、安石　ともに前に見ゆ。【六】五鼎　劉孝標の辨命論に「東閣を開き、五鼎を列す」とあり、漢書晉義に「孟晏曰く、五鼎の食とは牛羊豕魚臐なり、諸侯は五、卿大夫は三」とある。【七】弊裘　戰國策に

「蘇秦、秦王に説く、説、十たび上つて行はれず、黒貂の裘敝れ、秦を去り、歸つて家に至る、妻、織を下らず、嫂、爲に炊がず、父母ともに言はず」とある。【八】長劍託交親　馮煖の事、前に見ゆ。【九】莫持西江水、空許東溟臣　莊子に「莊周、家貧、往いて、粟を監河侯に貸る。監河侯曰く、諾、我將に邑金を得むとす、將に子に三百金を貸さむとす、可ならむか。莊周曰く、周、昨來る、中道にして呼ぶものあり、周、顧視するに、車轍中に鮒魚あり、周、これに問うて曰く、鮒魚來れ、子は何する者ぞ。對へて曰く、われは東海の波臣なり、君、豈に升斗の水あつて我を活さむか。周曰く、諾、我、且に、南、吳越の王に遊び、西江の水を激して子を迎へむとす、可ならむか。鮒魚、忿然色を作して曰く、吾、わが常を失ひ、我と處るところなし、吾、升斗の水を得れば、然かく活きむのみ、君乃ち此を言ふ、かつて早く我を枯魚の肆に索むるに如かず」とある。

【詩意】われは、狷介にして曠達、兎角つむじが曲つて居るから、世を侮り、世人の歌ひ囃す功業を以て、區區取るに足らざるものとして、之を薄んじて居るが、そは胸中に畫策があるからである。かくて、萬古の賢人輩をふざけ蔑み、その事蹟を以て、兒童の游戯同樣の者と看做して居る。抑も、家産を立つるなどは、詰らぬことで、唯だ費用を廣げるに過ぎず、君を匡して、過寡からしめ、以て太平を致すに就いては、天晴長策を懷いて居る積り。但だ山北の寒い處に居て、冬を凌ぎ兼ねるのは、まことに苦しいことで、道南の宅に我を迎へ入れるやうな親友は、生憎無いから仕方が無い。かくて、歳晩、酒に醉つた勢で、風の吹く方に向へば、兩鬢の毛は白く、さながら霜を帶びたやうである。むかし、蜀の先主は、孔明を得むことを思ひ、これを得て後は、さながら魚水の如く、又晉室では、謝安の東山より出でむことを希望して居たので、この二人は、もとより重用された。かくて時來れば、五鼎を列ねて、隨分贅澤な事も出來るので、談笑して乾坤一擲の壯圖を心に期して居たところが、さうは行かず、都を放逐された上に、刻下の騷亂に遭ひ、虎視耽耽たる身でありながら、伏匿して、胡塵を避け、漁歌を唱へつつ、海濱に遊び、裘は破れ盡して、古しへの蘇秦の如く、妻や兄嫁に恥ぢ入つて、一目置くといふ情ない始末。かくて、長劍を撫して、平生交誼ある親友に向つて、身の振り方を頼むのである。君は、傳家の高義を重んじ、超然として衆を拔き、羣賢も共に鄰をなし難い位、されば、西江の水を持つて來て、東海の波臣たる鮒を救つてやらうと云つた樣な、間の拔けた、まだるいことはせず、きつと急速に、我が窮を救つて下さるだらう。もし君の恩惠に因つて、他日、青雲の上に致すを得ば、黄金を以て、心ばかりの御禮を致すことも出來やう。

【餘論】虎伏避二胡塵一の句を見れば、この詩は、祿山の亂に際し、未だ永王璘の幕中に投ぜざりし頃の作かと思はれる。起首より、半過ぎまで、自己の閲歴を述べ、夫子秉二家義一に至つて、はじめて、本題に入つて、汲引の惠を依囑したのである。

陳情。贈二友人一

延陵有二寶劍一。價重二千黄金一。延陵に寶劍あり、價、千黄金より重し。
觀二風歴上國一。暗許二故人一深。風を觀て上國を歴、暗に故人に許すこと深し

歸來挂墳松。萬古知其心。
懦夫感達節。壯士激青衿。
鮑生薦夷吾。一舉置齊相。
斯人無良朋。豈有青雲望。
臨財不苟取。推分固辭讓。
後世稱其賢。英風邈難尚。
論交但若此。有道孰云喪。
多君騁逸藻。掩映當時人。
舒文振頹波。秉德冠彝倫。
卜居乃此地。共井爲比鄰。
清琴弄雲月。美酒娛冬春。
薄德中見捐。忽之如遺塵。
英豪未豹變。自古多艱辛。

歸り來つて、墳松に挂け、萬古、その心を知る。
懦夫、達節に感じ、壯士、青衿を激す。
鮑生、夷吾を薦め、一擧して、齊相に置く。
この人、良朋なく、豈に青雲の望あらむや。
財に臨んで、苟くも取らず、分を推して固く辭讓す
後世、その賢を稱し、英風、邈として尙へ難し。
交を論ずる、但だ此の若く、有道孰れか喪ひたりと云ふ。
多とす、君が逸藻を騁せ、當時の人に掩映するを。
文を舒べて頹波を振ひ、德を秉つて彝倫に冠たり。
卜居、乃ち此地、井を共にして比鄰となる。
清琴、雲月を弄し、美酒、冬春を娛む。
薄德、中ごろ捐てらる、これを忽にして遺塵の如し。
英豪、未だ豹變せず、古しへより艱辛多し。

他人縱以疎。君意宜獨親。
奈何成離居。相去復幾許。
飄風吹雲霓。蔽目不得語。
投珠冀有報。按劍恐相距。
所思採芳蘭。欲贈隔荆渚。
沈憂心若醉。積恨淚如雨。
願假東壁輝。餘光照貧女。

他人、縱ひ以て疎なるも、君が意、宜しく獨り親むべし。
奈何か、離居を成し、相去ること復た幾許ぞ。
飄風、雲霓を吹き、目を蔽うて語るを得ず。
珠を投じ、冀はくは報ゆるあらむ、劍を按じて、恐らくは相距がむ。
思ふところは芳蘭を採り、贈らむと欲すれば、荆渚を隔つ。
沈憂、心醉ふが若く、積恨、淚、雨の如し。
願はくは、東壁の輝を假り、餘光、貧女を照らさむ。

【字解】【一】延陵有寶劍　新序に「延陵の季子、將に、西、晉に聘せむとし、寶劍を帶びて、以て徐君を過ぐ。徐君、劍を觀て言はず、しかも、色これを欲す。季子、上國の使あるが爲に、未だ獻ぜざるなり、然れども、その心、これを許す。使を晉に致して、顧反すれば、徐君、楚に死せり。ここに於て、劍を脫して之を嗣君に致す。從者、これを止めて曰く、これ吳國の寶、贈る所以に非ざるなり。延陵の季子曰く、先日、晉來る、徐君わが劍を觀て言はず、しかも、その色これを欲す。吾、上國の使あるが爲に、未だ獻ぜざるなり、然りと雖も、吾が心、これを許せり。今、死して遇めず、これ心を欺くなり。劍を愛して心を欺く、廉者は爲さざるなり、と。遂に劍を脫して、これを嗣君に致す。嗣君曰く、先君命なし、孤敢て劍を受けず、と。ここに於て、季子、劍を以て徐君の墓樹に帶ばしめて去る。徐人嘉して、これを歌うて曰く、延陵季子兮不忘故、脫千金之劍兮挂墳墓」とある。【二】上國　かみがた、王畿に近き處。【三】青衿　國風に青青子衿とあつて、毛傳に「青衿は青領なり」とある、學子の服するところ。【四】鮑生薦夷吾　鮑叔牙が管仲と交り、後に之を齊の桓公に推薦せしこと、前に見ゆ。【五】逸藻　すぐれたる才藻。【六】舒文　文章を舒べ

る。【七】共井爲比鄰　周禮の大司徒職に「五家を比となす」とあり、遂人職に「五家を鄰となす」とある。鄭玄の註に「鄰司農云ふ、田野の居、その比伍の名、國中と制を異にす、故に五家を鄰となす」とある。釋名には「五家を伍となす」とあつて、五を以て名として居る。又鄰といふのは、連の義で、相連接するからである。比は親比の義。【八】約變　易に君子豹變とある。豹の毛色の變化するにたとふ。【九】飄風　吹き廻る風、楚辭の王逸註に「回風を飄となす、飄風は無常の風、以て邪惡の象を興すなり、雲霓は惡氣なり、以て佞人に喩ふ」とある。【一〇】投珠　史記に「明月の珠、夜光の璧、闇を以て人に道路に投ずれば、人、劍を按じて相眄ぜざるものなし。何となれば、因なくして前に至ればなり」とある。【一一】沈憂　深き憂。【一二】餘光　列女傳に「齊女徐吾は齊の東海上の貧婦人なり。鄰婦、李吾の屬と會燭し、相從つて夜績す。徐吾、最も貧にして、燭數ば屬せず。李吾、その屬に謂つて曰く、徐吾、燭數ば屬せず、請ふ、夜を與にするなからむ。徐吾曰く、一室の中、一人を益すも燭ために暗からず、一人を損するも燭ために明かならず、何ぞ東壁の餘光を愛んで、貧女をして愛せらるるの恩を蒙り、長く妾役の事をなすを得せしめざる。諸君をして、常に妾に惠施あらしむる、亦た可ならずや、と。李吾、能く座ふるなし。遂に復た夜を與にして、終に後言なし」とある。

【題義】この詩は、自己の情を陳べて友人に贈つたので、その何人なるかは分らぬ。そして、大體の趣旨は、例の如く引き立てて與れろといつて懇に囑望したのである。

【詩意】むかし、延陵の季子は、寶劍を藏し、價は千金より重く、まことに、世上稀に見るところであつた。季子は、諸國の風俗を視むが爲に、上國に赴き、徐君が欲しさうな顏をして居てたのを見て取つて、歸りには、屹度差し上げるといつて、暗に心に許して居た。それから、使を終つて歸つて來ると、徐君は、既に死んで居たから、その劍を徐君の塚の上なる松の木に懸けて立ち去つたといふので、萬世の後までも、季子の誠心を知つて語り傳へ、懦夫も、その達節に感じ、壯氣は靑い襟の下から起つて、その心胸を激動するばかりである。次に鮑叔牙は、管仲を齊の桓公に推薦し、一舉して、齊に相たらしめた。管仲にして良朋なくんば、あれだけの才能があつたとて、とても、靑雲に望をかけて立身することは出來なかつた。そして、鮑叔牙は、その前、管仲とともに商賈を爲す時、財を分つに臨んで、かりそめにも取らず、おのが分限を管仲に推し遣つて、固く辭讓した。かくて、後世に至るも、鮑叔牙の賢を稱し、その英風は、邈然として、加へ難きものといはれて居る。人間の交際は、かくありたきもので、朋友の道を盡すこと、かくの如き上は、まだまだ道德は廢れたといふにも及ぶまいと思はれる。君は、すぐれたる詞藻を有し、現代の人に掩映して居る程で、文章を作れば、頽波を振ひ回して、純古に復さむとし、德を行へば、彝倫に冠として、世に類ない程である。君は、此地に居を卜し、同じ區劃の中に居て、我と比鄰を結び、日夕追隨し、雲月に對しては清琴を彈じ、寒い冬から溫い春にかけて、雪や花の眺ある頃は、美酒を酌んで、ともに娛んで居た。然るに、わが薄德の故を以て、中道にして捐てられ、これを見棄てること、さながら塵の如く、一向おかまひ下さらぬのは、如何なる故か。われとても、英豪の本質を備へて居るが、未だ豹變せずして、愚圖愚圖して居るので、この世は、むかしから艱辛多く、なかなか思ふ樣にならぬから仕方がない。たとひ、他人は、われを疎んじても、君だけは、獨り親んで與れても善い筈である。然るに、如何なれば、離居を爲し、相去ること幾ばくぞといつて問ひたい位。今しも、飄風は雲霓を吹き、邪惡の佞人が充滿し

て居るからには、目をつぶつた儘、語ることも出來ない。夜光の珠を投じて、聊か君の從前の好意に報ゆる積りであつても、うつかりして居ると、劍を按じて拒まれる。そこで、芳蘭の花を采り、わが心の潔白を表して、君に贈らうと思へども、大江流潤く、はるかに荆渚を隔てて、一寸往くことも出來ない。かくて、深き憂に閉された心は、さながら醉へるが如く、恨積つて、涙は雨の如くに落ちる。君は、今然るべき位地に居て、十分に手が廻るから、むかし齊國の貧女が、東壁の燭の餘光を借りて、仕事をしたいといつたやうに、どうか力を貸して、刻下の我が境涯を救つて貰ひたい。

【餘論】 この詩は、はじめ、交際親密であつた處が、中ごろから疎略に成つた、それは、先方が讒誣の言を信じたるに因るので、これを辯明して、自己の衷情を述べたのである。そこで、季札鮑叔に筆を起し、次に往日の親交を回顧し、次に刻下睽離の狀況に及び、他人縱以疎以下、殊に語眞に、情摯に、容易に人を感動せしめる。そして、結末には、又一の故事を援引して、援助を望んだので、かういふ場合には、いつでも故事を用ふるに限る。さうすれば、暴露の弊なく、且つ含蓄に富み、讀者をして、十分に思考せしめることが出來るからである。乾隆御批に「胸懷を披露して、齷齪の態を作さず、乖隔を敍する處、極めて微婉と爲す、風人の意を得たり」とある。

贈從弟冽

從弟冽に贈る

楚人不識鳳。重價求山雞。
獻主昔云是。今來方覺迷。
自居漆園地。久識咸陽西。
風飄落日去。節變流鶯啼。
桃李寒未開。幽關豈來蹊。
逢君發花夢。若與青雲齊。
及此桑葉綠。春蠶起中閨。
日出布穀鳴。田家擁鋤犁。
顧余乏尺土。東作誰相攜。
傳說降霖雨。公輸造雲梯。
羌戎事未息。君子悲塗泥。
報國有長策。成功羞執珪。
無由謁明主。杖策還蓬藜。

楚人、鳳を識らず、價を重くして、山雞を求む。
主に獻じて昔是なりと云ふ、今來つて方に迷を覺る。
漆園の地に居つてより、久しく識る咸陽の西。
風は飄つて落日去り、節變じて流鶯啼く。
桃李、寒、未だ開かず、幽關、豈に蹊に來らんや。
君に逢うて花夢を發し、青雲と齊しきが若し。
この桑葉の綠なるに及び、春蠶、中閨に起る。
日出でて布穀鳴き、田家、鋤犁を擁す。
顧るに、余、尺土に乏しく、東作、誰か相攜へむ。
傳說は霖雨を降し、公輸は雲梯を造る。
羌戎、事未だ息まず、君子、塗泥を悲む。
國に報ゆるに長策あり、功を成すも執珪を羞づ。
明主に謁するに由なく、策を杖いて蓬藜に還る。

他年爾相訪。知我在[一]磻溪。

【字解】【一】楚人不識鳳　太平廣記に「楚人、山雞を擒ふものあり、路人問うて曰く、何の鳥ぞや。擒者、これを欺いて曰く、鳳凰なり。路人曰く、われ鳳凰を聞くこと久し、今眞に之を見る、汝、これを賣るか。曰く、然り、と。乃ち十金を酬ゆ。與へず。請ふ加倍せむ。乃ち之を與ふ。方に持に楚王に獻ぜむとす、經宿にして鳥死す。路人、その金を愉ふるに遑あらず、惟だ以て王に獻ずるを得ざるを慎む。國人、これを傳へ、或な以爲へらく、眞鳳にして賣し。宜なり之を獻ぜむと欲するやと、遂に楚王に聞す。王、その己に獻ぜむと欲するに感じ、召して、厚く之に賜ひ、鳳を買ふの價を過ぐること十倍」とある。【二】漆園　太平寰宇記に「漆園城は、曹州冤句縣北五十里に在り、莊周、吏たるの所、城北に莊周の釣臺あり」と記し、その他、濠州の定遠縣、鳳翔府の定遠縣、山東の曹縣、大名府の東明慶縣等に各漆園があるが、ここのは曹州のであらう。【三】桃李　史記に「桃李言はず、その下蹊を成す」とある。【四】花萼　兄弟に喩ふ。【五】布穀　鳴鳩、鵓鳩の事で、爾雅に「鳲鳩鵓鳩は、卽ち首上勝なり、頭上に尾起る、故に鵓勝といふ。農事、方に起れば、この鳥、桑間に飛鳴す。云ふ、五穀布種すべきなり、と。故に布穀といふ」とある。【六】鋤犂　もに田器。【七】東作　尙書に平二秩東作一とあつて、孔安國の傳に「歲は東に起つて、はじめて耕に就く、これを東作といふ」とある、卽ち耕すこと。【八】霖雨　尙書の說命に「もし、歲、大に旱すれば、汝を用ひて霖雨となさむ」とある。【九】公輸　淮南子に「公輸は天下の巧士、雲梯の械を作り、設けて以て宋を攻む」とあつて、高誘の註に「雲梯は攻城の具、高長、上、雲と齊し、故に雲梯といふ」とある。【一〇】螘泥　左傳に「吾子をして、辱められて、泥螘に在ること久しからしむ」とある。【一一】執珪　周禮に、「侯は信圭を執る」とあつて、卽ち附庸の君となすこと。【一二】杖策　鞭を杖とする。【一三】磻溪　水經註に「磻溪中に泉あり、これを玆泉といふ、泉水潭積、自ら淵渚を成す、卽ち呂氏春秋に謂はゆる太公の釣玆泉なり。今人、これを凡谷といふ。石壁深高、幽篁鬱密、林障秀阻、人跡罕に及ぶ、東南隅に石室あり、蓋し太公の居るところなり、水流の次平石の釣處、卽ち太公望、釣を垂るるの所。その竿を投じ、跪いて餌し、兩膝の遺跡猶ほ存す、これ磻溪の稱あるなり。その水清冷神異、北流十二里、渭に注ぐ」とあり、郦奐に「扶風郡郿縣に磻溪あり、太公、魚を此に釣る」とある。

【題義】　この詩は、從弟の李冽といふものに贈つて、自己の境涯を述べたのである。

【詩意】　楚人は、鳳を知らざりしに因り、山雞を鳳凰だといはれると、それを本當だと思つて、高い價を以て之を買つて、楚王に獻せむとしたといふ昔ばなしがあるが、われも、その通りで、格別すぐれても居ない自分の才藝を非常に貴いものと思ひ込んで、天子に獻せむとし、その時分は、善いことと思つて居たが、つい近ごろに成つて、それは心の迷に過ぎないといふことを自覺した。かくて、西、長安を去つて、北の方、漆園の地に來り、すでに久しきを經、風は飄つて、落日西に沈み、節序しきりに變じて、鶯の來て啼く春となつたが、名にしおふ北地の事であるから、桃李は、なほ寒を怕れて咲き出でず、幽關の下に、游人來り聚まらざれば、蹊も出來ない。かくて、君に遇うて、花萼の親を重ね、どうやら、青雲の上に登つたやうな氣がした。兎角する內に、桑の葉が出て綠になり、家家の閨中に於ては、春蠶を飼ふ爲に忙はしく、うららかな日の差し上る頃、布穀の鳥が鳴けば、愈よ野良仕事をする時が來たといふので、農家に於ては、鋤や鍬を攜へて、每日畑へ出かける。但し、余は、尺土をだに有せざるに因り、誰と共に、田疇に耕すべき。人人の世話しい時分に、全く爲す事もなくして、のらくらと遊んで居る。むかし、傅說は、武丁に用ひられ、歲大に旱すれば汝を用ひて霖雨と成さむといはれ、公輸は、雲梯を造つて、宋を攻めたといふので、この二人は、十分に、その才能を發揮して、國家の爲に盡したので、わが理想とするところも、これに外ならぬ。今しも、北方の戎ど

もは、叛逆を企て、その亂、未だ平定せず、君子は、塗泥に陷つて、まだ救ひ上げられずに居る。そこで、われは、國家に報いむが爲に、胸中に長策を藏して居るし、又たとひ成功したところで、封侯の賞を受くるを羞として居る位。何も褒美を貰はむが爲ではなく、中心から、國家の多難を憂へ、一肌ぬいで、仕事を遣つて見たいのであるが、聖明の天子に拜謁して、自ら推薦するだけの手蔓が無いから、止むを得ず、思ひ切り、鞭に杖いて、むぐらの宿に還つた次第。しかし、この儘では、とても濟まされぬから、古しへの太公望を學んで、釣を爲し、そして、聖主の夢に入つたならば、或は迎へられて拜謁することも出來るかも知れない。そこで、汝にして、他年われを訪はむとならば、磻溪の樣な處に居るものと思つて、尋ねて來たら善からう。

【餘論】この詩は、李白が折角の才能あれども、用ひられざるを傷んだので、獻ル主昔云ヲ是、今來方覺レ迷といふのは、當初翰林に供奉したことが、本來の志ではなかつたといひ、刻下の爭亂に際してこそ、はじめて自己の長策を試みることが出來る、しかし、明主に謁する道がないから、磻溪に釣して、太公望の眞似をしやうといふので、梁甫吟の起首に於て、太公望の出處を述べた一段は、直に移して、この結二句の註脚とすることが出來る。その間、李冽との交情を述べ、今日、この別の止むを得ざることを暗に述べたので、篇幅の短い割合には、用筆に變化多く、且つ自然に絶妙の結構を成して居る。

贈閭邱處士

賢人有ル素業。乃在ル沙塘陂。
竹影掃ル秋月。荷衣落ル古池。
閒讀ル山海經。散ル帙臥ル遙帷。
且耽ル田家樂。遂曠ル林中期。
野酌勸ル芳酒。園蔬烹ル露葵。
如能樹ル桃李。爲ル我結ル茅茨。

閭邱處士に贈る

賢人、素業あり、乃ち沙塘の陂に在り。
竹影、秋月を掃ひ、荷衣、古池に落つ。
閒に山海經を讀み、帙を散じて遙帷に臥す。
且つ田家の樂に耽り、遂に林中の期を曠しうす。
野酌、芳酒を勸め、園蔬、露葵を烹る。
如し能く桃李を樹うれば、我が爲に茅茨を結べ。

【字解】【一】沙塘陂　江南通志に「沙塘陂は、宿松城外に在り、唐の閭邱處士、別業を此に築く、李太白、詩あり。これに贈る、云云」とある。【二】山海經　吳越春秋に「禹、四瀆を巡行し、益夔と共に謀り、行くゆく名山大澤に至り、その神を召して、之に、山川脈理、金玉の有るところ、鳥獸昆蟲の類、及び八方の民俗、殊國異域土地里數を問ひ、益をして、疏して之を記せしめ、これを名づけて、山海經といふ」とある。【三】帙　書帙を開くこと。【四】露葵　崔駰賦に「古しへ、葵、露葵と稱す、今葵を擷む、必ず露の解くるを待つ」とあり、本草に「葵、一名は露葵、今これを滑菜といふ、古人、以て常饌と爲す、四時皆食ふべし。六七月種うるものを秋葵となし、八九月種うるものを冬葵となし、正二月種うるものを春葵となす。紫莖、白莖の二種あり。大葉小花、花は紫黃色、その實、大き指頭の如く、皮薄くして扁、今人復た食種せざるもの亦た鮮し」とある。【五】茅茨　漢書に「茅茨剪らず」とあつて、顏師古の註に「屋蓋を茨といふ、茅茨は茅を以て屋を覆ふなり」とあり、釋名に「屋、草を以て蓋ふを茨といふ、茨は次な

り、太草これを爲すなり」とある。

【題義】この詩は、處士の閭邱某に贈つたのである。

【詩意】君は、一代の賢人で、その別業は、沙塘陂といふ處に在る。その亭中の有樣はといへば、竹の影が秋月を掃ひ、蓮の花は、古池に落ち、竹樹花卉は、常に眺を添へて居る。君は、亭中に在つて山海經を讀まむとし、書帙を開いて、紗帷の底に横臥して居る。それから、田家の樂に耽り、更に進んで、林中に友人と會して遊んで居る。かくて、野中に痛飲せむとして、芳酒を勸め、又園中に種るてある露葵を摘んで肴とする。君にして、桃李を種ゑ、つまり、門生どもを取り立てるといふならば、われは、甘んじて、君に師事せむと欲して居るから、わが爲に、草ぶきの家を一つ用意して下さい、さうすれば、其處に入つて、朝夕、君を追隨することにしやう。

【餘論】全體が陶淵明に類似して居る、竹影の一聯は、極めて明瑩で人を喜ばしめる。

贈錢徵君少陽

白玉一杯酒、綠楊三月時。
春風餘幾日、兩鬢各成絲。

錢徵君少陽に贈る

白玉一杯の酒、綠楊三月の時。
春風、幾日を餘す、兩鬢、各〻絲を成す。

秉燭唯須飲、投竿也未遲。
燭を秉つて、唯だ須く飲むべし、竿を投ずる、也た未だ遲からず。

如逢渭川獵、猶可帝王師。
如し渭川の獵に逢はば、猶ほ帝王の師たるべし。

【字解】【一】秉燭唯須飲　古詩に、晝短苦夜長、何不秉燭遊とあるに本づく。【二】投竿　竿を水に投じて釣するをいふ。【三】渭川獵　周の文王は、渭水の陽に獵して、太公望に遇ひ、載せて輿に俱に歸り、立てて師とした。その詳は前に見ゆ。

【題義】錢少陽の名は、前にも一寸見えたが、その閲歴等は、分らぬ。但し徵君といふ上は、進士に及第した人であらう。楊齊賢の説に「少陽年八十餘、故に之を太公に方ぶ」とある、これは本づくところを知らぬが、多分さうであらう。

【詩意】白玉の杯に盛れる酒を酌んで、三月、柳の青青とした春景色を吟賞するが善い。春風は、幾日を餘すか、やがて、その月限りで、春は盡きる。そして、兩鬢は、そそけて絲の如く亂れる。されば、古人の言つた樣に、晝ばかりでは足りないから、燭を秉つて痛飲すべく、その後、竿を投じて釣したとても、遲くは無い。かくて渭川の獵でもあらば、文王に迎へられて、帝者の師となるであらう。

【餘論】前半は、徵君の能く時に及び、興に適するを述べ、後半は、主に逢ひ、世に用ひらるるを以て期とする旨を敍したので、嚴滄浪は「情を賦する、丘山の如く、しかも口を出でて、輕きこと蟬翼の若く、眞に是れ逸才」といつた。

贈宣州靈源寺仲濬公　宣州靈源寺仲濬公に贈る

敬亭白雲氣。秀色連蒼梧。　敬亭白雲の氣、秀色、蒼梧に連る。
下映雙溪水。如天落鏡湖。　下、雙溪の水に映じて、天の鏡湖に落つるが如し。
此中積龍象。獨許濬公殊。　この中、龍象を積み、ひとり許す、濬公の殊なるを。
風韻逸江左。文章動海隅。　風韻、江左に逸し、文章、海隅を動かす。
觀心同水月。解領得明珠。　心を觀ること、水月に同じく、領を解いて、明珠を得たり。
今日逢支遁。高談出有無。　今日、支遁に逢ひ、高談、有無を出づ。

【字體】【一】敬亭、蒼梧、白雲　ともに、敷ば前に見ゆ。【二】雙溪　一統志に「雙溪は、寧國府城の下に在り、二流合流す」とある。【三】龍象　釋子中、能く大法を負荷するものをいふ。【四】江左　胡三省の通鑑註に「江郡揚南徐の地を江左となし、巢南兗南豫の地を江右となす」とある。【五】水月　水中の月影、有に非ず、無に非ず、了に執ふべからず、慧者心を觀ること、亦た復た此の如しといふ意。【六】明珠　菩提大道に喩ふ。【七】支遁　晉書に「沙門支遁、清談を以て名を峰に著はす、風流勝賞、崇敬せざるなし」とある。【八】出有無　僧肇の維摩詰經に「得て有とすべからず、得て無とすべからざるものは、其れ唯だ大乘行か。その有を言はむと欲すれば無相無名、その無を言はむと欲すれば萬德斯れ行はる、故に、無と雖も有、無相無名、故に有と雖も無、然らば、無と言ふも亦かず、有と言ふも亦かず、或は有行と說き、或は無行と說く、有無、異なりと雖も、その致一なり」とある。

【題義】この詩は、宣州靈源寺の住僧仲濬といふものに贈り、その高德を頌したのである。

【詩意】敬亭山には、白雲の氣が棚引いて、その山の秀色は、はるかに蒼梧の野に連つて居る。そして、敬亭の山は、その下なる雙溪の水に映じ、天が鏡なす湖水にうつつて居るやうに見える。この間に、龍象の徒が、續續輩出したが、就中、わが濬公は、殊に優れて居る。濬公の風韻は、江左に秀で、文章は、海隅をも動かす位。そして心を觀ることは、水中の月影を見るが如く、非有非無の中に於て、豁然解悟し、明珠に比すべき大道の祕奧を得て居る。われ、今、古しへの支遁に比すべき、この高僧に遇ひ、終日高談し、有無紛紛たる差別界より傑出 超出した樣な想を爲した。

【餘論】この詩は、あつさりして居るが、いはば通り一ぺんの挨拶で、これ位ならば、濬公その人も、格別偉いとも思はれない。

贈僧朝美　僧朝美に贈る

水客凌洪波。長鯨湧溟海。　水客、洪波を凌ぎ、長鯨、溟海を湧かしむ。
百川隨龍舟。噓吸竟安在。　百川、龍舟に隨ひ、噓吸、竟に安くにか在る。
中有不死者。探得明月珠。　中に不死の者あり、明月の珠を探り得たり。

高價傾宇宙。餘輝照江湖。高價、宇宙を傾け、餘輝、江湖を照らす。
苞卷金縷褐。蕭然若空無。苞は金縷の褐を卷き、蕭然として、空無の若し。
誰人識此寶。竊笑有狂夫。誰人か此寶を識らむ、竊に笑ふ狂夫あるを。
了心何言說。各勉黃金軀。了心何ぞ言說せむ、各〻勉めよ、黃金の軀。

【字解】【一】水客　海客に同じ、舟人。【二】長鯨　異物志に「鯨魚、長きものは數十里、小なるものは數十丈、雄を鯨といひ、雌を鯢といふ、或は沙上に死す、これを得るもの皆目なし、俗に言ふ、その目、化して明月の珠となる」とある。【三】冥海　北方の大海、水色黑きが故に冥といふ。【四】龍舟　大舟、龍文を刻して飾となすが故に云ふ。【五】金縷褐　隋書に「波斯には金縷織成多し」とあつて、つまり、金線をより交ぜて織つたものであらう。【六】了心　楞嚴經に「汝の心靈、一切明了、もし汝明了にせしところの心を現成すれば、實に身內に在り」とある。【七】黃金軀　後漢書に「西方に神あり、名を佛といふ、その形、長、丈六尺にして黃金色」とある。

【題義】この詩は、朝美といふ僧に贈つたのである。

【詩意】舟のりが大浪を凌いで、舟を乘り出すと、長鯨が北冥の大海に浮び上つて、さながら、湧き出でたるが如く、この大舟は、百川の流と共に、鯨の爲に吸ひ込まれて、すべて沈沒して仕舞つた。しかし、その中に、運よく生命を全うして助かつたものがあつて、却つて、明月の珠を探り得て、これを持つて還つた。その珠は、非常に高價なものであるし、又光輝燦然として、江湖を照らすばかり。しかし、その人は、丁寧に之を包んで、金縷の故衣の下に藏し、何も持つて居ない樣な風をして居るから、何人も、その寶あるを知るものなく、その人の身ぶりが、少し變だといふので、狂夫だといつて居た。これは、ほんの譬喩であつて、人の煩惱海中に在るや、一切嗜慾の爲に汨沒し、醉生夢死、飄流極なしと雖も、その中には、本來不昧なものがあるから、却つて煩惱海中に於て、如來の法寶を悟り得ることも出來る。さうすると、その價値は、宇宙を傾くべく、その光は、江湖を照らすことも出來るが、卷いて之を懷にして、自ら以て有と爲さず、しかも、空無なるが如くして居るから、人皆これを識らず、自分ひとりで之を知つて居る。かくて、悟徹の餘、この本來の心さへ明了になれば、生きながら黃金佛となつたも同然で、愈よ以て自重せねばならぬ。今、朝美といふ高僧は、まさしく、この域に到達して居るので、その人は、崇敬を値する次第である。

【餘論】全篇が譬喩で、唯だ結二句を以て、本意を點醒したので、これも、一種の作法である。王琦の解は極めて的確で、大體、これに循從したのであるが、なほ終に於て「夫れ心既に明了なれば、言說の以て酬對すべきなし、唯だ勸勉して、この軀を珍重するあるのみ。蓋し人身は得がたし、六道の中、人道を以て最と爲す、これ此軀の重き、黃金に等しく、未だ輕忽にすべからず、故に各勉黃金軀と曰ふなり」といつて居る。

贈僧行融

梁有湯惠休。常從鮑照遊。
峨眉史懷一。獨映陳公出。
卓絶二道人。結交鳳與麟。
行融亦俊發。吾知有英骨。
海若不隱珠。驪龍吐明月。
大海乘虛舟。隨波任安流。
賦詩旃檀閣。縱酒鸚鵡洲。
待我適東越。相攜上白樓。

僧行融に贈る

梁に湯惠休あり、常に鮑照に從つて遊ぶ。
峨眉の史懷一、獨り陳公に映じて出づ。
卓絶二道人、交を結ぶ鳳と麟と。
行融、亦た俊發、吾知る、英骨あるを。
海若、珠を隱さず、驪龍、明月を吐く。
大海、虛舟に乘じ、波に隨つて、安流に任かす。
詩を賦す旃檀閣、酒を縱にす鸚鵡洲。
待て我が東越に適き、相攜へて白樓に上るを。

【字解】【一】湯惠休　宋書に「時に沙門釋惠休あり、善く文を屬して、辭采綺麗、徐湛之、これと厚善、世祖命じて還俗せしむ、本姓は湯、位、揚州從事史に至る」とあり、鮑照に秋日示休上人、及び答休上人の詩がある。【二】史懷一　虛誕用の陳子昂別傳に「友人趙貞固、鳳閣舍人陸餘慶、殿中侍御史畢構、監察御史王無競、益州長史房融、右史崔泰之、處士郭霸微、道人史懷一、皆歲寒の交を篤うす」とある。それから、崔顥の懷一上人に贈る詩に「法師東南秀、世實叅家子、削髮十二年、誦經峨眉裏」とあるを見れば、懷一は、峨眉の僧に相違ない。【三】海若　海神。【四】驪龍　黑龍、莊子に「夫れ千金の珠は、必ず九重の淵にして驪龍顎下に在り」とある。【五】虛舟　荷物を輕くした舟。【六】旃檀閣　沈佺期の香山寺の詩に旃檀曉閣金輿度とあるから、これも、香山寺を指したのであらう。【七】鸚鵡洲　前に見ゆ。【八】白樓　施宿の會稽志に「府城臥龍山南、舊と傳ふ白樓亭ありと、今遺址考ふるところなし」とあつて、その詳は、すでに前に見ゆ。

【題義】　この詩は、行融といふ名僧に贈つたのである。

【詩意】　むかし、梁の時代に湯惠休といふ人があつて、その僧たりし頃には、平生、鮑照に從つて遊び、照の集中、これに贈つた詩が大分見えて居る。それから、近時、峨眉山に懷一上人といふ高僧があつて、その人も、陳子昂と共に世間に知られて居る。惠休といひ、懷一といひ、ともに卓絶したる僧侶であつて、かの麟鳳に比すべき鮑照や陳子昂と交際して居たので、詩人と名僧とは、從來、緣故淺からざるものである。ここに行融といふ僧があるが、この人も、亦た頗る俊發したもので、英骨あること、疑を容れない。その光彩燦然たることは、海若が珠を持つて居て、自然に光を放ち、又黑い龍が、その頷下より明月の珠を吐き出したやうなものである。この人、もとより高德あるが故に、この世に於ては、たとへば、荷の輕い舟に乘つて、大海に浮んだ處で、少しも危險なこともなく、波のまにまに安流に隨つて馳せ行くやうなものである。その遊跡も、江上に遍ねく、香山寺の旃檀閣に於ては、詩を賦し、漢江に近き鸚鵡洲に對しては、古しへの禰衡を弔うて、酒を縱にしたといふので、その話も、早く聞いて居るので、わが遊び仲間として不足なき人と見える。されば、遠からず、自分

は、東越の方へ行くから、その時は、互に相攜へて、音に聞く白樓亭に上つて、一時の豪興を縱にしたい、因つて、この詩を以て、先聲とするのである。

【餘論】湯惠休と鮑照、史懷一と陳子昂、その相得たる交誼を以て、行融に望んだので、中間には、その人を稱揚し、結二句に於て、はじめて本意を逗出し、併せて、起首と照映して居る。

贈黃山胡公求白鵰　并序　黃山の胡公に贈りて白鵰を求む并に序

聞黃山胡公。有雙白鵰。蓋是家雞所伏。自小馴狎。了無驚猜。以其名呼之。皆就掌取食。然此鳥耿介。尤難畜之。予平生酷好。竟莫能致。而胡公輟贈於我。唯求一詩。聞之欣然適會宿意。因援筆三叫。文不加點以贈之。

【訓讀】聞く、黃山の胡公、雙白鵰ありと。蓋し是れ家雞の伏するところ、小より馴狎、了に驚猜なし。その名を以て之を呼べば、皆掌に就いて食を取る。然れども、この鳥耿介、尤も之を畜ひ難し。予、平生、酷だ好むも、竟に能く致すなし。而して、胡公、我に輟贈し、唯だ一詩を求む。これを聞いて、欣然として適ま宿意に會す、因つて、筆を援つて三叫し、文、點を加へず、以て之に贈る。

請以雙白璧。買君雙白鵰。
白鵰白如錦。白雪恥容顏。
照影玉潭裏。刷毛琪樹間。
夜棲寒月靜。朝步落花閒。
我願得此鳥。翫之坐碧山。
胡公能輟贈。籠寄野人還。

【字解】【一】雙白璧　二つの珠。【二】白如錦　白鵰は、毛羽白質にして黑逡、錦文に似て居る處から、かく云つたのである。【三】玉潭　虞羲の詩に冷冷玉潭水とある。【四】琪樹　山海經に「見崙の墟、北に琪樹あり」とある。

【題義】張華の禽經註に「白鵰は、山雞に似て色白し、行止閑暇」といひ、黃山志に「白鵰は、性耿介にして畜ひ難し、雄は采にして文、素角玄英、二角、壯時隆起して、英上に出で、時あつて靡縮す、蓋し氣の鼓するに因つて、後に壯なるなり。鵄爪皆赤く、その羽末黑く、文、洒最もしくは緣裻の如く、又界地錦の如し、惟だ尾に二莖を妥れ、緇文なく、班如たり」とある、黃山に胡公といふ人があつて、二羽の白鵰を畜つて居る。それは、雞に孵へさしたので、小さい時から善く馴れて、少しも驚かず、その名を呼べば、手のひらの上で餌を啄む位。元來、この鳥は、性耿介にして、特別に飼養し

悪いので、予は、平生ひどく之を好み、是非欲しいと思つては居るが、終に之を致すことが出來なかつた。すると、胡公は、自分の持つて居る白鵝を我に贈り、その報酬として、一首の詩を作つて與れといつたから、これを聞いて、欣然として、平生の志望に協ひ、まことに、嬉しくて堪まらず、そこで、筆を援つて三叫する間に、詩が出來、字を消して直すにも及ばず、直に此詩を贈つた、これが自序の大意である。

【詩意】願はくは、二つの白璧を以て、君の飼つてゐる二羽の白鵝を買ひ取りたい。その白鵝は、白質黒邊、その文は、錦の如く、容顔の綺麗なることは、白雪をも恥ぢしむるばかり。そして、影を玉潭の裏に照らし、毛を琪樹の間に拂ひ、夜には寒月の靜なる處に栖み、朝には落花の閑なる處を徐に歩いて居る。われ若し、この鳥を得たならば、これを攜へて、碧山の中に入り、心のどかに、之を翫んで居たいと思つて居た處が、今回詩を作つて遣れば、ただで與れるとのことで、まことに嬉しい。かくて、愈よ鳥を送つて來たならば、その籠だけは、不用であるから、野人に託して、返納するであらう。

【餘論】照影玉潭裏の四句は、白鵝の動作を寫したので、一篇の精彩といふべく、これあればこそ、はじめて、詩らしく聞こえるのである。

登敬亭山南望懐古贈寶主簿

敬亭一廻首。目盡天南端。
仙者五六人。常聞此遊盤。
谿流琴高水。石聳麻姑壇。
白龍降陵陽。黄鶴呼子安。
羽化騎日月。雲行翼鴛鸞。
下視宇宙間。四溟皆波瀾。
汰絶目下事。從之復何難。
百歳落半途。前期浩漫漫。
彊食不成味。清晨起長嘆。
願隨子明去。鍊火燒金丹。

敬亭山に登り、南望、古しへを懐ひ、寶主簿に贈る。

敬亭、一たび首を廻らせば、目は盡く天の南端。
仙者五六人、常に聞く此に遊盤すと。
谿は琴高の水を流し、石は麻姑の壇に聳ゆ。
白龍、陵陽に降り、黄鶴、子安を呼ぶ。
羽化、日月に騎し、雲行、鴛鸞を翼く。
下、宇宙の間を視れば、四溟、皆波瀾。
汰絶す目下の事、これに從ふ、復た何ぞ難からむ。
百歳、半途に落ち、前期、浩として漫漫。
彊食、味を成さず、清晨、起つて長嘆。
願はくは、子明に隨つて去り、火を鍊つて金丹を燒かむ。

【字解】【一】敬亭　元和郡縣志に「敬亭山は、宣州縣北十二里に在り、卽ち謝朓詩を賦するの所」とある。【二】琴高水　江南通

志に「琴高山は、寧國府涇縣の北二十里に在り、むかし、琴高、この山に於て、修煉道を得たり、故に名づく。隙雨巖あり、これ、その鯉を捺へて上昇するの所。巖下に煉丹洞あり、洞旁に釣臺あり。臺下の流水は、即ち琴溪なり、毎歳上巳前後數日、溪中小魚を出す、これを琴魚といふ。傳へて、仙人臺澄の化するところと爲す」とある。【三】麻姑壇　九域志に「宣州宣城郡に花姑山あり、亦た之を麻姑山といふ、むかし、麻姑道を修し、此に於て上昇す、仙壇在るあり」とあり、江南通志に「麻姑山は、寧國府城の東三十五里に在り、峰巒奇秀、飛仙郡東に作す。むかし、麻姑道を修し、ここに於て羽擧す。仙壇、丹竈、劍池、石基枰、釣魚臺、天游亭の諸跡あり」とある。【四】陵陽　水經註に「水、陽陵山下に出で、陵陽縣西を經て、旋溪の水となる。むかし、縣人寶子明、白龍を釣り得たる處、後三年、龍、子明を迎へ、陵陽山に上る、山、地を去ること千餘丈。後百餘年、山下の人を呼び、山中に上つて、與に雞犬に語らしむ、子安、子明の釣車の在るところを問ふ。後二十年、子安死す、山下に黄鶴あり、その塚樹に栖み、常に鳴いて子安を呼ぶ」とある。【五】四溟　四海に同じ。【六】燒金丹　抱朴子に「夫れ金丹の物たる、これを燒くこと愈よ久しければ、變化愈よ妙、黄金、火に入り百鍊消えず、これを埋むれば、天を畢るまで、朽ちず。この二藥を服すれば、人の身體を鍊る、故に能く人をして不老不死たらしむ」とあり、一統志に「丹臺は、陵陽山中峰の中に在り、平寛、數人を容るべし、相傳ふ、寶子明、かつて丹を其上に燒る」とある。

【題義】この詩は、敬亭山に登り、南の方、琴高、麻姑の諸山を望みて、古しへの仙人を懐ひ、仍つて、主簿寶某に贈つたので、同姓の故を以て、主簿を仙人の寶子明に比擬したのである。

【詩意】われ今敬亭の山頂に登りて曠望すれば、天の南端は、見わたす限り、目も迴かである。聞けば、五六人の仙者が、常常その間に在つて遊び戯れて居るとのことで、かの琴高が鯉に乘つて上昇したといふ谿水は、相變らず涓涓として流れて居るし、麻姑といふ仙女が昇仙した壇も、むかしの儘に石が聳えて居るし、陵陽の寶子明が白龍を釣り上げた處も、子安が死んで黄鶴が常に其名を呼んだと傳ふる處も、皆それぞれ殘つて居る。かの羽化して登仙するものは、日月にも騎すべく、雲に乘つて飛行するものは、鸞鶴の類をも助けて行かしめる。かくて、宇宙を下に見れば、四方の海は、波瀾逆卷いて立ち、まことに、慘澹の有樣である。われ今、塵俗の底に在りと雖も、眼前の世事を謝絶して仕舞へば、これ等の仙人に從つて遊ぶことも、格別六つかしいことではない。人生百年の壽、すでに其半に及び、前途遼遠にして、これぞといふ目あてもなく、强ひて飲食した處で、味は更に無く、つくづく浮世が厭になつて、朝げの氣の涼しき時、二人を思へば、長嘆を禁じ得ない。されば、寶子明と相似て、しかも之と同姓なる我が主簿に隨つて山中に去り、火を鍊つて金丹を造り、ともに不老長生の方を講じやうではないか。

【餘論】起八句は、敬亭より見たる仙跡、次の四句は、人世の現況、以下八句は、自分の境涯を敍し、且つ共に仙を學ばうではないかといふ勸勉の意を述べたのである。元來、求仙は、李白の本領のこの詩の如きは、瑣瑣たるものながら、なほ其一斑を窺ふことが出來る。

經亂後將避地剡中留贈崔宣城

亂を經て後、將に地を剡中に避けんとし、留めて崔宣城に贈る

(一)雙鵝飛洛陽。五馬渡江徼。
何意上東門。胡雛更長嘯。
中原走豺虎。烈火焚宗廟。
太白晝經天。頹陽掩餘照。
王城皆蕩覆。世路成奔峭。
四海望長安。嚬眉寡西笑。
蒼生疑落葉。白骨空相弔。
連兵似雪山。破敵誰能料。
我垂北溟翼。且學南山豹。
崔子賢主人。歡娛每相召。
胡牀紫玉笛。却坐青雲叫。
楊花滿州城。置酒同臨眺。
忽思剡溪去。水石遠清妙。

雙鵝、洛陽に飛び、五馬、江徼を渡る。
何ぞ意はむ上東門、胡雛更に長嘯するを。
中原に豺虎を走らし、烈火、宗廟を焚く。
太白、晝、天を經、頹陽、餘照を掩ふ。
王城、皆蕩覆、世路、奔峭と成る。
四海、長安を望む、眉を嚬めて、西笑寡し。
蒼生、落葉と疑ひ、白骨、空しく相弔ふ。
兵を連ねて雪山に似たり、敵を破つて誰か能く料らむ。
われ北溟の翼を垂れ、且つ南山の豹を學ぶ。
崔子、賢主人、歡娛、毎に相召す。
胡牀、紫玉の笛、却つて、青雲に坐して叫ぶ。
楊花、州城に滿ち、酒を置いて同じく臨眺す。
忽ち、剡溪に去るを思ふ、水石遠く清妙。

雪晝天地明。風開湖山貌。
悶爲洛生詠。醉發吳越調。
赤霞動金光。日足森海嶠。
獨散萬古意。閑垂一溪釣。
猿近天上啼。人移月邊棹。
無以墨綬苦。來求丹砂要。
華髮長折腰。將貽陶公誚。

雪晝天地明かに、風は湖山の貌を開く。
悶えて、洛生の詠を爲し、醉うて、吳越の調を發す。
赤霞、金光を動かし、日足、海嶠に森たり。
獨り萬古の意を散じ、閑に一溪の釣を垂る。
猿は天上に近づいて啼き、人は月邊に移つて棹す。
墨綬の苦を以て、來つて丹砂の要を求むる無かれ。
華髮長く腰を折らば、將に陶公の誚を貽さむとす。

【字解】【一】雙鵝　晉書の五行志に「孝惠帝の永嘉元年二月、洛陽東北步廣里の地陷る。蒼白二色の鵝あつて出で、蒼者は飛翥して天に冲し、白者は止まる。陳留の董養曰く、步廣は周の狄泉盟會の地なり、白は金色國の行なり、蒼は胡の象たり、其れ靈く言ふべけむや、と。その後、劉元海、石勒、相繼いで寇を亂る」とある。【二】五馬　同じく晉書五行志に「太安中の童謠に曰く、五馬游渡江、一馬化爲龍と。後、中原多く亂れ、宗藩多く絕ゆ。惟だ琅琊・汝南・西陽、南頓、彭城、同じく江東に至り、而して、元帝統を嗣ぐ」とある。【三】江徼　徼は塞、卽ち國境徼巡の義に取る。【四】上東門　晉書に「石勒、年十四、邑人に隨つて、行いて洛陽に販し、上東門に倚嘯す。王衍見て之を異み、顧みて左右に謂つて曰く、ささの胡雛、吾、その聲を觀るに、奇志あるを覩る。恐らくは、將に天下の患を爲さむとす」とある。【五】烈火焚宗廟　唐書に「安祿山、兩京を陷れ、宗廟皆焚毀す」【六】太白晝經天　漢書に「太白天を經れば、天下政を革む」とあり、文獻通考に「至德二載七月己酉、太白晝見はれて天を經、十一月戊午に至つて見え

す、秦・周・楚・鄭・宋・燕の分を歴」とある。【七】 類陽　暮日に同じ。【八】 西笑　藝文類聚に「桓譚の新論に曰く、關東の鄙語に曰く、人、長安の樂を聞かば、門を出で、西に向つて笑ふ」とある。【九】 南山釣　列女傳に「南山に釣あり、霖雨七日にして食を下さざるものは何ぞや、以て其毛を澤して、文章を成さむと欲すればなり、故に離れて害に遠ざかる」とある。【一〇】 胡牀　その制、本と胡より來る、胡、胡の字を惡み、改めて交牀といふ、唐、なほ之を胡牀といふ」とある。【一一】 剡溪　浙江通志に「剡溪は、紹興府嵊縣の南に在り、一名戴溪、溪に二源あり、一は天台に出で、一は武義に出で、西南に流れ、東陽に至つて剡に入り、南北流して上虞の界に入り、以て江に達す。晉の王徽之、雪夜、この溪より戴逵を訪ふ」とある。【一二】 洛生詠　世說に「人、顧長康に問ふ、何を以て洛生の詠を作さざる。答へて曰く、何ぞ老蟑の聲を作すに至らむ」とあり、劉孝標の註に「洛下の書生、詠音重濁、故に老蟑の聲といふ」とある。【一三】 海嶠　嶠名に「山、銳にして長、嶠といふ」とある。【一四】 墨綬　賈公彦の周禮疏に「漢法、丞相中二千石は金印紫綬、御史大夫二千石は銀印黃綬、縣令六百石は銅印墨綬」とある。【一五】 折腰　南史に「陶淵明、彭澤の令となる。郡、督郵をして縣に至らしむ。吏白す、應さに束帶して之を見るべし、と。淵明、嘆じて曰く、われ五斗米の爲に腰を折つて、鄉里の小人に向ふこと能はず、と。即日印綬を解き、歸去來を賦し、以て其志を遂ぐ」とある。

【題義】 剡中は、卽ち剡縣、唐時越州たり、會稽郡の屬邑にして、江南東道に隸して居た。宣城縣は、宣州宣城郡の屬邑で、江南西道に屬して居た。この詩は、安祿山の亂に遇ひたる後、地を剡中に避けむとし、發するに臨んで、これまで世話に成つて居た宣城縣令崔某に贈つたのである。

【詩意】 むかし洛陽の東北步廣里の地が陷つて、蒼白二色の鵝が飛び出し、又五馬江を渡るといふ童謠が流行し、遂に晉室の南渡となつたが、おもはざりき、上東門に於て、石勒の如き者が再び長嘯して、ここに、大亂を引き起さむとは。かくて、安祿山、一たび范陽に叛してより、中原の地には、豺狼の如き胡虜が勝手次第に横行し、そして、宗廟は烈火に燒かれて仕舞ひ、太白は、晝ながら、天を過ぎ、愈よ天下政を革むといふ前表と知られ、落日は、餘照を掩はれて、天地は眞暗になつて仕舞つた。それのみか、長安王城の地は、皆搖盪顚覆し、世路は崎嶇として、極めて難儀に成りはてて仕舞つた。從前は、誰でも長安と聞くと、樂しい處だといつて、西に向つて笑つたのであるが、今日では、眉を顰めるばかり。天下の人民は、行方も知らず漂泊して、さながら、落葉の如く、はては白骨と化して、むなしく相弔ふばかり。胡兵の行列をして居るのを見ると、雪山を現出したるが如く、誰しも、敵を破るといふは、一寸見當が付かず、唯だ驚き恐れて居るばかりである。われは、北溟の鵬が南を圖るといふ、その垂天の翼を收め、しばらく、南山の豹が霧雨の中に藏れて居るが如く、ちつと悚へて、世變を觀て居た。縣令の崔君は、まことに賢主人といふべく、毎毎われを招いて歡娛を爲し、胡牀に倚つて、紫玉の笛を吹き、青雲に坐しては、天上の仙境を想像し、おもはず絶叫する。かくて、楊花飛んで州城に吹き滿つる春の末になると、樓上に置酒して、ともに臨眺の興を縱にした。然るに、われは、ふと思ひ立つて、剡溪の方へ往かうと思ふので、その地は、水石遠くして清妙、雲の霽れた晝には、天地が明かであるし、風、浮雲を拂へば、湖山の形貌がはつきりと見える。もとより、亂を避けるのであるから、煩悶の極、老蟑の聲といはるる洛下書生の如き吟詠の聲を爲し、醉へば、心浩然として、吳越の調を發し、日夕唯だ歌嘯して自ら慰めることであらう。眺めやれば、紅霞は金

光を動かすかと疑はれ、斜にさす日あしは、森然として海山に滿ちて居る。そこで、獨り萬古の愁を散せむが爲に、溪に臨んで釣を垂れると、猿は天上に近く啼き、人は月邊に移つて舟を棹し、全くこの浮世を離れた樣な想がする。君とても、縣令の墨綬を以て苦めらるることなく、ここに來て、丹砂の要訣を求めるのが善いので、白髮頭になるまで、區區として、五斗米の爲に腰を折つたならば、定めて、古しへの陶淵明の爲に誚らるべく、それは、斷じて、達者の爲すべきことでは無からう。

【餘論】起十六句は、祿山の亂を敍し、次の八句は、崔宣城との交誼に及び、次の十二句は、今次剡中の遊を想像し、結四句は、官を罷めて共に去らむことを勸めたのである。吳昌祺は「悲壯の處、亦た七哀の遺」といひ、乾隆御批には「奇辭絡繹、行るに蒼峭の氣を以てし、直に所懷を達し、絕えて長語なし、謝朓人を驚かすも、これ故と減せず」とある。

獻從叔當塗宰陽冰

金鏡霾六國。亡新亂天經。
焉知高光起。自有羽翼生。
蕭曹安睨旣。耿賈摧槍檝。
吾家有季父。傑出聖代英。
雖無三台位。不借四豪名。
激昂風雲氣。終協龍虎精。
弱冠燕趙來。賢彥多逢迎。
魯連善談笑。季布折公卿。
遙知禮數絕。常恐不合幷。
惕想結宵夢。素心久已冥。
顧慙青雲器。謬奉玉樽傾。
山陽五百年。綠竹忽再榮。
高歌振林木。大笑喧雷霆。
落筆洒篆文。崩雲使人驚。
吐辭又炳煥。五色羅華星。
秀句滿江國。高才掞天庭。

從叔當塗の宰陽冰に獻ず

金鏡、六國を霾し、亡新、天經を亂す。
焉んぞ知らむ、高光起り、自ら羽翼の生ずるあるを。
蕭曹は睨旣を安んじ、耿賈は槍檝を摧く。
吾が家に季父あり、傑出す聖代の英。
三台の位なしと雖も、四豪の名を借らず。
風雲の氣を激昂し、終に龍虎の精に協ふ。
弱冠にして、燕趙來り、賢彥多く逢迎。
魯連、善く談笑し、季布、公卿を折く。
遙に知る禮數の絕ゆるを、常に恐る合幷せざるを。
惕として、宵夢を結ぶを想ひ、素心久しく已に冥す。
顧みて慙づ青雲の器、謬つて玉樽の傾くを奉ず。
山陽五百年、綠竹忽ち再び榮ゆ。
高歌、林木を振ひ、大笑、雷霆喧し。
落筆、篆文に洒ぎ、崩雲、人をして驚かしむ。
辭を吐けば又炳煥、五色、華星を羅ぬ。
秀句、江國に滿ち、高才、天庭に掞す。

宰邑艱難時。浮雲空古城。
居人若蘼草。掃地無纖莖。
惠澤及飛走。農夫盡歸耕。
廣漢水萬里。長流玉琴聲。
雅頌播吳越。還如泰階平。
小子別金陵。來時白下亭。
羣鳳憐客鳥。差池相哀鳴。
各拔五色毛。意重泰山輕。
贈微所費廣。斗水澆長鯨。
彈劍歌苦寒。嚴風起前楹。
月銜天門曉。霜落牛渚清。
長嘆卽歸路。臨川空屏營。

宰邑艱難の時、浮雲、古城空し。
居人、草を蘼ぐが若く、地を掃うて纖莖なし。
惠澤、飛走に及び、農夫盡く歸耕す。
廣漢水萬里、長流玉琴の聲。
雅頌、吳越に播き、還た泰階の平かなるが如
小子、金陵に別れ、來る時白下の亭。
羣鳳、客鳥を憐み、差池、相哀鳴。
各〻五色の毛を拔き、意重くして泰山輕し。
贈ること微にして、費すところは廣く、斗水、長鯨に澆ぐ。
劍を彈じて苦寒を歌ひ、嚴風、前楹に起る。
月は銜んで天門曉け、霜は落ちて牛渚清し。
長嘆、歸路に卽き、臨川、空しく屏營。

【字解】【一】金鏡　北堂書鈔に「尙書考靈曜に云ふ、秦、金鏡を失ひ、魚目珠に入る」とあつて、その註に「金鏡は明道に喩ふるなり」とある。【二】讎　土ぐもる。【三】亡新　新は王莽の國號。【四】天經　天の常道。【五】高光　漢の高祖と光武。【六】雷曹　蓋何と曹參。【七】幌帆　前に見ゆ、不安の貌。【八】耿賈　耿弇と賈復。【九】棲棲　棲星に同じ。【一〇】三台　春秋含漢孳に「三公は、天に在つて三台に法り、九州は、北斗に法る」とある。【一一】四豪　漢書に「列國の公子、魏に信陵あり、趙に平原あり、齊に孟嘗あり、楚に春申あり、皆王公の勢を藉り、賢うて游俠を爲し、鷄鳴狗盜、賓客せざるなく、皆以て重きを諸侯に取り、名を天下に顯はし、蜂擧して游談するもの、四豪を以て稱首となす」とある。【一二】翦冠　年二十ないふ、禮記の孔穎達正義に「二十、人と成り、初めて冠禮を加ふ。體、猶ほ未だ壯ならず、故に翦冠といふ」とある。【一三】魯連　魯仲連、談笑して秦軍を却けしこと、前に數ぶ見ゆ。【一四】季布　史記に「單于、かつて書を爲つて、呂后を嫚る、呂后、大に怒り、諸將を召して之を議す。上將軍樊噲曰く、臣、願はくは、十萬の衆を得て匈奴中に橫行せむ、と。諸將、皆、呂后の意に阿つて曰く、然りと。季布曰く、樊噲、斬るべきなり。夫れ、高帝、兵四十萬衆に將として、平城に困む。今、噲、奈何ぞ、十萬の衆を以て、匈奴中に橫行せむや、面欺なり。且つ、秦、胡を亡ぼすを以て、陳勝等起る。今、瘡痍未だ復えず、噲又面諛して天下を動搖せしめむとす、と。この時、殿上皆恐る、太后、朝を罷めて、復た匈奴を擊つの事を議せず」とある。【一五】礎數絕　交道相得れば、品命異なるありと雖も、礎數を爲さざるを云ふ。【一六】山陽五百年　晉康は河內の山陽縣に寓居して、竹林の游を爲した、それが李白の時からは、五百年を隔つるといふ意。【一七】振林木　博物志に「薛譚、謳を秦青に學び、未だ青の旨を窮めず、遂に辭して歸る。秦青、乃ち郊衢に餞し、節を撫して悲歌す、聲、林木を動かし、響、行雲を遏む」とある。【一八】崩雲　鮑照の飛白書勢銘に「輕きこと游霧の如く、重きこと崩雲に似たり」とあり、昭明太子の錦囊書に「軍陣、崩雲の勢を引く」とある。【一九】華星　光の花やかな星。【二〇】掾　蓋ふ。【二一】蘼草　草を除く。【二二】飛走　禽獸に同じ。【二三】廣漢　詩の國風に、漢之廣矣、不可泳思とあつて、漢水を指す、その下流が當塗の近くを通るのである。【二四】長流玉琴聲　宓子賤が琴を彈じて單父治まりしこと、前に見ゆ。玉琴の聲、長流萬里、漢水の聲と相應ずるないふので、倒裝の句法である。【二五】泰階平　天下太平なるをいふ。【二六】白下亭　圖經に「白下亭は、上元縣北に在り」とあり、景定建康志に「舊志、白下亭は驛亭なり、舊と城東門外に在り、李白の獻從叔當塗宰陽冰の詩に曰く、小子別金陵、來時白下亭、留別金陵諸公の詩に

曰く、五月金陵西、謝三亭白下亭、又云ふ、謝亭三楊樹、正當二白下門一、接予るに、この亭、府の西に在り、蓋し新舊各一處に在り、舊志指すところは、これ其新なる者のみ」とある。【二七】 差池　詩の國風に、燕燕于飛、差池其羽とある。差池とは、その尾翼を張舒すること。【二八】 苦寒　苦寒行、古しへの清商曲、行役寒に遇ふに因つて作る。【二九】 天門　元和郡縣志に「博望山は、宣州當塗縣西三十五里に在り、和州と對岸、江の西岸の山を蟠山といふ、兩山相望んで門の如く、俗、これを天門山といふ」とある。【三〇】 牛渚　宣州當塗縣北三十五里に在つて、山、江中に突出す、これを牛渚圻といひ、古しへの津渡の處、舊唐書に「牛渚山、一名采石、當塗縣北四十五里、大江の中に在り」と記してある。【三一】 髣髴　彷彿の意。

【題義】 唐の江南西道宣州に當塗縣があつて、その縣令は、李陽冰といひ、李白の從叔に當り、白が死んだのも、その處に於てしたのである。宣和書譜に「李陽冰、字は少溫、趙郡の人、官、將作少監に至る。詞章を善くし、心を小篆に留む。三十年に及びて、はじめて、李斯の嶧山の碑と仲尼の延陵季子の字とを見て、遂に其法を得、乃ち能く變化開合、自ら一家と名づけ、字學を推原し、筆法論を作り、以てその點畫を別つ。又かつて說を立てて謂ふ、天地山川に於ては、その方員流峙の形を得、日月星辰に於ては、その經緯昭回の度を得、近くは、これを身に取り、遠くは萬類に取り、幽は鬼神の情狀に至り、細は喜怒の舒慘に至るまで、畢く載せざるはなし。後人、以て此を明かにするに足らず、ここに於て、誤謬滋す多く、義理地を掃ふ。李斯の博雅と雖も、束を以て束となし、蔡邕の書を知るも、豐を以て豐と爲す、故に孔壁の餘文、汲冢の舊簡存するところ、幾ばくもなし、幸にして、天、未だ斯文を喪さず、宗旨あるのみ。その許愼よりここに至るまで、刊定說文三十卷を作り、以て其學を紀す、人、指して以て蒼頡の後身となす。時に方つて、顏眞卿、書を以て世に名あり、眞卿の碑を書する、必ず陽冰を得て、その額に題し、以て連璧の美を擅にせむと欲す。蓋し、その篆法の天下に妙なること、かくの如し。議者、蟲蝕鳥跡を以て、その形を語り、風行雨集、その勢を語り、太阿龍泉、その利を語り、嵩高華岳、その峻を語る、實に過論と爲さず。有唐三百年、篆を以て稱せらるるもの、唯だ陽冰獨步するのみ」とある。李陽冰は、かくの如く、篆書、幷に字學を以て世に知られ、又詞藻に長じ、さすがに李白の從叔たるに愧ぢぬ人であつて、白の歿後、その本集をも整理した。この詩は、李白が、陽冰に贈つたので、又實にその人物材藝を盡して居る。

【詩意】 むかし、戰國の頃、金鑑に比すべき明道は、土ぐもつて暗くなり、次に、漢末には、王莽が國を簒して新と號し、一時、天の常經を亂した。しかし、戰國より秦を經ては高祖、王莽の時には光武といふ樣に、聖明の天子が出て來て、その騷亂を濟つたが、無論、獨力ではなく、羽翼となるべき大人物が自然有つたのである。高祖の臣には蕭何・曹參といふ樣な人があつて、世路の險艱を安んじ、光武の下には耿弇・賈復といふ人人があつて、彗星を拂ひ除けて妖氛を消し、再び天下を昇平に歸すことが出來た。わが家の季父李陽冰といふ人は、聖代の英才中、特に傑出した一大偉才であつて、三公の位なしと雖も、むかしの孟嘗・平原・信陵・春申といふ四豪の虛名を借ることがなく、微官に居て、餘財がなくても、その偉らい處は、早くから、發揮されて居た。そこで、風雲の氣を激昂し、自

然に、龍虎の精神に協ひ、やがて、必ず大事業を成すべきものといつて、囑望された。されば、年二十に成つたばかりの頃、燕趙の片田舎から、長安に來た處が、羣彥は、待つて居ましたと云はぬばかりに、盛に逢迎した。かくて、陽冰は、古しへの魯仲連の如く、談笑の間に、大事を處決し、又季布が呂后の面前で、樊噲の進言を折いた樣に、少しも容赦せず、諤諤の大議論を述ぶるを常とした。しかし、交道相得て、區區たる虛禮を事としないのは、勿論の事であるが、この世では、さうばかりも行かず、さうすると兎角受けが惡い。そこで、人知れず心に憂へつつ、夜ごとの夢を結び、平生の宿志も、久しい間には、だんだん冥くなつて、實行が出來さうでも無いやうになつた。折角、青雲に上り、高位高官を博し得べき天晴の大器ありながら、思ふ樣に成らぬ處から、自然、不平を酒にまぎらすといふので、誤つて、玉樽を捧げて、心の儘に傾けるやうに成つた。かの嵇康が山陽の地に於て竹林の徒と遊んでより、ここに五百年、その緣竹は、再び榮え、わが李陽冰も、同じやうな眞似をして、世に傲り、醉中に高歌する聲は、林木を振はすべく、大笑すれば、雷霆よりも喧しい位。陽冰は、もとより多藝の人、就中字が大得意で、筆を落して篆字を書くと、謂はゆる崩雲の勢は、人をして驚嘆せしむるばかり。それから、詩文にも長じ、辭を吐けば、炳煥として輝きわたり、五色爛然たるは、花やかに光る羣星を霄間に羅列したやうである。そこで、名句は、大江の兩岸に傳へて、人人の口に誦せられ、高才は、朝廷をも蔽ふ位、今や、陽冰は微官を得て、當塗の縣令と成つたが、何分亂後の事で、治を布くことは、なかなか六つかしく、城中には、人家もなく、唯だ浮雲が其上に留まつて居るばかり、居民は、草を薙いで地上に一本の莖も殘つて居ない樣に、盡く流亡して仕舞つたのである。陽冰は、牧民の手腕を揮つて、至治を爲し、その德澤は、禽獸にも及ぶ位であるから、一旦逃げ去つた農民も、再び歸つて、耕作に從事する樣になり、かの宓子賤が琴を彈じて、單父自ら治まつたといふ樣に、玉琴の聲は、長流萬里の稱ある漢水の河音と自然相應じて聞こえ、雅頌の聲は、吳越一帶の地に布き、天下太平の日を宛ら此に現出した樣である。私は、金陵の地を去つて、愈よ此に來る時、白下亭に於て、知己の人人と別を惜んだが、流石に皆皆同情を寄せ、たとへば、羣鳳が客鳥を憐み、その尾や翼を舒べて、互に哀鳴するが如くであつた。かくて、各〻五色の毛で造つた彩筆を揮つて、送別の詩などを作つて呉れたが、その別意の重きは、泰山をも輕しとする位。さはいへ、贈つて呉れたものは、極めて輕微である上に、わが費すところ極めて廣いから、一斗ばかりの水を長鯨に注ぎ懸けた樣なもので、何の足しにもならず、依然として、窮苦を嘆きつつ、劍を彈じては、折から苦寒行を歌ひ、きびしい北風が檀より吹き起るに際しては、ほとほと堪へ兼ねて閉口した。それから、この當塗に來たが、曉、早く殘月は天門山に銜まれ、霜落ちて、牛渚一帶の清げなるを望み、わが歸路の悠遠なるを知り、川に望んで、彷徨するばかり。年老いて未だ故鄉に歸り得ず、何分にも、宜しく、御世話に預りたいものである。

【餘論】起首より季布折二公卿一に至るまでは、主として陽冰の人物を寫し、遙知禮數絶より高才揆二天庭一に至るまでは、その壯時の閲歴を敍し、宰邑艱難時より還如二秦階平一に至るまでは、當塗令として、政績大に擧がれることに及び、小子別二金陵一以下は、自己が金陵から此に來て、大に世話に成つたことを謝し、且つ今後とも何分宜しくといつて依囑したのである。嚴滄浪の評に「情事袤延、その長きを覺えず」とあるが、簡にして盡して居る。

書懷贈南陵常贊府

懷を書し、南陵常贊府に贈る

歳星入漢年。方朔見明主。
歳星、漢に入るの年、方朔、明主に見ゆ。
調笑當時人。中天謝雲雨。
調笑す當時の人、中天、雲雨を謝す。
一去麒麟閣。遂將朝市乖。
一たび、麒麟閣を去り、遂に朝市と乖く。
故交不過門。秋草日上階。
故交、門を過ぎず、秋草、日に階に上る。
當時何特達。獨與我心諧。
當時、何ぞ特達、ひとり、我が心と諧ふ。
置酒凌敵臺。歡娛未曾歇。
酒を置く凌敵臺、歡娛、未だ曾て歇まず。
歌動白紵山。舞廻天門月。
歌は動かす白紵の山、舞は廻る天門の月。
問我心中事。爲君前致辭。
我が心中の事を問ふ、君が爲に、前んで辭を致す。
君看我才能。何似魯仲尼。
君看よ我が才能、魯の仲尼に何似。
大聖猶不遇。小儒安足悲。
大聖、猶ほ不遇、小儒、安んぞ悲むに足らむ。
雲南五月中。頻喪渡瀘師。
雲南五月の中、頻りに、渡瀘の師を喪ふ。
毒草殺漢馬。張兵奪秦旗。
毒草、漢馬を殺し、張兵、秦旗を奪ふ。
至今西二河。流血擁僵屍。
今に至つて、西二河、流血、僵屍を擁す。
將無七擒略。魯女惜園葵。
將に七擒の略なく、魯女、園葵を惜む。
咸陽天下樞。累歳人不足。
咸陽は天下の樞、累歳、人足らず。
雖有數斗玉。不如一盤粟。
數斗の玉ありと雖も、一盤の粟に如かず。
賴得契宰衡。持釣慰風俗。
賴に宰衡と契するを得、釣を持して風俗を慰めむ。
自顧無所用。辭家方來歸。
自ら顧るに、用ふる所なく、家を辭して、方に來歸す。
霜驚壯士髮。淚滿逐臣衣。
霜は驚かす壯士の髮、淚は滿つ逐臣の衣。
以此不安席。蹉跎因世違。
これを以て席を安んぜず、蹉跎、世と違ふに因る。

終當滅衛謗。不受魯人譏。

終に當に衛謗を滅し、魯人の譏を受けざるべし。

【字解】【一】歲星　太平廣記に「東方朔、未だ死せざるの時、同舍の郎に謂つて曰く、天下の人、能く朔を知るなし、朔を知るものは、惟だ太王公のみ、と。朔の卒後、武帝、この語を得、太王公を召して之に問うて曰く、爾、東方朔を知るか。公對へて曰く、知らず、と。公、何の能くするところ。曰く、顧る星曆に善し、と。帝問ふ。諸星皆具に在りや否や。曰く、諸星具に在り、ひとり、歲星のみ見ざること十八年、今復た見ゆるのみ、と。帝、天を仰いで嘆じて曰く、東方朔、生きて陛の旁に在ること十八年、しかも是れ歲星なるを知らざるか」とある。【二】凌蔽臺　圖經に「凌蔽臺は、當塗縣城北、黃山の上に在り、宋の武帝、南游し、かつて此臺に登り、因つて、離宮を建つ」とあり、太平寰宇記に「黃山は、太平州當塗縣の西北五里に在り、上に宋の凌蔽臺あり、周圍五里一百步、高さ四十丈、石碑見に存す」とある。【三】白紵山　當塗縣東五里に在り、本名は楚山、桓溫、敍を領して此山に遊んで、樂を奏し、好んで、白紵歌を爲す、因つて改めて名づく」とある。【四】天門　山名、すでに前に見ゆ。【五】渡瀘師　唐書に「天寶十載四月壬午、劍南の節度使鮮于仲通、雲南蠻と西洱河に戰つて、之に死す」とある。西洱は、卽ち葉榆河、雲南大理府の點蒼山より出で、瀘して巨湖となり、周三百里、亦た西洱海と稱する。傳へて、その形、人の耳のやうだといふ。西二は卽ち西洱。【六】秦族　關中の地は古しへの秦地であるから、關中の兵族を秦族と云つた。【七】七擒略　三國志の註に「漢晉春秋に曰く、諸葛亮、南中に至り、所在戰捷、孟獲といふもの、夷漢に服せらるると聞き、遂つて、之を生致す。すでに得るや、營陣の間を觀せしむ、問うて曰く、この軍何如。獲曰く、さきに虛實を知らず、故に敗る。今營陣を賜觀するが蒙る。若し紙だ此の如きのみならば、卽ち定めて勝ち易きのみ、と。亮笑つて縱ち、更めて戰はしむ。七縱七擒、亮、猶ほ獲を遣る。獲、止まつて去らず、曰く、公は天威なり、南人復た反せず」とある。【八】魯女　烈女傳に「魯の漆室の女、時を過ぎて、未だ人に適かず。穆公の時に當つて、君老い、太子幼なり、女、柱に倚つて嘯く。その鄰人の婦、これに從つて遊び、謂つて曰く、何ぞ嘯くの悲しき、子線せむと欲するか、吾、子が爲に偶を求めむ。漆室の女曰く、嗟乎、吾、豈に線せざるが爲に、樂まずして悲まむや。吾、魯君老い、太子幼なるを憂ふ。鄰女笑つて曰く、これ乃ち魯の大夫の憂、婦人何ぞ與らむ。漆室の女曰く、然らず。むかし、晉客、吾が家に舍し、馬を園中に繫ぐ。馬逸して馳せ走り、吾が葵を踐み、我をして、終歲葵を食はざらしむ。今魯君老悖、太子少愚、奸僞日に起る。魯國愚ならば、君臣父子、皆その辱を被り、禍、衆庶に及ばむ。婦人ひとり安んぞ遽くるところ。吾甚だ之を憂ふ。子、乃ち婦人與るなしといふ者は何ぞや。鄰婦謝して曰く、子の慮るところ、妾の及ぶところに非ず、と。三年、魯果して亂れ、齊楚、これを攻め、魯、遂りに寇あり、男子は戰鬪、婦人は轉輸、休息を得ず」とある。【九】天下樞　樞は要。【一〇】宰衛　周公は太宰、伊尹は阿衡、伊周の尊を采つたので、漢末安漢公王莽の號とした、後世では宰相をいふ。【一一】衛謗　史記に「孔子、衛に適いて南子に見ゆ。子路、悅ばず。孔子、これに矢つて曰く、予の否らざるところの者、天、これを厭てむ、天、これを厭てむ」とある。

【題義】南陵贊府は、前に見えて居た。この詩は、南陵の贊府たりし常某に贈つたのである。

【詩意】むかし、東方朔は、歲星の轉生したもので、漢に入つて、武帝に見え、滑稽を以て世に鳴り、當時の人にからかひ、やがて、雲雨に乘じて中天に登つて仕舞つた。われも、東方朔を學ぶ積りであつたが、羣小に妬まれて放逐せられ、一たび麒麟閣を去つてよりは、遂に朝市と乖いて、全く離羣索居の狀態、されば、舊交の人人も、門を敲いて來訪することなく、階前には、秋草が日にまし生長する位。然るに、君のみは、特達の天資を以て、われを棄てずに、隨分懇に世話をもして呉れた。かくて、凌蔽臺上に置酒し、ともに、歡娛して、しばらくも歇むこと無く、歌聲は白紵山に響き、舞影は天門山の月に廻り、歌舞して、日を送るを常とした。かくて、我に心中の事を問はれしに因り、我は、君の爲に、前んで辭を致し、遠慮なく思つて居る事を述べる始末。君は、我が才能を孔子に比較して、

どうであると考へられるか。その相及ばざることは無論の事、それで、孔子の如き大聖すら、一生不遇であつたのだから、小儒、予の如きものは、たとひ放逐されたとても、格別悲むにも及ばぬことである。今しも、雲南に於ては、兵を用ひて居るが、熱帯に近い處であるから、五月の眞夏、その暑い事は非常なもので、瀘水を渡つた軍隊は、相繼いで、陣歿して仕舞ひ、毒草は、中國の馬を殺し、處處に陣を張る蠻兵は、王師の旗を奪つて仕舞つた。今に至るまで、西洱河の邊では、屍骸が積み重つて、流血混混たる有樣。むかし、諸葛亮は、孟獲を七擒七縱し、その爲に、蠻族が其後心服したといふ、が、今日の大將には、さういふ材略が無いから仕方がない。魯國の女は、晉客の馬に園中の葵を蹂みにじられた事から思ひ付いて、魯君年老い、太子幼愚、やがて、國中に騒動が起るといつて、非常に心配したが、刻下の世に於て、われも、同感に堪へぬ。長安は、天下樞要の地であるが、この遠征の爲に、毎年人民が徵發されて、戶口不足となり、おまけに、米價騰貴し、數升の玉も一盤の粟ほどの値が無いといふ位。かくの如く、內憂外患、交も生じた上は、邦家の前途は、まことに寒心すべきことである。顧はくは、古しへの伊尹周公の如き賢宰相を得、大鈞を持して、風俗を慰め、蒼生を塗炭に濟ふやうにして貰ひたい。われは、自ら顧るに、材識謟劣、まことに、無用の身で、一たび家を辭した儘、未だ歸らず、昔日の壯士も、今は頭上に霜を戴き、今日の逐臣は、涙下つて衣を霑すばかり。かくて、諸方に流浪して、席を安んぜず、一身蹉跎、兎角、世と相違うて、平生の夙志を遂げることは出來ない。しかし、飽くまで正道を守つて、己の身を持して行く積りで、孔子が衞に往つて、南子に見え、その爲に色色言はれたといふやうな事の無い樣にし、かの子路輩の謗をも受けないやうにする覺悟で、どうか、この點を重んじて、わが人物を見て戴きたい。

【餘論】この詩は、自分の志操を述べたもので、少しも、常贊府の事に及ばぬので、さればこそ、題を書懷としたのである。歳星入レ漢年以下八句は、長安を放逐されるまでの事、當時何特達以下八句は、常贊府との交誼、君看我才能の四句は、孔子との比較、雲南五月中より以下十二句は、當時の內憂外患、賴得レ契二宰衡一より以下十句は、自己の希望と志操とを述べたのである。雲南の征戍は、天寶十載より十三載に亙り、米價の騰貴は、同じく十二三載の事で、舊唐書に「天寶十二載八月、京城霖雨、米貴し、太倉の米十萬石を出し、價を減じて、貧人に糶與せしむ。十三載秋、霖雨、六十餘日を積み、京城の垣屋頹壞、殆んど盡き、物價暴貴、人多くして食に乏しく、太倉の米一百萬石を出して、開場賤糶、以て貧民を濟はしむ」とある。されば、この詩は、安史の亂の前に作つたのである。

贈汪倫

汪倫に贈る

李白乘レ舟將欲レ行。　李白、舟に乘じて、將に行かむと欲す。
忽聞岸上踏歌聲。　忽ち聞く、岸上踏歌の聲。

【字解】【一】踏歌　通鑑唐紀に「開知幾、虜の爲に踏歌す」とあつて、胡三省の註に「踏歌する者は、手を連れて歌ひ、地を踏み、以て節を爲

309
65

桃花潭水深千尺。桃花の潭水、深さ千尺。
不及汪倫送我情。及ばず汪倫が我を送るの情。

すなり」とある。一統志に「桃花潭は、寧國府涇縣の西南一里に在り、深さ測るべからず」とある。

【題義】楊齊賢の説に「白、涇縣の桃花潭に游ぶ。村人汪倫、常に美酒を醞し、以て白を待つ。倫の裔孫、今に至るまで、その詩を寶とす」とあつて、李白は、汪倫の厚意を謝するが爲に、特に此詩を作つて贈つたのである。

【詩意】李白は、涇縣に遊び、やがて將に遠行せむとして舟に乘ると、忽ち岸上に於て、手を連ね、地を蹋んで歌ふ聲がするのを聞いた。それは、村人の汪倫といふものが、われに自製の美酒を薦めむが爲に、態態來たとのことで、その厚意は、謝するに言葉なきばかり。ここの桃花潭は、深さ千尺と稱すれども、汪倫の情義の深きに比すれば、到底、物の數ではない。

【餘論】唐汝詢の言に「倫は、一村人のみ、何ぞ白に親あらむ。すでに酒を醞し、以て之を候し、復た行に臨み、以て之を祖す、情、もとより超俗、太白、景切情眞なる處に於て、手に信せて拈出す、千古に調絶せる所以。後人、これに效ひ、欲レ問江深淺、應レ如三遠別情一の如き、語、佳ならざるに非ざるも、終に是れ杞柳栝蔕のみ」とある。

終